

べん が だけ  
弁 ケ 嶽

—遺 構 確 認 調 査 報 告—

## 序

本書は、市内遺跡発掘調査等として国の補助を受けて 2013（平成 25）年度に実施した沖縄県指定史跡「弁ヶ嶽」の遺構確認調査の成果報告です。

「弁ヶ嶽」は、首里城の東方約 1 キロの所にあつて、俗に「ビンヌウタキ」とも呼ばれています。御嶽は大嶽と小嶽の二つに分かれ、それぞれに神名が伝わっています。沖縄戦で消失した大嶽の石門は、1519 年（正徳 14 年）に首里城歎会門と守札門の間にある「園比屋武御嶽石門」とともに築かれたとされ、構造や工法も類似していたようです。現在のコンクリート造りの門は、1954 年（昭和 29 年）、ハワイの「うるま一心会」からの寄付金と首里烏堀町民の奉仕で建てられたものです。また、かつて、石門前には拝殿とよばれる建物があったことが知られています。

今回の調査は、大嶽石門前に所在していたとされる拝殿の遺構確認調査を主な目的に実施しました。

注目されたことは、敷石遺構が良好に保存されていることが確認されたことです。拝殿に伴う明確な礎石などの関連遺構は確認されなかったものの、貴重な成果と考えます。

出土遺物としては、敷石遺構の下層から多くの銭貨（無文銭）が得られています。これは、拝所である「弁ヶ嶽」の特徴を物語る好資料と言えます。

今後、周辺での確認調査を進めることで琉球王国時代における精神文化の一端が明らかになるものと期待しています。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々にも活用され、文化財保護行政の一助となることを希望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

2017（平成 29）年 3 月

那覇市長 城間 幹子

## 例 言

1. 本報告書は、国（文化庁）の補助を受けて、那覇市が2013（平成25）年度に実施した「弁ヶ嶽遺構確認調査」の成果を収録したものである。

2. 論考は以下の先生方に執筆いただいた。記して感謝申し上げる。

論考1 弁ヶ嶽史料調査報告

深澤秋人（沖縄国際大学・那覇市文化財調査審議会委員）

論考2 弁ヶ嶽について—近代以降を中心に—

栗国恭子（沖縄国際大学・沖縄県立芸術大学・那覇市文化財審議会委員）

論考3 弁ヶ嶽の建築的考察

平良啓（公益社団法人 沖縄県建築士会）

3. 資料（論考・文献資料・絵図資料・写真資料）の掲載にあたり、那覇市歴史博物館（鈴木悠氏）、沖縄県教育庁文化財課、沖縄県立博物館・美術館（三枝大悟氏）、沖縄県立図書館（松田陸氏）、沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館（川島祥子氏・古謝茜氏）、沖縄総合事務局（南部国道事務所：目取眞正樹氏・国営沖縄記念公園事務所：池田豊氏）、沖縄県公文書館（川島淳氏）、鎌倉秀雄氏（御家族様）、沖縄タイムス社、那覇出版社、株式会社 平凡社、株式会社 KADOKAWA、株式会社 岩波書店、座右刊行会、東京美術など多くの関係者にご協力、ご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。

なお、掲載した資料の典拠・所蔵等については、各扉及び、資料の文末・下段に記した。

4. 調査および資料整理は下記の方々に指導・協力を得た。記して感謝申し上げます。

- ・山下信一郎氏（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官）
- ・上地博氏（沖縄県文化財課記念物班 班長）
- ・羽方誠氏（沖縄県文化財課記念物課 主任専門員）
- ・瀬戸哲也氏（沖縄県立埋蔵文化財センター 主任専門員）
- ・沖縄県企画部土地対策課
- ・鳥堀町自治会・県営鳥堀市街地住宅自治会・鳥小堀自治会
- ・那覇市公園管理課・那覇市道路管理課
- ・合同会社 丸清重機・有限会社 共栄総業
- ・宮城みさ子・西銘定子・豊里加奈子・国吉真由美・大城亜姫代・石原愛子・宮良知子・徳元剛（以上、現・元那覇市非常勤職員）
- ・佐渡山正子・宮国恵子・中塚末子・島仲恵子・呉我フジ子・喜瀬彰・泉谷類（以上、元那覇市臨時職員）

5. 図版1の空中写真(2010年9月27日撮影)、第1図の那覇市全図(S=1:50,000 平成19年12月1日発行)、第2図の那覇市全図(S=1:25,000 平成22年11月1日発行)は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
6. 第1図に使用した広域図は、坂本幸雄 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ『ブリタニカ国際地図』1991年7月1日(第2版改訂発行)の91ページの部分をトレースして使用した。
7. 第3図は、「首里地区 旧跡・歴史的地名地図 縮尺1/6,000 1998年3月 那覇市文化局歴史資料室」の部分を複写して使用した。
8. 第4図は、『琉球国絵図史料集 第三集 一天保国絵図・首里古地図及び関連史料』沖縄県教育委員会 平成六年三月 P106・107「鳥小堀村」を複製・トレースして使用した。
9. 第5図は、「1:10000 地形図 那覇」(平成17年4月1日 国土地理院発行)を部分的に複写して使用した。
10. 第6図は、那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』昭和54年1月30日 付図「那覇全図(大正10年参謀本部陸地測量部測図5万分の1の地形図を拡大したもの)」の一部を転載した。
11. 第7図及び論考2の図1は、平成26年度弁ヶ嶽の現況図面編集業務として株式会社琉球サーベイに委託し、作成したものを使用した。なお、図に示した座標系(第XV系)の数値は、世界測地系である。
12. 第1表は、「開発調整マップ」文化財分布図(1998年3月版) 1:10,000 那覇市教育委員会文化課の表部分から引用して作成した。なお、第2図には、同資料を参考に位置をプロットした。
13. 本報告書の編集・執筆は、論考執筆の上記先生方及び島弘・真栄城和美・請盛智秋・山下真利子・加納立巳の協力を得て、仲宗根が行った。
14. 遺物実測図の番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。
15. 出土遺物は那覇市 市民文化部 文化財課で保管している。

## 目次

序  
例言

第I章	調査に至る経緯	1
第II章	遺跡の位置と環境	1
第III章	調査経過と調査組織	11
	第1節 調査経過	11
	第2節 調査組織	13
第IV章	層序	15
第V章	遺構	17
第VI章	遺物	19
	1. 白磁	19
	2. 青花	19
	3. 褐釉陶器	19
	4. 本土産磁器	19
	5. 沖縄産施釉陶器	22
	6. 沖縄産無釉陶器	23
	7. 簪	23
	8. 円盤状製品	23
	9. 煙管	24
	10. 土器	24
	11. ガラス製小玉	24
	12. 石製品	24
	13. 瓦	24
	14. 銭貨	25
第VII章	まとめ	55

## 論考

- 論考 1 弁ヶ嶽史料調査報告（深澤秋人）・・・・・・・・・・・・・・83
- 論考 2 弁ヶ嶽について－近代以降を中心に－（栗国恭子）・・・・・・・・・・・・86
- 論考 3 弁ヶ嶽の建築学的考察（平良啓）・・・・・・・・・・・・・・103

## 参考資料

- 文献資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
- 絵図資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
- 写真資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134

## 報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	那覇市の位置と遺跡の位置	・ 3
第 2 図	弁ヶ嶽と那覇市の御嶽等拝所	・ 4
第 3 図	首里地区旧跡・歴史的地名地図	6
第 4 図	鳥小堀村(首里古地図)	・ 7
第 5 図	弁ヶ嶽周辺の地形(平成17年)	・ 8
第 6 図	弁ヶ嶽周辺の地形(大正10年)	・ 9
第 7 図	調査位置図	・ 10
第 8 図	遺跡の層序	・ 16
第 9 図	調査区平面図	・ 18
第 10 図	白磁、青花、褐釉陶器、 本土産磁器	・ 41
第 11 図	沖繩産施釉陶器	・ 42
第 12 図	沖繩産無釉陶器	・ 43
第 13 図	簪	・ 44
第 14 図	円盤状製品	・ 45
第 15 図	煙管、土器、ガラス製小玉	・ 46
第 16 図	石製品	・ 47
第 17 図	瓦①	・ 48
第 18 図	瓦②	・ 49
第 19 図	瓦③	・ 50
第 20 図	瓦④	・ 51
第 21 図	銭貨①	・ 52
第 22 図	銭貨②	・ 53
第 23 図	銭貨③	・ 54

## 挿表目次

第 1 表	那覇市の主な御嶽等拝所	・ 5
第 2 表	調査工程	・ 11
第 3 表	遺物出土一覧	・ 20
第 4 表	白磁観察一覧	・ 26
第 5 表	青花観察一覧	・ 26
第 6 表	褐釉陶器観察一覧	・ 26
第 7 表	本土産磁器観察一覧	・ 27
第 8 表	沖繩産施釉陶器観察一覧	・ 28
第 9 表	沖繩産無釉陶器観察一覧	・ 29

第 10 表	簪観察一覧	・ 30
第 11 表	円盤状製品観察一覧	・ 30
第 12 表	煙管観察一覧	・ 32
第 13 表	土器観察一覧	・ 33
第 14 表	ガラス製小玉観察一覧	・ 33
第 15 表	石製品観察一覧	・ 33
第 16 表	瓦観察一覧	・ 34
第 17 表	銭貨出土一覧	・ 36
第 18 表	銭貨観察一覧①	・ 37
第 19 表	銭貨観察一覧②	・ 38
第 20 表	銭貨観察一覧③	・ 39

## 図版目次

図版 i	土層の堆積状況	・ 15
図版 ii	調査区全景	・ 17
図版 1	遺跡一帯の空中写真	・ 61
図版 2	弁ヶ嶽の遠・近景と調査区全景	・ 62
図版 3	遺跡の層序	・ 63
図版 4	遺構の検出状況	・ 64
図版 5	遺物の出土状況	・ 65
図版 6	作業状況	・ 66
図版 7	作業状況	・ 67
図版 8	白磁、青花、褐釉陶器、 本土産磁器	・ 68
図版 9	沖繩産施釉陶器	・ 69
図版 10	沖繩産無釉陶器	・ 70
図版 11	簪	・ 71
図版 12	円盤状製品	・ 72
図版 13	煙管、土器、ガラス製小玉	・ 73
図版 14	石製品	・ 74
図版 15	瓦①	・ 75
図版 16	瓦②	・ 76
図版 17	瓦③	・ 77
図版 18	瓦④	・ 78
図版 19	銭貨①	・ 79
図版 20	銭貨②	・ 80
図版 21	銭貨③	・ 81

# 弁ヶ嶽遺構確認調査報告

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回の調査は、沖縄県指定史跡「弁ヶ嶽」の遺構確認のために実施されたものである。那覇市が国（文化庁）の補助を受けて2013年度（平成25年度）に調査を実施した。

弁ヶ嶽は、首里城の東約1kmに位置し、参詣道を挟んで、北側の「大嶽」と南側の「小嶽」が所在する。

1938（昭和13）年に国宝に指定されたが、先の大戦で、大嶽の石門が破壊・焼失した。その後、1954（昭和29）年、ハワイの「うるま一心会」からの寄付金と首里島堀町民の奉仕によって現在のコンクリートの門が建てられた。

那覇市では、大嶽の石門を中心とした弁ヶ嶽の復元を目指し、整備計画等を検討しており、周辺住民及び関係機関からの期待が高まっている。

今回の報告は、「大嶽」の石門前に所在していたとされる「拝殿」についての遺構確認調査の成果である。

調査は、平成26年2月18日から3月25日の期間で、那覇市 市民文化部 文化財課によって実施された。

### 参考

那覇市教育委員会 『那覇市の文化財 平成18年度』 平成19年3月

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

「弁ヶ嶽」は、沖縄県那覇市首里島堀町4丁目121、5丁目62に位置する。

那覇市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯24～28度、東経122～133度の南北約400km、東西約1,000kmの海上に弧を描いて連なる160の島しょの内、有人島39からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする1,500kmの円周域には、東京、ビョンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第1図）。

市域は、東西10km、南北8kmの面積39.57km<sup>2</sup>（推計）を測り、北側に浦添市、西側に西原町、南西側に南風原町、南側に豊見城市が接している。人口は、324,128人（平成28年10月末現在）である。

地形は、旧市内を中心とする中央部において、ほぼ平坦面をなし、北側に天久台地、東側

に首里台地、南西側に識名台地、南側に小祿台地等の丘陵・台地地帯がその周辺を取り囲む。その丘陵・台地地帯を源流とする河川が市内を東から流れて東シナ海に注ぐ。市の北側から安謝川、安里川、国場川が西流し、その間に、久茂地川やガーブ川などが流れる。

地質は、島尻層（第三紀中新世）、琉球石灰岩（第三紀新世から第四紀洪積世）、沖積層などの堆積が見られる。その分布状況は、旧市街地及び首里から天久、安謝における一帯並びに識名あたりで琉球石灰岩が露頭し、その他の地域の地表面は島尻層からなっている。旧市内の低地では、海浜堆積物が見られる。

市内の主な御嶽等拝所を第2図（第1表）に示した。多数所在する拝所等の中で、首里城歓会門と守礼門の間に位置する圓比屋武御嶽の石門は、後述するように弁ヶ嶽（大嶽）の石門との関わりが強い建造物である。合わせて、弁ヶ嶽周辺の史跡・歴史的地名を第3図に示す。参考頂きたい。

さて、弁ヶ嶽は、市の北東側、南風原町との市境付近に位置する標高165.7mの丘陵で、安里川の源流である。所在地は、上述のとおり、首里島堀町四丁目である。18世紀初頭に作成されたと考えられる『首里古地図』によれば、「島小堀村」として描かれている（第4図）。同村は、屋敷（名）や寺院（智福院・浄聖庵）の他に田・畠が描かれ、同村の東側に「弁ノ大嶽」「弁ノ小嶽」、中央部分に「瓦墳」が見られる。これは、首里城が17世紀後半に瓦葺きにしたときに使用される屋根瓦を焼成した窯の一つとされる「島堀瓦窯」であろう。

弁ヶ嶽は、琉球王府時代から拝所として重要な役割を担っていたとされる。大嶽と小嶽の二つに分かれ、神名は大嶽が「玉ノミウジスデルカワノ御イベツカサ」、小嶽は「天子」とされる（『琉球國由来記』）。かつては、1・5・9月に国王の親察が執り行われていたとされる。先の大戦で消失した大嶽の石門は、1519（正徳14）年に「圓比屋武御嶽」の石門とともに西塘によって築かれ、その構造・工法も類似していたとされる。1938（昭和13）年、国宝に指定されていた。現在のコンクリート製の石門は、1954（昭和29）年、ハワイの「うるま一心会」からの寄付金と首里島堀町民の奉仕によって建てられ、現在に至っている。かつて石門前には拝殿が所在したとされる（『那覇市の文化財』より引用）。

首里城から弁ヶ嶽への参道について国王尚清の徳を讃えた『国王頌徳碑 かたのはな碑』によると、1543（尚清17）年に道を石畳にして、周辺に松樹を植えるなどして整備したと記されている（『那覇の史跡・旧跡』より引用）。これらの石門及び拝殿、参道は、上記の「首里古地図」でも確認できる（参考資料：絵図資料2・3）。

弁ヶ嶽周辺の地形を第5・6図に、今回の調査地区を第7図に示したので参照頂きたい。

#### 参考文献

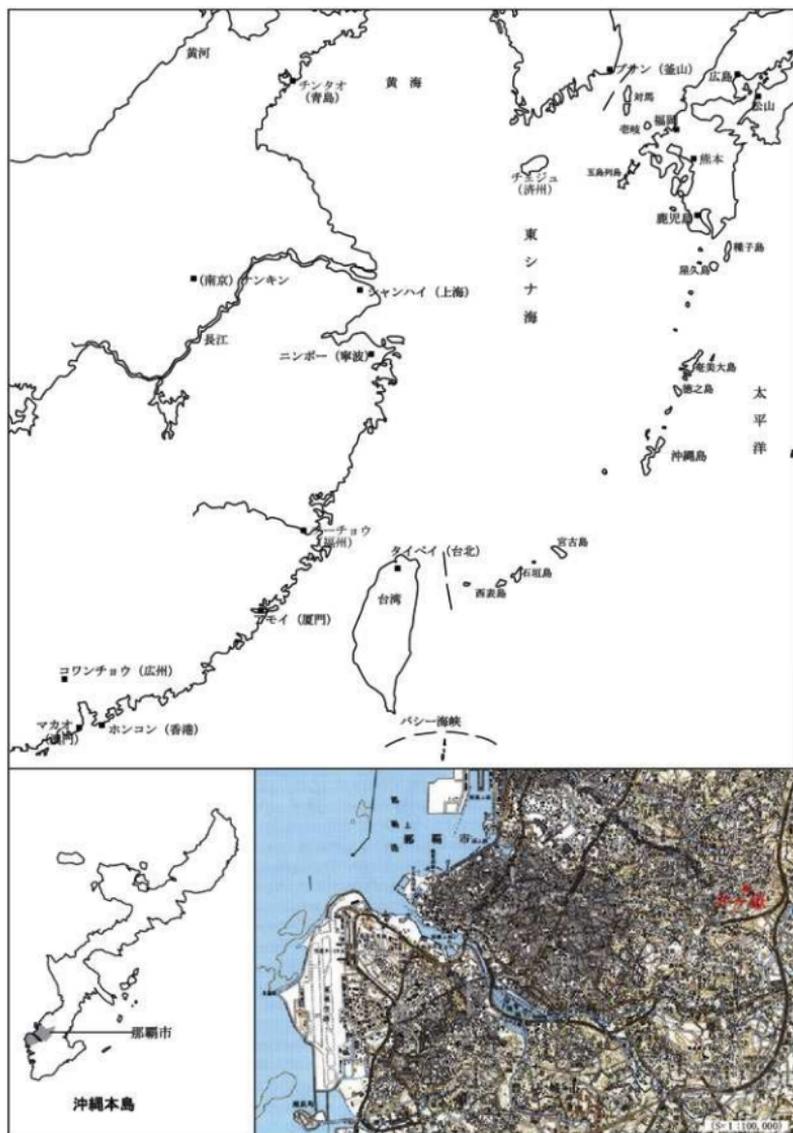
『那覇市 位置・面積』 那覇市ホームページ

『平成28年度 那覇市の教育』 那覇市教育委員会 平成28年8月

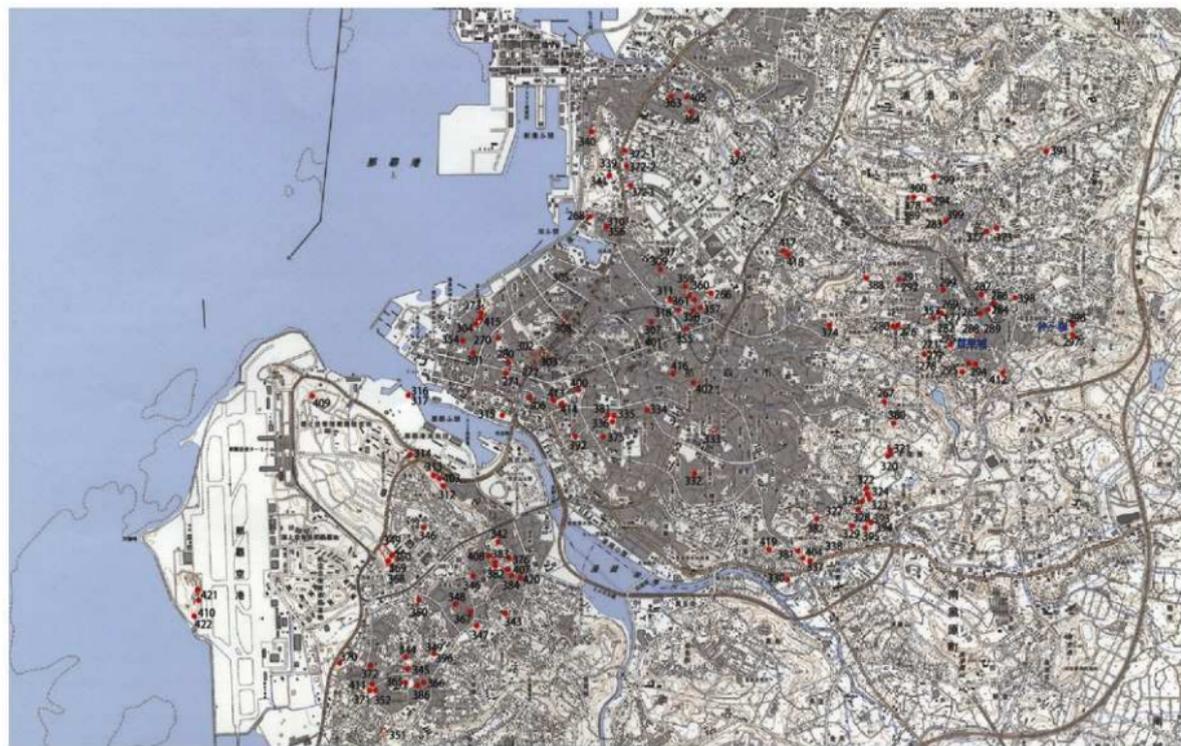
『平成28年度 市政概要』 那覇市議会事務局 平成28年9月

『広報 なは 市民の友 第791号』 那覇市 2016年（平成28年）12月

『開発調整マップ』 那覇市教育委員会文化課 文化財分布図（1998年3月版）



第1図 那覇市の位置と遺跡の位置

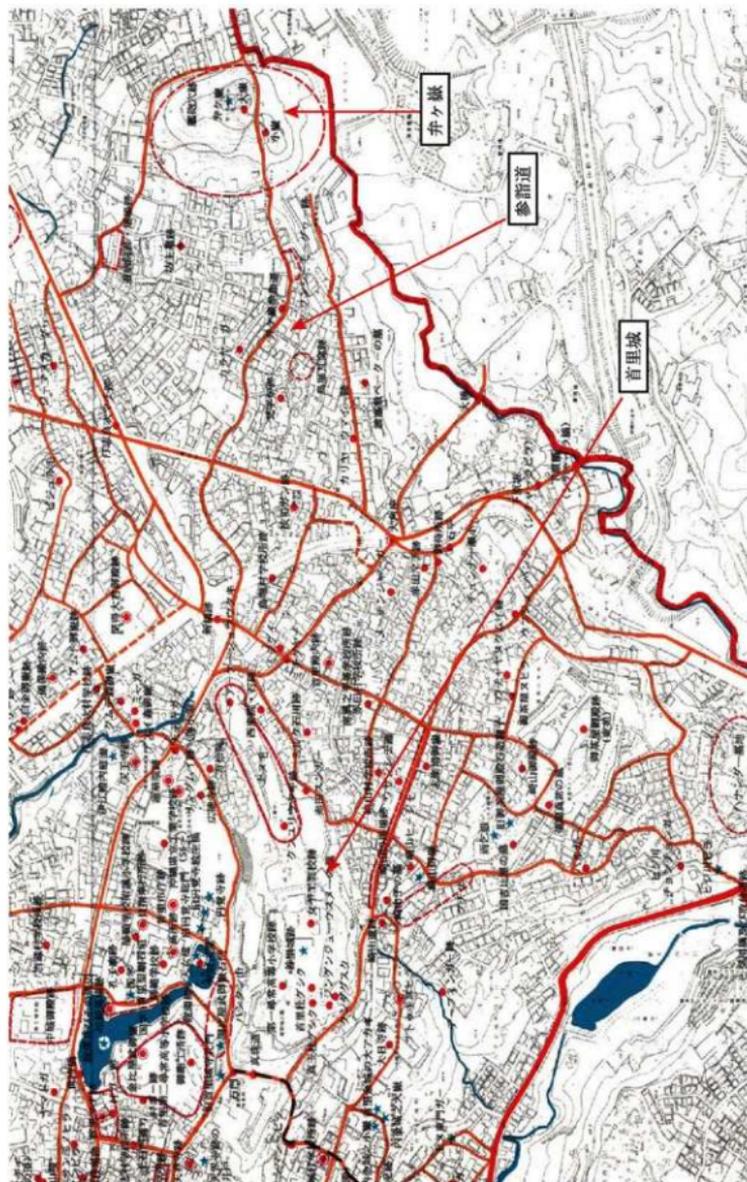


第2図 弁ヶ嶽と那覇市の御嶽等標所

(S=1:50,000)

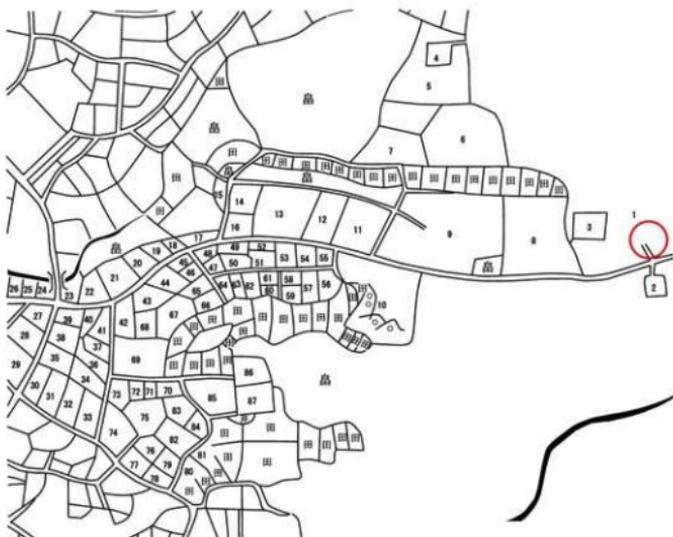
第1表 那覇市の主な御嶽等拝所

No	名 称	No	名 称	No	名 称	No	名 称
266	八幡大菩薩	303	財之神嶽		天久寺嶽	381	火の神
267	結着山大権現(識名宮)	304	当間森	341	天久之小嶽	382	池頭火神
268	天久山大権現(天久宮)	305	アカツラ	342	小嶽ノ嶽	383	田原火神
269	孔子廟	306	大圃(仲島の大石)	343	真玉嶽	384	ノロ火神
270	上天妃廟	307	牧土之嶽	344	トノモトノ嶽	385	瀬川火神
271	下天妃廟	308	イベガマ	345	アヤ森ノ嶽	386	地頭火神
272	孔子廟	309	ヤカン森	346	金城ノ嶽	387	火神殿内
273	天尊廟	309-1	オタセ森御イベ	347	大嶽ノ嶽	388	シーサー
274	御内原ノマモノ内御嶽	310	オシアグ森	348	当間ノ嶽	389	末吉宮シーサー
274-1	わう/内/前/御イベ	311	崇元寺之嶽	349	安次嶽嶽	390	御茶屋御殿の石獅子
274-2	キャウ内ノ御嶽	312	儀間ノ嶽	350	赤嶽ノ嶽	391	シーサー
274-3	キャウ内ノ御嶽	313	洲城ノ嶽	351	アカラ嶽	392	シーサー
274-4	キャウ内ノ御嶽	314	辻森	352	サキヤマ嶽	393	シーサー
274-5	真玉城ノ御嶽	315	鏡筒城	353	カナヒヤンウタキ	394	シーサー
274-6	寄内ノ御嶽	316	ヤヘザ森	354	獅子屋ウタキ	395	シーサー
274-7	アカタ御チャウノ御嶽	317	ヤラザ森	355	東ノウタキ	396	シーサー(安次嶽)
275	ミモノ内御嶽	318	オキナワノ嶽	356	黄金ウタキ	397	土帝君
276	見上森ノ御イベ		アガルイノ嶽	357	上ヌウタキ	398	ビジュアル毛
277	内金城之大嶽	319	多和田之嶽	358	マーチューウタキ	399	土帝君
278	内金城之小嶽		大嶽	359	御吟味ウタキ	400	土帝君
279	メゾラダケノ御イベ		前原之嶽	360	暮打ウタキ	401	土帝君
280	キミコイシ嶽	320	シイマノ嶽	361	里主所ウタキ	402	ビンスル
281	真和志森	321	古堅土地嶽	362	アシンミウタキ	403	土帝君
282	ソノヒヤブノ御イベ	322	スガリノ嶽	363	ウタキ	404	土帝君
283	西森ノ御イベ	323	屋比久之嶽	364	東ヌウタキ	405	ビジュアル
284	クムデ森ノ御イベ	324	高安之嶽	365	下ヌウタキ	406	ビジュアル
285	アスイ森ノ御イベ	325	川門之嶽	366	松川ウタキ	407	ビジュアル
286	アモトダケノ御イベ	326	シモ門嶽	367	鏡水の嶽	408	ニービジュアル
287	白金ダケノ御イベ	327	安次嶽之嶽	368	西ヌウタキ	409	ミーヌシン
288	国中城/アツルダノ御イベ	328	アザノノ嶽	369	中又ウタキ	410	土帝君
289	アカス森ノ御イベ	329	ハンタノ嶽	370	パンクウタキ	411	ボサウ
290	安谷川ノ嶽	330	下国場ノ嶽	371	具志ウタキ	412	チュンナー瀬小
291	中里大嶽	331	豊野城ノ嶽	372	高良ウタキ	413	ハンキヌウガン
292	中里小嶽	332	ヨリノ嶽	372-1	原用毛ウタキ	414	筋荒ウガン
293	崎山ノ御嶽	333	宮城ノ嶽	372-2	イビウタキ	415	ハンキヌウガン
294	末衛増嶽	334	神里ノ嶽	372-3	花城ウタキ	416	西之宮
295	雨乞ノ嶽	335	古波蔵之嶽	373	殿の毛	417	西ノ殿内
296	菟大嶽	336	城嶽	374	殿の前	418	東ノ殿内小
297	菟小嶽ノ御イベ		メカルノ嶽	375	王の殿	419	唐御殿
298	上之嶽		スダロクノ嶽	376	殿	420	根神(サキヤマ)
299	下之嶽	337	仲井真ノ嶽	377	火の神	421	ウフダシク・タマダシク
300	榎木之嶽	338	地道ノ嶽	378	荒神	422	ナカシ
301	コバヅカサ	339	天久之嶽	379	泊大あむ火神		
302	内金宮嶽	340	潮花ヅカサ	380	火の神	177	園比屋武御嶽石門

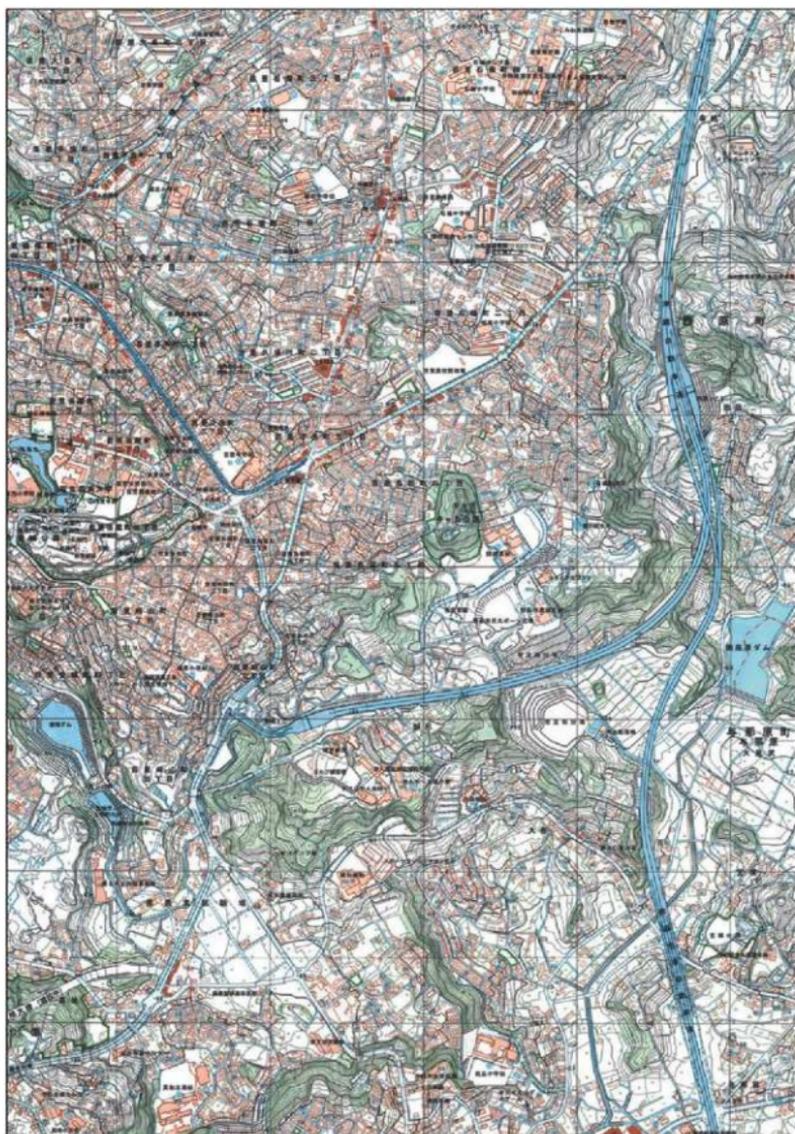


第3図 首里地区旧跡・歴史の地名地図

- 11 鳥小堀村
- 1 弁ノ大塚  
2 弁ノ小塚  
3 智福院  
4 男とく  
5 屋宜控親雲上  
6 浄聖庵  
7 上間筑登之親雲上  
8 長嶺筑登之親雲上思ら  
9 並里筑登之親雲上  
10 瓦墳  
11 栗園筑登之親雲上  
12 栗園親雲上  
13 崎山子  
14 島袋にや  
15 伊地親雲上  
16 前志茂田金松  
17 女こせい  
18 安□親雲上  
19 謝名堂親雲上真浦戸  
20 桃原筑登之親雲上  
21 徳雲  
22 平田筑登之親雲上  
23 玉寄筑登之親雲上思亀  
24 山田子  
25 金城筑登之親雲上  
26 伊地筑登之  
27 城田親雲上  
28 前高原親雲上真牛  
29 宮城筑登之親雲上  
30 喜屋武親雲上
- 31 鉢嶺親雲上  
32 正庵  
33 玉那覇筑登之親雲上  
34 照屋筑登之親雲上  
35 小渡親雲上  
36 上津波古筑登之親雲上  
37 奥浜親雲上  
38 宮里筑登之親雲上  
39 中宗根控親雲上  
40 奥原親雲上後家  
41 上江洲筑登之親雲上  
42 謝名堂親雲上  
43 志喜屋親雲上  
44 運天筑登之親雲上  
45 謝名堂筑登之  
46 男まかる  
47 中宗根にや  
48 当真親雲上  
49 上津波真  
50 大城親雲上  
51 比嘉筑登之親雲上  
52 崎原  
53 小湾筑登之  
54 与那覇筑登之親雲上  
55 安谷屋筑登之  
56 知念筑登之  
57 小橋川筑登之親雲上  
58 屋良筑登之親雲上  
59 謝名堂筑登之親雲上  
60 鳥袋筑登之親雲上  
61 稲福子
- 62 義保筑登之親雲上  
63 高里親雲上  
64 男五ら  
65 義保にや  
66 金城子  
67 与那城筑登之親雲上  
68 謝名堂子  
69 安里筑登之親雲上  
70 崎山筑登之親雲上  
71 波平筑登之親雲上  
72 城間にや  
73 伊佐筑登之  
74 名護親方  
75 嘉手苜にや  
76 嘉手苜筑登之  
77 男三ら  
78 久保田筑登之親雲上  
79 屋良里之子親雲上  
80 古浜親雲上  
81 嘉手苜筑登之親雲上  
82 屋嘉親雲上  
83 野村親雲上  
84 謝花筑登之親雲上  
85 慈照庵  
86 福寿庵  
87 喜舍場筑登之親雲上



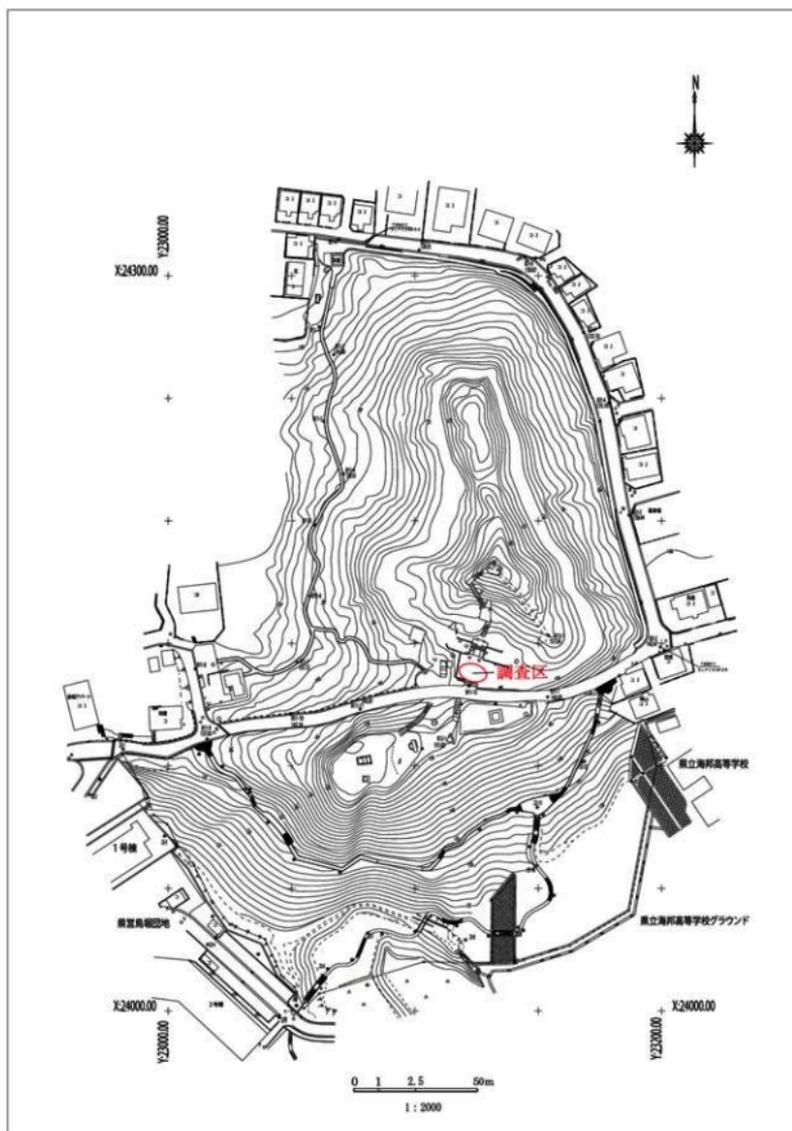
第4図 鳥小堀村(首里古地図)



第5図 弁ヶ嶽周辺の地形（平成17年）



第6図 弁ヶ嶽周辺の地形（大正10年）



第7図 調査位置図

## 第三章 調査経過と調査組織

### 第1節 調査経過

本調査は、第1章でも述べたとおり、2014（平成26）年2月18日～2014（平成26）年3月25日の期間で実施された。なお、資料整理作業及び報告書作成作業は、2014（平成26）年度から2016（平成28）年度に実施した（第2表）。

調査では、首里島堀町自治会、首里等の多大な協力を得て行った。

さて、本遺跡の調査は、「弁ヶ嶽」における遺構確認調査を目的に、主に大嶽石門の前面に所在していたとされる「拝殿」を確認することを主題とした。

まず、磁気探査作業を行って人力による掘削作業を開始した。

発掘調査は、大嶽石門の前面に5m×5mの調査グリッドを設定した。調査グリッドは、北から南に算用数字（99～102）を、西から東にひらがな（と～ぬ）を付した。その呼称は、北西側の交点を基軸として「な-100、な-101、に-100、に-101・・・」とした。

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

第2表 調査工程

年度 工程	2013年度 (平成25年度)	2014年度 (平成26年度)	2015年度 (平成27年度)	2016年度 (平成28年度)
遺構確認 調査	→			
資料整理		→	→	→
報告書作成				→

2014 (平成 26) 年

- 2月18日 調査に先立ち磁気探査作業を実施した。
- 24日 現地調査を開始する。5m×5mのグリッド設定後、「に-100グリッド」より掘り下げ作業を開始。
- 26日 GL-30/40掘り下げ。土層の色調が黒味を帯びてくる。銭貨等の出土を見る。
- 27日 「に-101グリッド」掘り下げ作業を開始。すぐに敷石が検出され始める。
- 28日 「な-101グリッド」掘り下げ作業を開始。「な・に-101グリッド」においては、ほぼ全面に敷石が確認される。
- 3月3日 「な-100グリッド」掘り下げ作業を開始。銭貨・灯籠の一部等が検出される。測量作業(水準点移動)を実施。
- 4日 「な・に-101グリッド」は、敷石の状況をより確認するため、調査範囲を拡張して掘り下げ作業を実施。
- 5日 「に-191グリッド」検出の敷石について平面実測作業を開始する。
- 6日 「と-101グリッド」・「ぬ-101グリッド」をトレンチ状に設定して、掘り下げ範囲を広げる。
- 7日 「ぬ-101グリッド」にて、敷石の東端が確認され始める。
- 10日 「な-100・101グリッド」、「に-101グリッド」の出土遺物のレベリング作業を行う。  
「な-101グリッド」平面実測作業を開始。  
調査区の全体平面図作成作業を開始(平板測量)。
- 11日 「に-101グリッド」にて土層堆積状況の確認。6枚に大別する。
- 13日 昨日の雨の影響で現地作業を中止。室内作業(遺物洗浄作業9を行う)。
- 16日 グリッド杭(な・ぬ-102グリッド)に座標を設定するため、測量作業を行う。
- 18日 調査区全体の精査作業等を行う。
- 19日 高所作業者にて遺跡遠景、調査区全景撮影を実施。
- 24日 調査区の埋戻し作業を行う。埋戻しは、遺構検出面を保護するため、土嚢袋・ブルーシート等を使用した。その後、芝を敷き直して現況復旧に努めた。
- 25日 調査にて出土した鉄片・小銃弾の薬莖等について、那覇警察署へ連絡。出土物を警察官に確認してもらう。  
発掘調査道具類を整理・撤収し、現地調査を終了。

## 第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

### (1) 調査組織

事業主体	那覇市	市長	翁長	雄志 (平成 25・26 年度)
		市長	城間	幹子 (平成 26～28 年度)
事業所管	市民文化部	部長	島田	聡子 (平成 25～27 年度)
		部長	玉寄	隆雄 (平成 28 年度)
	〃	副部長	石川	和男 (平成 25 年度)
	〃	副部長	玉寄	隆雄 (平成 26～27 年度)
	〃	副部長	渡慶次	一司 (平成 28 年度)
	〃	課長	古塚	達朗 (平成 25～27 年度)
調査総括	文化財課	課長	岸本	修 (平成 28 年度)
	文化財課	副参事	島	弘 (平成 25～28 年度)
調査事務	文化財課	副参事	島	弘 (平成 25～28 年度)
	〃	主幹	内間	靖 (平成 25～27 年度)
	〃	主査	新里	清美 (平成 25～27 年度)
	〃	主査	神谷	あけみ (平成 28 年度)
	〃	主任主事	瑞慶山	由香里 (平成 25・26 年度)
	〃	主事	高嶺	朝美 (平成 27・28 年度)
	〃	主事	原	瞳 (平成 25 年度：臨時職員)
	〃	主事	徳元	剛 (平成 25 年度：臨時職員)
	〃	主幹	吉峯	なおみ (平成 25 年度)
	〃	〃	儀保	久代 (平成 26・27 年度)
	〃	〃	根路銘	敦子 (平成 28 年度)
	〃	技査	諸見里	真秀 (平成 25～27 年度)
	〃	〃	長嶺	盛孝 (平成 28 年度)
	〃	主任学芸員	伊集	守道 (平成 25～28 年度)
	〃	技師	高安	慎也 (平成 25・26 年度)
	〃	〃	上原	俊彦 (平成 27・28 年度)
	〃	主事	知花	信幸 (平成 25・26 年度)
	〃	主任主事	太田	成子 (平成 27・28 年度)
	〃	主事	日高	一十三 (平成 26～28 年度)

文化財課	主 事	新垣 成子 (平成 27 年度：臨時職員)
"	"	立住 育也 (平成 27・28 年度： " )
"	文化財保護専任主事	東恩納 隆榮 (平成 25 年度)
"	"	野原 巴 (平成 26～28 年度)
"	歴史博物館グループ・壺屋焼物博物館グループ	

調査担当	文化財課	副参事	島 弘
"	"	主 幹	内間 靖
"	"	専門員主査	玉城 安明
"	"	"	仲宗根 啓
"	"	主任専門員	樋口 麻子
"	"	"	當銘 由嗣
"	"	"	知念 政樹
"	"	主任学芸員	安斎 真知子
"	"	学 芸 員	吉田 健太
"	"	非常勤専門員	城間 千栄子 (平成 26 年度)
"	"	"	長濱 愛梨 (平成 26～28 年度)
"	"	"	徳元 剛 (平成 27・28 年度)
"	"	"	牧山 美緒 (平成 28 年度)
"	"	"	玉城 真紀子 (平成 28 年度)
"	"	"	江上 輝 (平成 28 年度)

## (2) 発掘調査

上江洲由昇 翁長しのぶ 砂辺理恵 玉城初美

## (3) 資料整理

(平成 26 年度)

城間千栄子 真栄城和美 山下美也子 宮良知子

(平成 27 年度)

真栄城和美 請盛智秋 山下美也子 山下真利子 高良夏枝 新垣成子 加納立巳

(平成 28 年度)

真栄城和美 請盛智秋 山下真利子

## 第IV章 層序

今回の調査の層序は、大きく6枚に大別した(第8図)。第①層が表土層。第②層上面が敷石遺構の構築面と考えられる。第②層中で多くの銭貨が出土している。第①～③層の下面には、琉球石灰岩の礫層が確認できた。第③層以下では、遺物の出土量が極めて少量となる傾向が見られた(第③層は無遺物層)。第④層と第⑤層の間にて、土器が1点出土した。なお、色調は、土色帖を参考にした。以下に、層序の概略を記す。

第①層 にぶい黄褐色(10Y 4/3) 表層。クチャ・マーヅが混在。小さな琉球石灰岩礫が全体に混入する。層厚は約20 cm前後。

第②層 オリーブ黒色(5Y 3/2～2/2) 粘性を帯びてくる。沖縄産陶器・炭化物等を含む。小さな琉球石灰岩礫が全体に混入する。層厚は約20～30 cm前後。

第③層 暗褐色(10YR 3/4) 粘性を帯びる。小さなマーヅ土がブロック状に混入する。層厚は約20～40 cm前後。

第④層 褐色(10YR 4/4) 粘性を帯びる。マンガン粒を含む。層厚は約20 cm前後。

第⑤層 褐色(10Y 4/6) 粘性を帯びる。マンガン粒を多く含む。層厚は約15 cm前後。

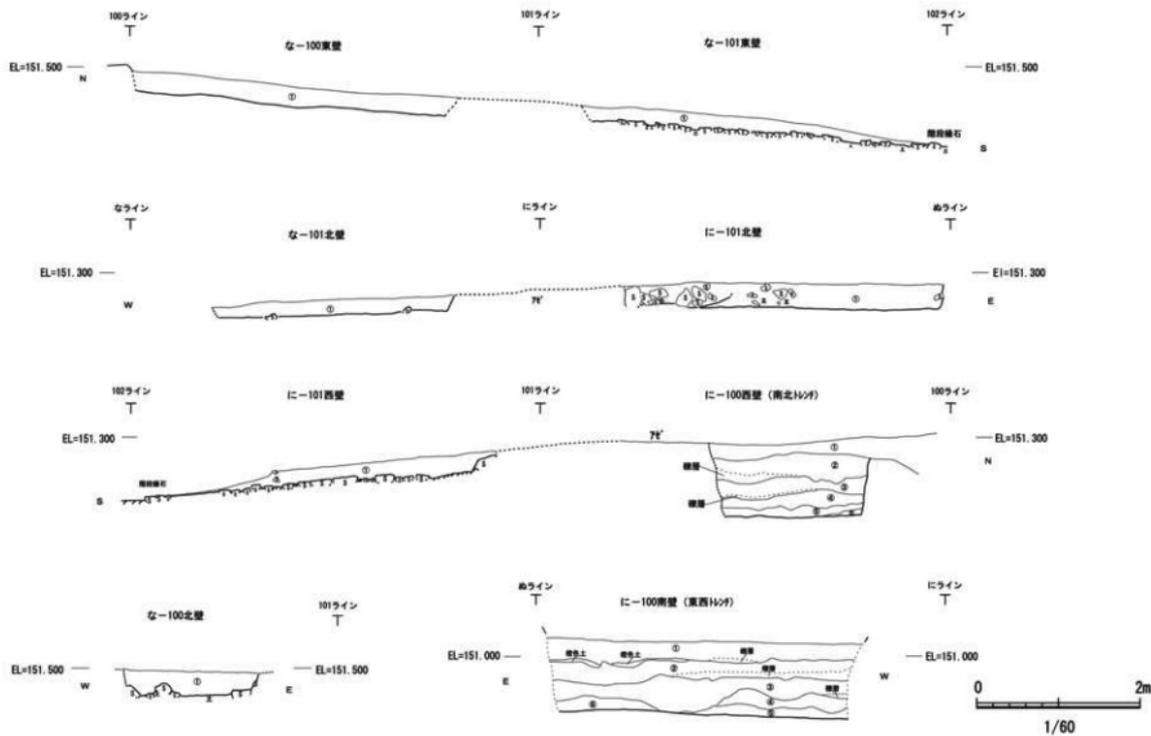
第⑥層 黄褐色(10Y 5/6) 地山(マーヅ土)。

### 参考文献

『新版 標準土色帖 1997年版』 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修



図版 i 土層の堆積状況



第8図 遺跡の層序

## 第V章 遺構

今回の調査で検出された遺構は、敷石遺構が主体である。（第9図）。

標高約 150.000m～150.500mに敷石遺構が確認されている。調査区南側（参詣道側）に若干の傾斜を持つ。東西約 11.5mの幅が確認できた。南北は、約 4mの範囲で敷石が確認されたが、北側（石門）は保存状態が悪い。縁石等も確認されていない。後世に攪乱された可能性がうかがわれた。

調査区南側「と・な・に・ぬ-101 グリッド」のほぼ全面に敷石が検出されている。一部、後世の攪乱や敷石の抜き取り等で敷石が欠けている箇所も見られる。敷石の抜き取り部分には、「礎石の痕跡」の可能性も想起されたが、判然としない。また、「に-101 グリッド」では敷石面が焼けた部分が一部に見られた。

「な-100 グリッド」で 30 cm×40 cmを測る琉球石灰岩の平石が検出された。拝殿の礎石の可能性も検討したが判然としない。また、周辺に同様な「礎石」は確認できなかった。

「に-100 グリッド」では、東西に延びる石列を確認。同グリッド西側トレンチでは、銭貨が多数検出されている。

「に・ぬ-101 グリッド」で東西に延びる溝状の遺構を確認。敷石遺構の南縁に沿って、溝が配されていたものと考えられた。

今回検出された敷石遺構は、大嶽石門前に所在したとされる拝殿に関連する遺構と考えられるものの、判然としない。さらに調査区を広げた追加調査及び遺構下部の調査、図帳（参考資料：絵図資料9～12）に描かれた資料や古写真（参考資料：写真資料）との比較検討などを行うことが今後の課題であろう。



図版 ii 調査区全景



## 第VI章 遺物

今回の調査において出土した遺物は、総数1,694点を数える(第3表)。

主な種類としては、白磁(10点)、青花(36点)、褐釉陶器(8点)、本土産磁器(87点)、沖縄産施釉陶器(165点)、沖縄産無釉陶器(191点)、甕(4点)、円盤状製品(10点)、煙管(2点)、土器(1点)、ガラス製小玉(1点)、石製品(1点)、瓦(855点)、銭貨(101点)であった。

以下、出土遺物の種類ごとに概略を示す。

### 1. 白磁

白磁は、1点を図示した(第10図1 第4表 図版8の1)。

第10図1は、底径3.8cmを測る杯の底部である。に-100グリッド20/30(第②層)出土。

### 2. 青花

青花は、3点を図示した(第10図2~4 第5表 図版8の2~4)。

第10図2は、小杯となる資料で外面に列点文を描く。に-101グリッド0/20(第①層)出土。

同図3は、小杯となる資料で外面に列点文と草花文を描く。に-100グリッド30/40(第②層)出土。

同図4は、底径9.2cmを測る碗の底部である。内外面に呉須による文様が確認できる。に-100グリッド30/40(第②層)出土。

### 3. 褐釉陶器

褐釉陶器は、1点を図示した(第10図5 第6表 図版8の5)。

第10図5は、略三角形を呈する厚さ9mm前後の資料である。蓋の破片として報告しておく。に-100グリッド30/40(第②層)出土。

### 4. 本土産磁器

本土産磁器は、9点を図示した(第10図6~14 第7表 図版8の6~14)。

第10図6は、小碗の口縁部資料である。口縁部の内外面に二本の圏線を巡らせる。外面には、呉須による文様が見られる。な-100グリッド0/20(第①層)出土。

同図7は、杯の底部資料である。量付以外は、総釉。高台脇にコバルトによる波文が施される。かなり薄手である。ぬ-101グリッド0/30(第①層)出土。

第3表 遺物出土一覧

出土地点	種類	外国産陶磁器					本土産磁器	片岡産陶器				曹	円盤状製品	漆器	土器	ガラス製小玉	石製品・石類						
		白磁	青花	陶磁器	埋焼物	赤絵		青磁染付	磁器陶器	無釉陶器	陶質土器						瓦質	石製品	磁石器	その他			
と-101 0/30						1	1	5	2														
と-101 20/40																							
女-100 0/20		2	8	4	1		12	27	29	9		1	1	1				1	5				
女-100 0/20 <sup>*</sup> 付①																							
女-100 0/20 <sup>*</sup> 付①取上げ後																							
女-100 0/20 <sup>*</sup> 付②																							
女-101																							
女-101 0/20		5	4				19	35	16	10				3					4	1			
女-101 0/20石敷検査																							
女-101 0/20 <sup>*</sup> 付①																							
女-101 0/20 <sup>*</sup> 付②													1										
比-100 1層(0/10)			2				2	1	7	2										1			
比-100 0/20																				1			
比-100 0/20 <sup>*</sup> 付①																							
比-100 10/20								4	5	9	7									4			
比-100 20/30		1	1		1	1	1	11	18	27	14			2			1			9	2		
比-100 30/40			6	1				6	15	23	1			2	1					3	2		
比-100 20/30 30/40																							
比-100青銅リソット 40/50																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付①・②																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付②																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付③																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付④																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付⑤																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付⑥																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付⑦																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付⑧																							
比-100青銅リソット 40/50 <sup>*</sup> 付⑨																							
比-100青銅リソット 40/50暗色土								1															
比-100青銅リソット 40/60				1					1														
比-100青銅リソット 50/60暗色土										1													
比-100青銅リソット 50/60黒色土									1														
比-100青銅リソット 60/80暗褐色土																	1						
比-100青銅リソット 60/80暗褐色土				1																			
比-101表蓋																							
比-101 0/20		2	10	1			3	18	23	27	9	1	1	1							6	2	
比-101溝内			2						5	10	15											1	
比-101 0/20								2	1	5												1	
比-101 0/30			3					4	21	18	4											1	
比-101 0/30検査								1	3					1									
比-101 20/40								3	4	7	1												
比-101 40/50								1		1				1								1	2
一括								1		10	2												
合計		10	36	8	2	2	4	87	165	191	76	1	4	10	2	1	1	1	1	1	37	9	

瓦	瓦葺	穿棟動物遺骸					貝類遺骸										その他										合計	種類 出土地点
		トリ	ブタ	魚骨	巻貝	二枚貝	釘	鉄	青銅	金属	レンガ	硝子	戦争遺物	炭	現代遺物	鹿	猪	鳥	獣	魚	貝	骨	土	石	瓦	その他		
5																										14	土-101 0/30	
6							1			2																10	土-101 20/40	
139	9	1		1	1	1	2	1																		256	瓦-100 0/20	
	2																										2	瓦-100 0/20'→①
	1									2																	3	瓦-100 0/20'→①取上げ後
	1																										1	瓦-100 0/20'→②
	2																										2	瓦-101
47	5				1	2	1	4	3		1		2													9	172	瓦-101 0/20
	1																										1	瓦-101 0/20石敷雑査
									1																		1	瓦-101 0/20'→①
																											1	瓦-101 0/20'→②
10	3									3	1														1	33	土-100 1層 0/10	
																											1	土-100 0/20
									1																		1	土-100 0/20'→①
50	2								1															1		83	土-100 10/20	
94	6																						4	1	194	土-100 20/30		
119	18				1	1			5																		204	土-100 30/40
	1																										1	土-100 20/30 30/40
	2	5																									7	土-100高側→① 40/50
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→①・②
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→②
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→③
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→④
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→⑤
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→⑥
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→⑦
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→⑧
	1																										1	土-100高側→① 40/50'→⑨
	4																										5	土-100高側→① 40/50褐色土
9	3						1																				15	土-100高側→① 40/50
	1	1			3	1		6	2				2														3	土-100高側→① 50/60褐色土
	1	1							2																		5	土-100高側→① 50/60黒色土
																											1	土-100高側→① 60/90暗褐色土
																											1	土-100高側→① 60/90暗褐色土
																								1		2	土-101表掻	
160	25		1		3	1		6	2				2													1	305	土-101 0/20
13							2																			1	49	土-101溝内
6	2												1														18	瓦-101 0/20
55					1		1	2					1														111	瓦-101 0/30
																											5	瓦-101 0/30雑査
64					5																						84	瓦-101 30/40
74																											80	瓦-101 40/50
													1														14	一括
855	101	1	1	1	12	8	5	13	15	7	2	5	2	5	5	14	1694	合計										

同図 8 は、杯の底部資料である。畳付以外は、透明釉が掛かる。薄手の資料である。に-100 グリッド 20/30 (第②層) 出土。

同図 9 は、杯の底部資料である。畳付以外は、透明釉が掛かる。ぬ-101 グリッド 30/40 (第②層) 出土。

同図 10 は、杯の口縁部資料である。口縁部内面に一条の陵が残る。に-100 グリッド 20/30 (第②層) 出土。

同図 11 は、皿の底部資料である。畳付以外は、総釉。見込みに「亀と鶴」文様が型押しされ、呉須によって色付けされる。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

同図 12 は、小碗の底部資料である。畳付以外は総釉。畳付には、砂粒が微量に残る。見込み及び高台脇と腰部立ち上がり部に圏線が一本づつ描かれる。ぬ-101 グリッド 30/40 (第②層) 出土。

同図 13 は、瓶の胴部資料である。内面には、轆轤痕が顕著に残る。外面は、呉須による草花文が描かれる。高台脇と胴部下部に一本ずつの圏線が見られる。ぬ-101 グリッド 30/40 (第②層) 出土。

同図 14 は、瓶の底部付近の資料である。高台脇と胴部下部に一本ずつの圏線が見られる。内面と畳付は、露胎である。ぬ-101 グリッド 40/50 (第②層) 出土。

## 5. 沖繩産施釉陶器

沖繩産施釉陶器は、10 点を図示した (第 11 図 1~10 第 8 表 図版 9 の 1~10)。

第 11 図 1 は、鉢の口縁部となる資料である。外面は黒褐色の鉛釉、内面は、白化粧土+透明釉薬を施す。に-101 グリッド 0/20 (第①層) 出土。

同図 2 は、小振りの壺と見られる。胴部下から底部の資料で、底面には糸切り痕が残る。外面は、白化粧土+透明釉を施し、内面は露胎。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

同図 3 は、碗の底部となる資料である。外面から高台内は鉛釉、内面は白化粧土+透明釉。畳み付けは露胎で見込みは、蛇の目釉剥ぎとなる。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

同図 4 は、碗の底部となる資料である。畳み付け以外は、白化粧土+透明釉薬を施す。見込みは、蛇の目釉剥ぎとなる。外面には、呉須による文様が施される。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

同図 5 は、小碗である。外面は鉛釉、内面は灰釉の掛け分け。腰部の一部から高台内は露胎、見込みは、蛇の目釉剥ぎとなる。に-101 グリッド 溝内出土。

同図 6 は、小碗である。内外面とも白化粧土+透明釉。口縁部の一部に鉛釉が見られる。畳み付けは露胎で、見込みは、蛇の目釉剥ぎとなる。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

同図 7 は、小碗の口縁部資料である。外面は鉄釉、内面は白化粧土+透明釉。の掛け分け。ぬ-101 グリッド 0/20 (第①層) 出土。

同図 8 は、底部から胴部にほぼ垂直に立ち上がる筒状を呈する火取である。外面に鉄釉を施す。底面及び内面は露胎である。外面に、へら状の工具による水平方向に二条と斜状に延びる沈線の文様が見られる。高台内に墨書が見られる。ぬ-101 グリッド 30/40 (第②層)

出土。

同図9は、胴部から腰部にかけての資料で火取である。外面にのみ鉄釉が施される。外面は、轆轤痕を想起させる三条の窪みが見られる。ぬ-101 グリッド0/20 溝出土。

同図10は、灰釉単掛けの小杯である。猪口などと称される小形の資料である。外面腰部から高台内までは露胎。ぬ-101 グリッド0/30 (第①層) 出土。

## 6. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は、4点を図示した(第12図1~4 第9表 図版10の1~4)

第12図1は、徳利の口縁部と肩部の資料を図上復元して示した。器形としては、口縁部がラッパ状に外反、肩部から胴部にかけて膨らみを持たせて底部に至る。胴部で最大径を持って、やや丸みを帯びる形が想起される。に-101 グリッド溝内出土。

同図2は、壺(徳利?)の底部である。胎土は「にぶい赤褐色」を呈する。小破片のため全体は判然としないが、底部と胴部のつなぎ目の外面にナデ等の成形は見られない。ぬ-101 グリッド30/40 (第②層) 出土。

同図3は、壺の底部と考えられる資料である。胎土は「にぶい赤褐色」を呈する。底部からの立ち上がり部分は5mm幅のヘラ成形が施される。外面のナデ?成形と合わせて、丁寧な造りである。に-101 グリッド0/20 溝出土。

同図4は、播鉢の底部資料である。胎土は「暗赤褐色」を呈する。内面全体に櫛目が残る。底部からの立ち上がり部分はヘラ成形が施される。底部には、横位に走る数条の沈線が見られる。に-101 グリッド0/20 溝出土。

## 7. 簪

簪は、4点のみ出土した資料を図示した(第13図1~4 第10表 図版11の1~4)

4点とも「耳かき状」を呈する資料である。第13図3は、耳かき状の頭部の長さが1cm未満(0.85cm程)で他の3点に比して小振りである。ぬ-101 グリッド40/50 (第③層) 出土。

同図1は、に-101 グリッド0/20 (第①層)、同図2は、な-101 グリッド0/20 (第①層)、同図4は、な-100 グリッド0/20 (第①層) 出土。

## 8. 円盤状製品

円盤状製品は、10点出土した資料を図示した(第14図1~10 第11表 図版12の1~10)。

利用された材質は、青花(2点)、沖縄産無釉陶器(3点)、陶質土器(3点)、瓦(2点)の4種類である。4点が第②層からの出土(第14図4・6・7・8)、その他6点は第①層からの出土であった。

本資料の最大径は、1.8 cmから 5.3 cmまでの資料が得られており、1 cm台 3点、3 cm台 3点、4 cm台 3点、5 cm台 1点である。

重量は、1.2 gから 28.9 gで、1 g台 3点、4 g台 1点、10 g台 3点、20 g台 3点であった。円盤状製品としては、比較的、小振りの資料が占める。

## 9. 煙管

煙管は、2点のみ出土した資料を図示した(第15図1・2 第12表 図版15の1・2)。

いずれも沖縄産陶器製で、面取りが施される雁首である。第15図1は、胎釉が施釉される。に-100グリッド30/40(第②層)出土。

同図2は、黒色釉薬(マンガン釉?)が施釉される。な-100グリッド0/20(第①層)出土。

## 10. 土器

土器は、1点のみ出土した資料を図示した(第15図3 第13表 図版13の3)

第15図3は、胴部(底部近くか)の資料で、内外面ともアバタが目立つ。器厚は1 cm前後で厚みを持つ。に-100グリッド60/80(第④層最下部)出土。

## 11. ガラス製小玉

ガラス製小玉は、1点のみ出土した資料を図示した(第15図4 第14表 図版13の4)。幅4 mm、厚さ3 mmを測る臼形を呈する。直径1.5 mmの孔が貫通する。色調は緑色を呈する。に-100グリッド20/30(第②層)出土。

## 12. 石製品

石製品は、1点を図示した(第16図1 第15表 図版14の1)。

第16図1は、灯籠の頭部と考えられる資料である。石門前に設置された灯籠の一部であろうか。凝灰岩製である。蓮を想起させる花卉を彫刻する。な-100グリッド0/20(第①層)出土。

## 13. 瓦

瓦は、9点を図示した(第17~20図 第16表 図版15~18)。出土した資料は、すべて破片であった。

第17図1は、明褐色を呈する明朝系の軒丸瓦である。瓦当面の縁部の小破片で文様部分は欠損する。に-100グリッド10/20(第①層)出土。

同図2・3は、灰色を呈する明朝系の丸瓦である。いずれも、玉縁から筒部にかけての小破片資料である。同図1は、凸面に漆喰の付着が認められる。凹面は、全体的に布目が残る。に-100 グリッド南側トレンチ 40/60 (第②層) 出土。同図3は、2と同様、凹面に布目が全体的に残る。な-101 グリッド 0/20 (第①層) 出土。

第18 図1・2は、赤色を呈する明朝系の丸瓦である。いずれも、玉縁から筒部にかけての小破片資料である。同図1は、凸面に多くの漆喰が付着する。凹面は、全体的に布目残り、布筒痕が横位に窪みを残す。に-100 グリッド 10/20 (第①層) 出土。同図2は、1と同様、凹面全体に布目が残る。1と比して硬質である。ぬ-101 グリッド 0/30 (第①層) 出土。

第19 図1は、黄褐色を呈する明朝系の平瓦の小破片と見られる。凸面の全体的、凹面の極一部に漆喰が付着する。凹面には、横位に紐圧痕が残る。に-100 グリッド 20/30 (第②層) 出土。同図2は、灰色を呈する明朝系の平瓦である。凸面は、黒色を呈し一瞥すると二次焼成を受けた感を受ける。凹面の狭端縁に紐圧痕が横位に残る。に-100 グリッド 10/20 (第①層)・20/30 (第②層) 出土。

第20 図1・2は、赤色を呈する明朝系の平瓦である。同図1は、凸部に漆喰の付着が認められる。凹面には、横位の紐圧痕が残る。に-100 グリッド西側トレンチ 40/50 (第②層) 出土。同図2は、器面全体に赤色粒の混入が顕著である。軟質で触れると指に胎土が付着する。ぬ-101 グリッド 40/50 (第②層) 出土。

#### 14. 銭貨

銭貨は、101点(第17表)の集計の中から34点を図示した(第21~23図 図版19~21)。

第21 図は、近世以前の銭貨で有文の資料である。銭種としては、○元○寶1点(開元通宝? : 初鑄年代=621年)、崇寧重寶1点、(初鑄年代=1103年)、寛永通寶(19点)(初鑄年代=1636年以降)が見られる。銭種不明が7点(通のみ2点、寶のみ5点)、判読不明が16点(有文15点、鉄銭1点)あった。

第22 図は、近世期の無文銭である。47点が得られている。外径1.8cm台から2.1cm台までの大きさを持ち、孔が四角形となるもの(I類:45点)と外径が1cm未満と小振りで孔が円形となるもの(II類:2点)に大別できる。に-100 グリッド西側トレンチ 40/50 (第②層)において10点(その内の2点は接合)が集中して出土したのは注目された。

第23 図は、近代以降の銭貨である。10点が得られている。すべての資料が、地表下0/20レベル(第①層)からの出土であった。日本製(5点)と米国製(5点)の二種類が見られる。日本製の資料では、一銭と十銭が大正年代である。その他の資料は、日本製、米国製とも戦後の銭貨である。

#### 参考文献

永井久美男 編 『日本出土銭総覧 1996年版』 兵庫埋蔵銭調査会 1996年5月26日

永井久美男 著 『新版 中世出土銭の分類図版』 高志書院 2002年4月20日

第4表 白磁観察一覧

質量：cm

挿図番号 図版番号	器種	口 器 高 台 径	色調	文様・特徴など	出土地点
第10図 1 図版 8 の 1	杯	- - 3.8	外・内面：灰白色 (N 8/) 素地：灰白色 (N 8/)	内外面は、透明釉を施すが、畳付と外底面の一部は露胎。畳付には、砂の付着痕が見られる。内底面には轆轤痕が見られる。	に-100グリッド 20/30 (第②層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第5表 青花観察一覧

質量：cm

挿図番号 図版番号	器種	口 器 高 台 径	色調	文様・特徴など	出土地点
第10図 2 図版 8 の 2	小杯	- - 3.8	外面：灰白色 (N 8/) 内面：明緑灰色 (5G 7/) 素地：灰白色 (N 8/)	畳付以外は、透明釉を施す。透明釉はやや厚めで、特に腰、高台内の曲部は厚くなる。外面に呉須で、口縁部と高台脇に1本づつ圏線を廻らす。その間に列点文を4段配する。列点の大きさは1段目と4段目はやや大き目である。	に-100グリッド 0/20 (第①層)
第10図 3 図版 8 の 3	小杯	2.8 - -	外・内面：灰白色 (N 8/) 素地：灰白色 (N 8/)	残存部は全て、透明釉を施す。外面に呉須で、口縁部に1本の圏線を廻らす。その下に草花文を描き、空白を列点で埋める。列点の大きさはほぼ一定している。	に-100グリッド 30/40 (第②層)
第10図 4 図版 8 の 4	碗	- - 9.2	外・内面：灰白色 (7.5Y 8/2) 素地：灰白色 (7.5Y 8/2)	外底面、外面は高台半ばまで透明釉を施す。内面は、透明釉を施した後、内底面に蛇の目釉割ぎを施す。重ね焼きの痕も見られる。外面に、呉須による文様が見られる。施釉部分に貫入が見られる。	に-100グリッド 30/40 (第②層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第6表 褐釉陶器観察一覧

質量：cm

挿図番号 図版番号	器種	最大径 厚さ	素地	文様・特徴など	出土地点
第10図 5 図版 8 の 5	蓋	- 0.9	灰色 (10Y 5/1) で灰褐色 (7.5YR 4/2) をサンドする色調。黒色の微粒子、白色のスジが見られる。	端部はナデ調整を施し、滑らか。外面は黄褐色 (10YR 5/4) で施釉される。内面黄灰色 (2.5Y 5/1) で露胎。ヘラナデ調整痕が見られる。	に-100グリッド 30/40 (第②層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第7表 本土産磁器観察一覧

法量: cm

押図番号 図版番号	器種	口 径 器 高 高台径	色 調	文 様・特徴など	出土地点
第10図 6 図版 8 の 6	小碗	8.2 — —	外・内面: 明緑灰色 (7.5GY 8/1) 素地: 灰白色 (N 8/)	口縁は玉縁状になり、強く外反する。 内外面の口縁に呉須による圏線を それぞれ、2本づつ廻らす。 外面の胴部には濃紺色で、山水図 の一部と見られる文様が配される。	ぬ-100グリッド 0/20 (第①層)
第10図 7 図版 8 の 7	杯	— — 2.6	外・内面: 灰白色 (N 8/) 素地: 灰白色 (N 8/)	高台は「八の字」状に広がる形状。 畳付以外は透明釉を施す。畳付の 内面には砂の付着が見られる。 高台の外面にはコバルトによる波 状の文様が配される。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第10図 8 図版 8 の 8	杯	— — 2.8	外・内面: 灰白色 (N 7/) 素地: 灰白色 (N 8/)	高台は、僅かに広がる形状。畳付 以外は透明釉を施す。 残存部に文様などは見られない。	に-100グリッド 20/30 (第②層)
第10図 9 図版 8 の 9	杯	— — 3.6	外・内面: 明青灰色 (5B 7/1) 素地: 灰白色 (N 8/)	高台は、ほぼ直になる形状。畳付 以外は透明釉を施す。 畳付には砂の付着が顕著に見られる。	ぬ-101グリッド 30/40 (第②層)
第10図 10 図版 8 の 10	杯	9.8 — —	外・内面: 灰白色 (10Y 8/1) 素地: 灰白色 (7.5Y 8/1)	口唇は舌状で、内湾する形状。 内外面共に白濁しているが、透明 釉を施し艶はある。	に-100グリッド 20/30 (第②層)
第10図 11 図版 8 の 11	皿	— — 5.5	外・内面: 灰白色 (N 7/) 素地: 灰白色 (N 8/)	高台の高さが、外側2mm、内側4mmと低い 形状。畳付以外は透明釉を施す。 内底面には型押し沈線で、亀と鶴 と見られる文様が施される。その上 からコバルトで彩色される。外面は 文様は見られないが、コバルトの飛 び散りが僅かに確認できる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第10図 12 図版 8 の 12	小碗	— — 3.2	外・内面: 灰白色 (N 7/) 素地: 灰白色 (N 8/)	腰に丸味を帯び、上方に立ち上る 形状。 畳付以外は透明釉を施す。 コバルトで内面腰部に1本、外面腰部 に2本、高台脇に1本の圏線が廻る。	ぬ-101グリッド 30/40 (第②層)
第10図 13 図版 8 の 13	瓶	— — —	外面: 灰白色 (N 7/) 内面: 灰白色 (N 8/) 素地: 灰白色 (N 8/)	下膨れ形状の瓶と見られる。 呉須で外面胴部に草花文と、胴部 下部に1本、高台脇に2本の圏線が 廻る。透明釉を施す。 内面は轆轤痕が明瞭に見られ、露 胎となる。	ぬ-101グリッド 30/40 (第②層)
第10図 14 図版 8 の 14	瓶	— — 5.4	外面: 灰白色 (N 7/) 内面: 灰白色 (N 8/) 素地: 灰白色 (N 8/)	器外面に呉須で胴下部に1本、高 台に2本の圏線を廻らし、透明釉 を施す。 内面と畳付は露胎。畳付には、砂 の付着が見られる。	ぬ-101グリッド 40/50 (第②層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧

法量: cm

挿図番号 図版番号	器種	口 器 高 高台径	色調	文様・特徴など	出土地点
第11図 1 図版9の1	鉢	29.0 — —	外面釉: 黒褐色 (10YR 2/2) 内面釉: 灰白色 (5Y 7/1) 素地: 灰白色 (5Y 8/1)	口縁部は逆「L」字に外反する形状。 外面は鉛釉、内面は白化粧と透明 釉を施し、掛け分けとなる。内面 は貫入が明瞭。	ぬ-101グリッド 0/20 (第①層)
第11図 2 図版9の2	壺	— — 3.8	外面釉: 灰白色 (5Y 7/2) 素地: 灰褐色 (5YR 4/2)	外面胴部は白化粧と透明釉を施 し、内面、外底面は露胎となる。 外底面には糸切り痕と白化粧の滲 みが見られる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第11図 3 図版9の3	碗	— — 6.0	外面釉: 暗褐色 (10YR 3/3) 内面釉: 灰白色 (5Y 8/2) 素地: にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	外面は鉛釉、内面は白化粧と透明 釉を施す、掛け分けの碗である。 内底面に蛇の目軸割ぎを施す。重 ね焼きの痕も見られる。畳付は露 胎となり、白土も見られる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層) 精査
第11図 4 図版9の4	碗	— — 6.0	外・内面釉: 灰白色 (5Y 8/2) 素地: にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	畳付け以外は、白化粧と透明釉を 施す。外面に呉須による文様が見 られるが、構図は不明。内底面に、 蛇の目軸割ぎを施す。重ね焼きの 痕も見られる。畳付に白土の付着 が見られる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第11図 5 図版9の5	小碗	9.4 4.3 4.0	外面釉: 黒色 (5YR 2/3) 内面釉: 灰白色 (10Y 5/2) 素地: 黄白色 (2.5Y 6/1)	外面から内面口縁の縁まで鉛釉、 内面は灰釉を施す、掛け分け碗で ある。高台から外底面は露胎とな る。内底面に蛇の目軸割ぎを施 す。高台内縁に砂の付着が僅かに 見られる。	ぬ-101グリッド 溝内
第11図 6 図版9の6	小碗	8.0 3.8 3.2	外・内面釉: 灰白色 (10Y 7/1) 素地: 灰白色 (2.5Y 8/2)	畳付け以外は、白化粧と透明釉を施 す。内底面は蛇の目軸割ぎを施す。 重ね焼き痕も見られる。内外器面に 焼き膨れ痕が見られ、口唇は溶着痕 か? 打割いている。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第11図 7 図版9の7	小碗	8.6 — —	外面釉: 黒褐色 (10YR 2/3) 内面釉: 灰白色 (10YR 8/1) 素地: 灰白色 (10YR 8/2)	外面は鉄釉、内面は白化粧と透明 釉を施した掛け分けの口縁部であ る。外面は艶がない。内面は貫入 が見られる。	ぬ-101グリッド 0/20 (第①層)
第11図 8 図版9の8	火取	— — 7.4	外面釉: 黒褐色 (10YR 2/2) 素地: 浅黄橙色 (10YR 8/3)	残存の外面胴部はヘラ彫りによる 縦位の文様と腰部に2本の園線を 施し鉄釉を施す。内面、高台、外 底面は露胎となる。畳付に砂と釉 葉の付着が見られる。外底面に筆 によると思われる二重円と円の中 に「七」字状の記号が見られる。	ぬ-101グリッド 30/40 (第②層)

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	色調	文様・特徴など	出土地点
第11図 9 図版9の9	火取	- - -	外面釉：黒褐色 (10YR 2/2) 素地：浅黄褐色 (10YR 8/3)	残存の外面、下部に凹線が3本廻る。外面胴部は鉄軸を施す。内面上端にも、僅かに給軸が見られる。他内面と腰部は露胎となる。腰部は給軸の飛び散りとヘラ削り調整が見られる。	ぬ-101グリッド 0/20 (第①層) 溝
第11図 10 図版9の10	火取	3.3 1.8 1.6	外・内面釉：灰白色 (5Y 8/1) 素地：灰白色 (5Y 8/1)	外面は腰部まで、内面は全て灰釉を施す。内底面に轆轤痕が顕著に見られる。小石の溶着も見られる。外面腰部から外底面まで露胎となる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第9表 沖縄産無釉陶器観察一覧

質量：cm

挿図番号 図版番号	器種	最大径 厚さ	素地	文様・特徴など	出土地点
第12図 1 図版10の1	德利	5.2 - -	外面：にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 内面：黒色 (5Y 2/1) 素地：赤褐色 (5YR 4/8)	口縁部と胴部を図上復元した。口縁はラッパ状に開く形状。肩部には、5本の凹線を廻らす。外面はナデ調整、内面には轆轤痕が見られる。	に-101グリッド 溝内
第12図 2 図版10の2	壺	- - 8.2	外面：黒褐色 (10YR 3/2) 内面：灰色 (N 5/) 素地：暗赤褐色 (5YR 3/6)	壺の底部である。胴下部にヘラナデ調整痕が見られる。外底面、底面際は未調整が雑である。	ぬ-101グリッド 30/40 (第②層)
第12図 3 図版10の3	壺	- - 15.4	外面：にぶい赤褐色 (5YR 5/4) 内面：黒色 (5YR 1.7/1) 素地：にぶい赤褐色 (5YR 4/3)	底面からやや直に立上る形状で、壺と見られる。外面、外底面はヘラナデ調整される。底部際にヘラ削りによる稜が見られる。内面は火を強く受けたのか黒色となる。外面には、小さなハジキ痕が見られる。	に-101グリッド 0/20 (第①層) 溝？
第12図 4 図版10の4	播鉢	- - 12.6	外面：暗赤褐色 (5YR 3/3) 内面：赤褐色 (2.5YR 4/6) 素地：暗赤褐色 (2.5YR 3/4)	播鉢の底部資料である。外面、外底面はヘラナデ調整痕が見られる。内面には播目が見られる。内底面に幅約2.5cm、18本組の播目が確認できる。	に-101グリッド 0/20 (第①層) 溝？

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第10表 管観察一覧

質量：cm・g

挿図番号 図版番号	形状	完/破	材質	長さ	厚さ	重さ	特徴	出土地点
第13図 1 図版11の1	耳かき状	完	青銅	15.0	0.2	3.8	頭幅は0.4cm、頭部の長さは2cmを測る。断面形、首部は円形で竿部は六角形となる。摩耗のためか終端は丸くなる。	に-101グリッド 0/20 (第①層)
第13図 2 図版11の2	耳かき状	完	青銅	11.6	0.3	6.5	頭幅は0.6cm、頭部の長さは1.5cmを測る。断面形、首部は円形で竿部は六角形となる。終端に向かい幅が広くなり、先は尖る。完形だが「く」の字に折れ曲がる。	な-101グリッド 0/20 (第①層)
第13図 3 図版11の3	耳かき状	完	青銅	7.5	0.2	0.8	頭幅は0.3cm、頭部の長さは0.85cmを測る。竿部は終端に向かい細くなり先は尖る。	ぬ-101グリッド 40/50 (第③層)
第13図 4 図版11の4	耳かき状	破	青銅	—	0.3	1.9	頭幅は0.4cm、頭部の長さは1.4cmを測る。断面形、首部は円形となる。竿部は欠損。	な-100グリッド 0/20 (第①層)

第11表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	完・破	形状	最大径 (cm)	最大厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
第14図 1 図版12の1	無釉 陶器	壺?	胴部	完	円形	4.0	0.6	15.0	に-101グリッド 0/20 (第①層)	沖縄産無釉陶器の胴部と思われる。周縁部に打割調整を施す。色調は、外面：褐色、内面：黒色。素地に小石の混入が見られる。
第14図 2 図版12の2	無釉 陶器	壺?	胴部	完	ほぼ 円形	4.5	1.0	25.7	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層) 精査	沖縄産無釉陶器の胴部を使用している。器種不明である。周縁部に打割調整を施す。色調は、外面：にぶい褐色、内面：褐灰色、素地：暗赤褐色で混入物は無い。

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	完・破	形状	最大径 (cm)	最大厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
第14図 3 図版12の3	無釉 陶器	不明	胴部	完	ほぼ 円形	3.7	0.9	13.1	な-101グリッド 0/20 (第①層)	沖繩産無釉陶器の 胴部を使用している。 器種不明である。 周縁部に打割 調整を施す。 色調は、外・内面、 素地共に明赤褐色 で混入物は無い。
第14図 4 図版12の4	青花	碗	胴部	完	円形	3.0	0.5	4.8	に-100グリッド 30/40 (第②層)	中国産青花の碗 胴部を使用している。 周縁部を細かく打 割調整する。 外面に呉須による 草花と思われる文 様が見られる。内 面に文様は無い。
第14図 5 図版12の5	青花	碗	底部	破	円形	5.3	1.5	28.9	な-101グリッド 0/20 (第①層)	中国産青花の碗高 台を使用している。 外面から数回打割 後、調整を施す。 呉須で、高台に2本 の圏線を廻らす。 内底面に文様が見 られるが、構成は 不明。外底面は、2 本の圏線と文字を 配す。文字は判読 不明。
第14図 6 図版12の6	陶質 土器	不明	胴部	完	円形	1.9	0.4	1.4	に-100グリッド 20/30 (第②層)	陶質土器の胴部を 使用している。 周縁部に細かい打 割調整を施す。 色調は、外・内面、 素地ともに橙色。 外面はナデ調整痕 が見られる。内面 は摩耗しザラつき 感がある。
第14図 7 図版12の7	陶質 土器	不明	胴部	完	ほぼ 円形	1.9	0.4	1.5	に-100グリッド 30/40 (第②層)	陶質土器の胴部を 使用している。 周縁部に細かい打 割調整を施す。 色調は内面、素地 ともに橙色。 外面は、煤痕が薄 く残る。
第14図 8 図版12の8	陶質 土器	不明	胴部	完	ほぼ 円形	1.8	0.4	1.2	に-100グリッド 20/30 (第②層)	陶質土器の胴部を 使用している。 周縁部に細かい打 割調整を施す。 色調は外・内面、素 地ともににぶい橙 色。外面には煤痕 が見られる。

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	完・破	形状	最大径 (cm)	最大厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
第14図 9 図版12の9	瓦	-	胴部	完	円形	3.1	1.2	13.3	な-100グリッド 0/20 (第①層)	黄褐色の瓦胴部を使用している。周縁部に打割調整を施すが、摩耗で稜は不鮮明。表面にナデ調整痕が見られる。裏面には布目と紐圧痕が確認できる。
第14図 10 図版12の10	瓦	-	胴部	完	ほぼ円形	4.2	1.5	27.5	な-101グリッド 0/20 (第①層)	灰色の瓦胴部を使用している。周縁部に細かい打割調整を施すが、摩耗で不鮮明。表面に僅かな段差が見られる。裏面には布目が確認できる。

第12表 煙管観察一覧

法量：cm・g

挿図番号 図版番号	種類	器種	法量				特徴	出土地点
			火皿又は 吸口径	長さ	接続部径	重さ		
第15図 1 図版13の1	陶器	雁首	-	-	約1.8	2.2	沖繩産施釉陶器で雁首の接続部の破片である。断面形は八角形を呈する。外面は鉛釉を施し、艶がある。色調は外面：黒色(10YR 2/1)、内面：黒褐色(10YR 3/2)を呈する。素地：灰褐色(5YR 4/2)。	な-100グリッド 30/40 (第②層)
第15図 2 図版13の2	陶器	雁首	-	-	約1.7	0.8	沖繩産施釉陶器で雁首の接続部の破片である。断面形を呈すると思われる。施釉されるがマンガン釉か？、艶はない。色調は外面：黒色(7.5YR 1.7/1)、内面：黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。素地：暗赤褐色(5YR 3/6)。	な-100グリッド 0/20 (第①層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第13表 土器観察一覧

法量：cm

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 底径 器厚	胎土	色 調	備 考	出土地点
第15図 3 図版13の3	不明	— — — 1.0	微量の赤 色粒子が 混入。	外面：にぶい橙色 (5YR 6/4) 内面：橙色 (7.5YR 7/6) 素地：にぶい褐色 (7.5YR 5/3)	底部近くの胴部片である。 器種は不明。内外面共に、 器面が荒れ調整痕などは見 られない。アバタが顕著に 見られる。	に-100グリッド 60/80 (第④層 最下部)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第14表 ガラス製小玉観察一覧

法量：cm・g

挿図番号 図版番号	種類	器種	幅 厚さ 重量	文様・特徴など	出土地点
第15図 4 図版13の4	ガラス製品	小玉	0.40 0.30 0.12	白形を呈する。色調は緑色で透明感を 持つ。中央に1.5mm程の孔が穿たれる。	に-100グリッド 20/30 (第②層)

第15表 石製品観察一覧

法量：cm・kg

挿図番号 図版番号	種類	器種	長さ 幅 重量	文様・特徴など	出土地点
第16図 1 図版14の1	石製品	石灯籠	18.50 20.90 6.75	石灯籠の宝珠部分。請花が一体とな るようなモチーフ。凝灰岩製と見ら れる。	な-100 0/20 第①層

第16表 瓦観察一覧

法量単位: cm ( )内は残存値

挿図番号 図版番号	種類	器種	色調	長さ 幅 厚さ	文様・特徴など	出土地点
第17図 1 図版15の1	明朝系 (灰色瓦)	軒丸瓦	外・内面:明褐色 (7.5YR 5/6) 素地:明褐色 (7.5YR 5/6)	(3.0) (4.5) 1.1	軒丸瓦の縁と見られる。縁の幅は1.2cm、縁の厚み1.5cmを測る。瓦当面は破片のため文様は不明。表面はナデ調整痕が確認できる。	に-100グリッド 10/20 (第①層)
第17図 2 図版15の2	明朝系 (灰色瓦)	丸瓦	外・内面:褐灰色 (10YR 5/1) 素地:褐灰色 (10YR 5/1)	(10.8) (6.2) 2.3	丸瓦の玉縁部の破片である。玉縁の長さ4.0cmを測る。凸面には縦位のナデによる稜が見られる。漆喰も付着している。凹面は、布目痕と縦位の紐痕1本、横紐の圧痕が2本確認できる。	に-100グリッド 南側トレンチ 40/60 (第②層)
第17図 3 図版15の3	明朝系 (灰色瓦)	丸瓦	外・内面:浅黄色 (2.5Y 7/3) 素地:にぶい褐色 (7.5YR 5/3)	(8.8) (8.1) 2.6	丸瓦の玉縁部の破片である。凸面は、風化のためか調整痕は確認できない。凹面は布目痕と横位の紐圧痕が確認できる。	な-101グリッド 0/20 (第①層)
第18図 1 図版16の1	明朝系 (赤色瓦)	丸瓦	外・内面:橙色 (5YR 6/6) 素地:橙色 (5YR 6/6)	(13.8) (9.8) 1.7	丸瓦の玉縁角部の破片である。玉縁の長さ4.8cmを測る。凸面には漆喰が多量に厚く付着し、器面は荒れている。凹面には、布目痕と横位の紐圧痕が確認できる。	に-100グリッド 10/20 (第①層)
第18図 2 図版16の2	明朝系 (赤色瓦)	丸瓦	外・内面:橙色 (5YR 7/8) 素地:橙色 (5YR 7/8)	(13.7) (11.8) 1.6	丸瓦の玉縁角部の破片である。玉縁の長さ5.1cmを測る。凸面には、横位のナデ調整痕が見られる。凹面は、布目痕と幅広(8mm)の紐圧痕が確認できる。	ぬ-101グリッド 0/30 (第①層)
第19図 1 図版17の1	明朝系 (灰色瓦)	平瓦	外・内面:にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 素地:にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	(10.1) (8.5) 2.4	平瓦の端部破片である。凹面は、横位のナデ調整が施される。風化のためか器面は荒れて、布目は確認できない。凸面は、横位の成形痕と漆喰の付着が見られる。破面にも漆喰の付着が見られる。	に-100グリッド 20/30 (第②層)

挿図番号 図版番号	種類	器種	色調	長さ 幅 厚さ	文様・特徴など	出土地点
第19図 2 図版17の2	明朝系 (灰色瓦)	平瓦	外面：黄灰色 (2.5YR 6/1) 内面：黒色 (2/5YR 2/1) 素地：灰白色 (2.5YR 7/1)	(13.4) (12.1) 1.6	平瓦の角の破片である。凹面は磨耗しているが、布目痕と縦、横の紐圧痕が見られる。凸面は、ナデ調整が施され、滑らか。	に-100グリッド 10/20 (第①層)・ に-100グリッド 20/30 (第②層)
第20図 1 図版18の1	明朝系 (赤色瓦)	平瓦	外・内面：橙色 (5YR 6/6) 素地：橙色 (5YR 6/6)	(11.8) (9.7) 1.7	平瓦の角破片である。凹面には、布目痕と粘土粒の付着が見られる。凸面は、横位のナデ調整が確認できる。漆喰の付着も見られる。	に-100グリッド 西側トレンチ 40/50 (第②層)
第20図 2 図版18の2	明朝系 (赤色瓦)	平瓦	外・内面：橙色 (5YR 7/8) 素地：橙色 (5YR 7/8)	(13.2) (12.9) 1.7	平瓦の角破片である。凹面は磨耗のため、布目、紐圧痕がはっきりしない。凸面も磨耗が激しいが、縦位の稜が確認できる。	ぬ-101グリッド 40/50 (第②層)

色調は、『新版 標準土色帖 1997年版』

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。

第17表 銭貨出土一覧

出土地点 銭種	中国		日本											米国		合計					
	有文銭						無文銭			近・現代銭											
	○元○寶	崇寧重寶	寛永通宝		裁種不明 (通)のみ	判読不可 (寶)のみ (鉄銭)	I類 破片	II類	一銭	十銭	五円	五十円	百円	1セント	5セント						
			古	新													鉄銭	新・古不明			
な-100 0/20				1		1	3	1	1	1					1		9				
な-100 0/20ドット①								1	1								2				
な-100 0/20ドット①取上後								1									1				
な-100 0/20ドット②				1													1				
な-101									2								2				
な-101 0/20	1			1		2								1			5				
な-101 0/20石敷精査				1													1				
に-100 1層0/20															2	1	3				
に-100 10/20					1			1									2				
に-100 20/30			2	1			2	1									6				
に-100 20/30 30/40				1													1				
に-100 30/40		1	1	1	5		3	4	4								18				
に-100西側トレンチ40/50ドット①・②								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット③								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット④								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑤									1								1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑥								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑦								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑧								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑨								1									1				
に-100西側トレンチ40/50ドット⑩								1									1				
に-100西側トレンチ40/50								5									5				
に-100西側トレンチ40/50橙色土								4									4				
に-100西側トレンチ50/60黒色土									1								1				
に-100西トレンチ橙色土50/60								1									1				
に-100南側トレンチ40/60								2	1								3				
ぬ-101 0/20			1		3	1	2	7	2	4	1	1	1	1	1	1	25				
ぬ-101 0/20				1								1					2				
合計	1	1	3	6	2	8	2	5	15	1	29	16	2	1	1	1	1	1	4	1	101

第18表 銭貨観察一覧①

挿図番号 図版番号	出土地点 層序	銭貨名 (種別)	国名 初鋳年	書体	法量 (cm・g)				磁力	背文	文様等	計測 番号
					外径	孔径	厚さ	重量				
第21図 1 図版19の1	な-101 0/20 第①層	〇元〇寶	-	隸書	-	-	0.20	1.30	無	不明	「寶」にやや磨減が見られる。「元」及び輪郭は、ほぼ明瞭。「開元通宝(中国:唐)621初鋳」の可能性を考えるが銭種の断定は控えておく。	79
第21図 2 図版19の2	に-100 30/40 第②層	崇寧重寶	中国 (北宋) 1103	-	3.54	0.80	0.17	8.30	無	-	「寧」「寶」にやや磨減が見られる。「崇」「重」及び輪郭は、明瞭。	13
第21図 3 図版19の3	に-101 0/20 第①層	寛永通寶	日本 (江戸) 1636	楷書	0.24	0.72	0.14	4.00	無	無	「寛」「寶」にやや磨減が見られる。その他の文字及び輪郭は明瞭。「寛」「寶」の字体の特徴から古寛永と考えられる。	28
第21図 4 図版19の4	に-100 20/30 第②層	〇元〇寶	日本 (江戸) 1636?	-	-	-	0.15	2.20	有	無	全体的に錆が覆い、文字にやや磨減が見られる。輪郭は明瞭。「寶」の字体は古寛永の特徴が見られる。	64
第21図 5 図版19の5	に-100 20/30 30/40 第②層	寛永通寶	日本 (江戸) 1668	楷書	2.53	0.59	0.13	3.10	無	文	輪郭銭文とも明瞭。背文に「文」の文字。	63
第21図 6 図版19の6	に-100 20/30 第②層	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	楷書	2.48	0.56	0.14	2.90	無	無	輪郭・銭文とも明瞭。「永」の字の脇に小さななれが確認できる。	65
第21図 7 図版19の7	な-100 0/20ドット② 第①層	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	-	2.36	0.59	0.13	2.50	無	無	輪郭・銭文とも明瞭。	75
第21図 8 図版19の8	に-100 30/40 第②層	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	-	2.26	0.62	0.14	2.00	有	無	全体的に錆が付着するため、銭文が不明瞭。	11
第21図 9 図版19の9	な-100 0/20 第①層	寛〇〇寶	日本 (江戸) 1697	-	-	-	0.14	1.58	無	無	「寶」に潰れが顕著である。「寛」及び輪郭は明瞭。	92
第21図 10 図版19の10	ぬ-101 0/20 第①層	寛〇〇寶	日本 (江戸) 1697	楷書	-	-	0.09	0.70	無	無	やや薄手の資料で銭文・輪郭とも全体的にやや不明瞭感を受ける。「寶」の右側と左側輪郭に小さな孔が確認できる。	96
第21図 11 図版19の11	な-101 0/20石敷精査 第①層	〇永通〇	日本 (江戸) 1739	-	-	-	0.11	1.30	有	不明	鉄一文銭と見られる。全体的に赤錆が付着。銭文明瞭ではないが、「永」「通」の文字が見られる。	54
第21図 12 図版19の12	に-100 10/20 第①層	〇〇通〇	-	-	-	-	0.20	0.60	無	不明	「通」のみの資料。	97

第19表 銭貨観察一覧②

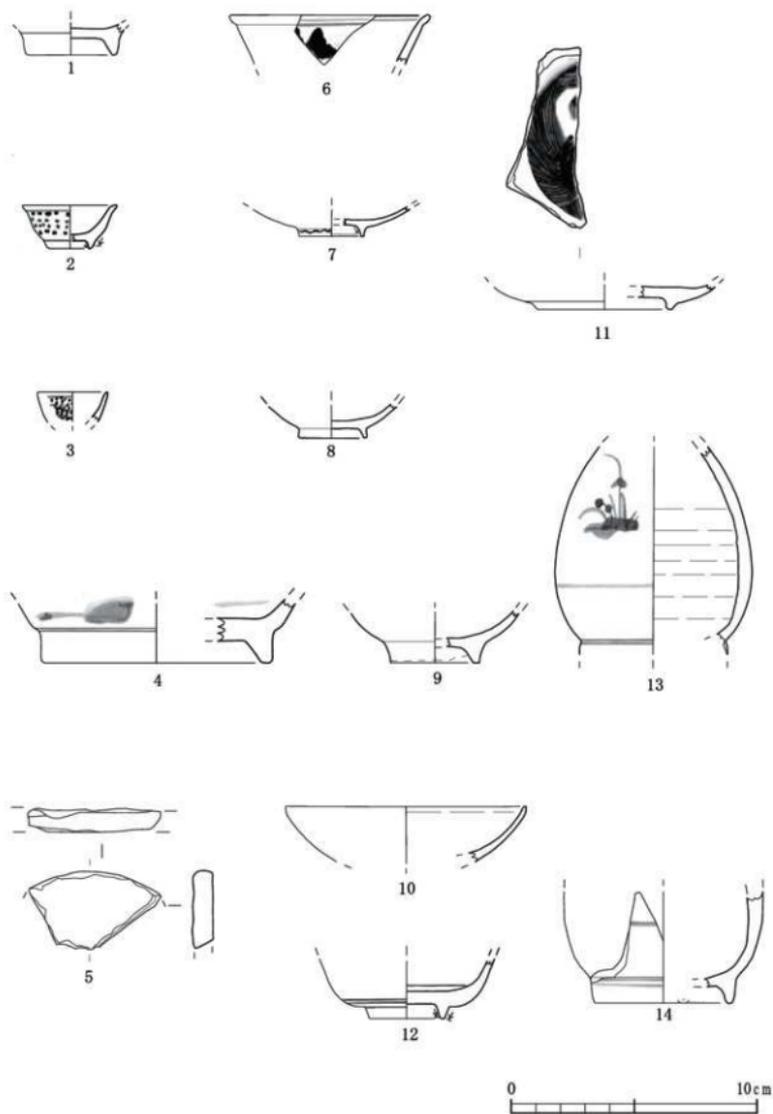
挿図番号 図版番号	出土地点 層序	銭貨名 (種別)	法量 (cm・g)				磁力	分類	備考	計測 番号
			外径	孔径	厚さ	重量				
第22図 1 図版20の1	に-101 0/20 第①層	無文銭	1.89	0.68	0.07	1.00	無	I	全体的に錆が付着する。 輪郭の一部が破損する。	29
第22図 2 図版20の2	に-100 30/40 第②層	無文銭	1.91	0.66	0.10	1.00	無	I	全体的に錆が付着する。	12
第22図 3 図版20の3	に-100 西側トレンチ 40/50 ドット④ 第②層	無文銭	1.97	0.69	0.09	0.90	無	I	全体的に錆が付着する。 保存状態が良好。	8
第22図 4 図版20の4	に-100南側 トレンチ 40/60 第②層	無文銭	2.00	0.68	0.12	1.30	無	I	全体的に錆が付着する。 輪郭の一部に欠損が見られる。	34
第22図 5 図版20の5	に-100 西側トレンチ 40/50 第②層	無文銭	2.00	0.74	0.09	1.10	無	I	全体的に錆が付着する。	61
第22図 6 図版20の6	に-100 西側トレンチ 40/50 橙色土 第②層	無文銭	2.00	0.84	0.09	1.20	無	I	全体的に錆が付着する。 比較的保存状態の良い資料である。	56
第22図 7 図版20の7	に-100 南側トレンチ 40/60 第②層	無文銭	2.00	0.82	0.10	1.20	無	I	全体的に錆が付着する。 比較的保存状態の良い資料である。	35
第22図 8 図版20の8	に-100 西側トレンチ 40/50 ドット⑦ 第②層	無文銭	2.02	0.72	0.10	1.10	無	I	全体的に錆が付着する。 輪郭の半部ほどに欠損が見られる。	6
第22図 9 図版20の9	に-100 西側トレンチ 40/50 ドット⑥ 第②層	無文銭	2.05	0.69	0.10	1.20	無	I	全体的に錆が付着する。 比較的保存状態の良い資料である。	5
第22図 10 図版20の10	な-100 0/20 ドット①取上後 第①層	無文銭	2.06	0.69	0.07	1.20	無	I	全体的に錆が付着する。 孔の部分は明瞭に形状を保つもの の、輪郭は、一部欠損、1mm×2mm程 の穴状となる部分が見られる。	74
第22図 11 図版20の11	に-100 30/40 第②層	無文銭	2.10	0.73	0.06	1.00	無	I	全体的に錆が付着する。 輪郭の一部に欠損が見られる。	10
第22図 12 図版20の12	に-100 西側トレンチ 40/50 第②層	無文銭	2.10	0.73	0.08	1.30	有	I	全体的に錆が付着する。 孔の部分に欠損が見られる。	57

挿図番号 図版番号	出土地点 層序	銭貨名 (種別)	法量 (cm・g)				磁 力	分 類	備考	計測 番号
			外 径	孔 径	厚 さ	重 量				
第22図 13 図版20の13	に-100 西側トレンチ 40/50 第②層	無文銭	2.10	0.71	0.07	1.00	無	I	全体的に錆が付着する。 比較的保存状態の良い資料である。	60
第22図 14 図版20の14	に-100 西側トレンチ 40/50 第②層	無文銭	2.10	0.97	0.10	1.20	無	I	全体的に錆が付着する。 外径に比して孔が大き目に穿たれる。	58
第22図 15 図版20の15	に-101 0/20 第①層	無文銭 (輪銭)	0.72	0.30	0.10	0.10	無	II	全体に錆が付着する。 片面は平坦面となる。縁に「バリ」 が残る。	62
第22図 16 図版20の16	な-100 0/20 第①層	無文銭 (輪銭)	0.86	0.40	0.11	0.10	無	II	全体に錆が付着する。 縁に「バリ」が残る。	84

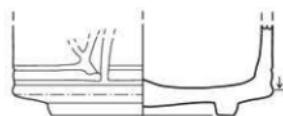
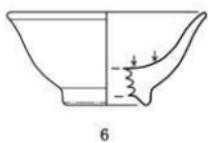
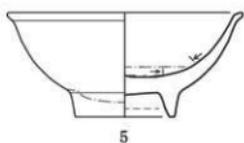
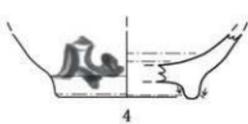
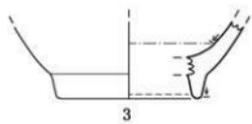
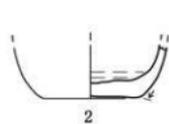
第20表 銭貨観察一覧③

挿図番号 図版番号	出土地点 層序	銭貨名 (種別)	国名 記銘年	法量 (cm・g)				残 存 率	備考	計測 番号
				外 径	孔 径	厚 さ	重 量			
第23図 1 図版21の1	ぬ-101 0/20 第①層	一銭	日本 大正八年	2.29	-	0.15	3.40	完形	表：中央に一銭、それを囲むよう に二十の圈線。 外輪に菊花文、唐草文を配す。輪 郭内側は点の圈線。 裏：中央に桐紋。その外輪に大日 本、大正〇年配す。輪郭内側に点 の圈線。	72
第23図 2 図版21の2	に-101 0/20 第①層	十銭	日本 大正十二年	2.22	0.40	0.15	3.50	完形	表：中央の円孔を八枚の花弁が囲 む、外輪は上に大日本、下に大正 の文字、波模様。輪郭は点の圈線。 裏：中央に円孔外輪は、上に菊花 文、右に十左に、銭の文字。下に 桐葉文を配す。	71
第23図 3 図版21の3	に-100 0/10 第①層	1セント	米国 1958	1.90	-	0.15	2.90	完形	表：右横向きの人物像(頭から胸)。 人物像の右に1958、左にLIBERTY 上方の縁にIN GOD WE TRUST 裏：中央に「ONE」「CENT」「UNITED STATES」「OF AMERICA」が四段に 配置。下方・左右の縁に表。上方 の縁に「E PLURIBUS UNUM」が配 置(ただし、ONE CENT以外の文字・ 文様は錆や磨滅で不明瞭)。	88
第23図 4 図版21の4	に-100 0/10 第①層	1セント	米国 1958	1.90	-	0.16	2.90	完形	表：右横向きの人物像(頭から胸)。 人物像の右に1958、左にLIBERTY 上方の縁にIN GOD WE TRUST(た だし、INの文字は磨滅して不明瞭)。 裏：中央に「ONE」「CENT」「UNITED STATES」「OF AMERICA」が四段に 配置。下方・左右の縁に表。上方 の縁に「E PLURIBUS UNUM」が配 置(ただし、E PLURIBUSの文字は磨 滅で不明瞭)。	89

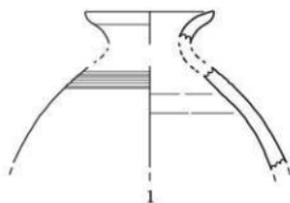
挿図番号 図版番号	出土地点 層序	銭貨名 (種別)	国名	法量 (cm・g)				残存率	備考	計測 番号
			記銘年	外径	孔径	厚さ	重量			
第23図 5 図版21の5	に-101 0/20 第①層	1セント	米国 1958	1.90	-	0.18	3.00	完形	表:右横向きの人物像(頭から胸)。人物像の右に1958、左にLIBERTY 上方の縁にIN GOD WE TRUST。裏:中央に「ONE」「CENT」「UNITED STATES」「OF AMERICA」が四段に配置。下方・左右の縁に麦。上方の縁に「E PLURIBUS UNUM」が配置(ただし、ONE CENTと麦以外の文字は磨滅で不明瞭)。	73
第23図 6 図版21の6	に-100 0/10 第①層	5セント	米国 1963	2.11	-	0.19	4.30	完形	表:左横向きの人物像(頭から胸)。人物像の右縁に沿ってLIBERTY 1963、左縁に沿ってIN GOD WE TRUST。裏:中央に建物。建物の下に「MONTICELLO」下方縁に沿って、「FIVE CENTS」「UNITED STATES OF AMERICA」の文字が二列、上方縁に沿って「E PLURIBUS UNUM」が配置(ただし、全体的に磨滅する)。	87



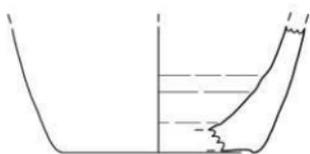
第10图 (图版8) 白磁(1)、青花(2~4)、褐釉陶器(5)、本土産磁器(6~14)



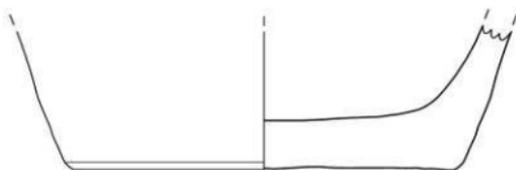
第 11 图 (图版 9) 冲縄産施釉陶器



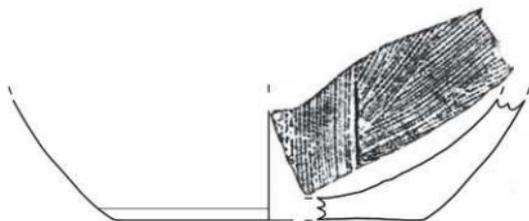
1



2



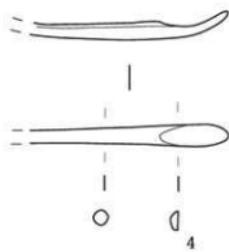
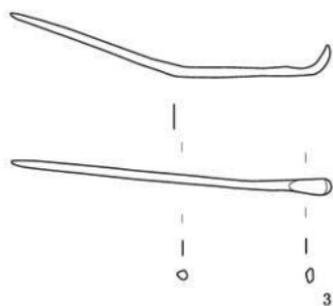
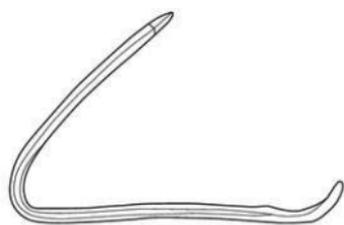
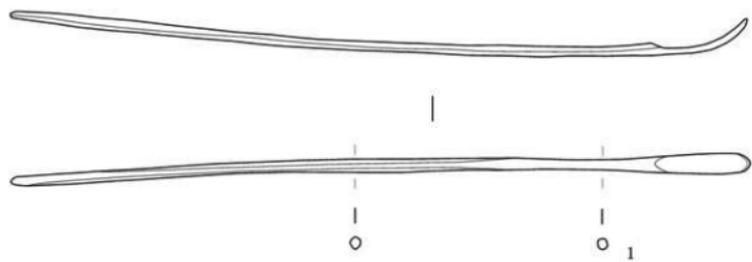
3



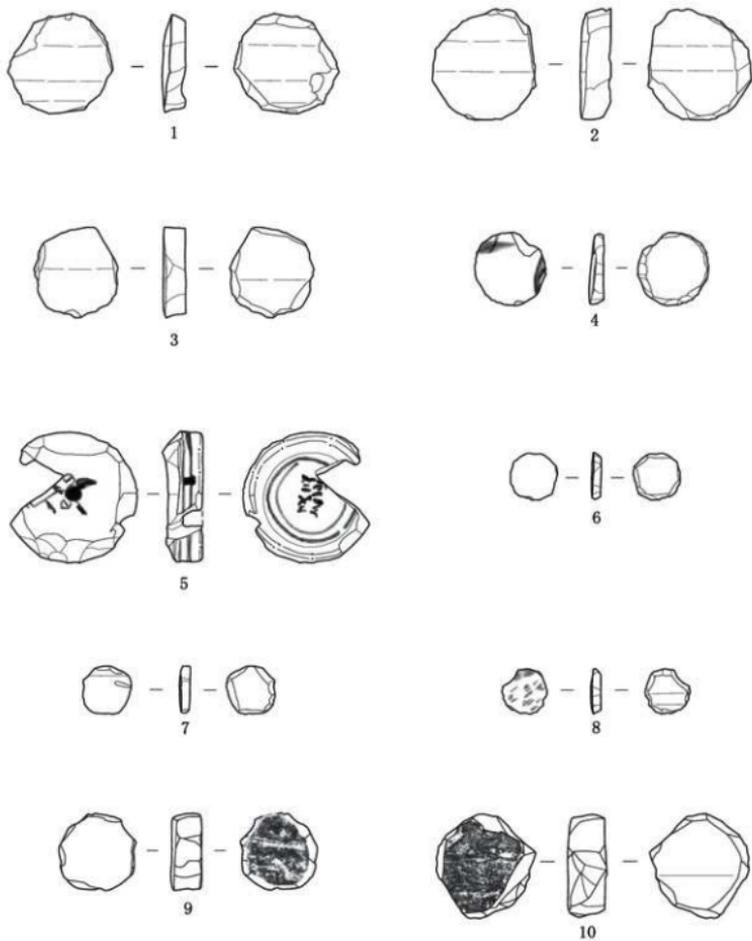
4



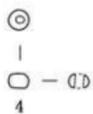
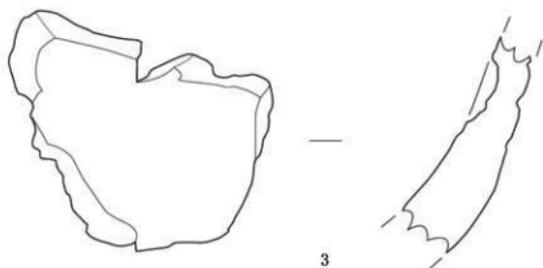
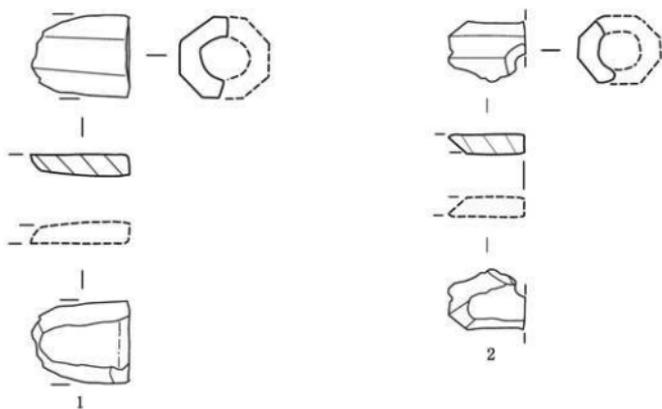
第 12 圖 ( 図版 10 ) 沖縄産無軸陶器



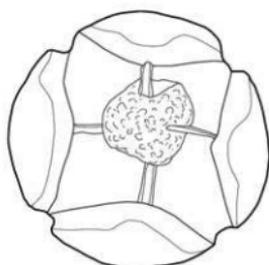
第13圖 (圖版11) 簪



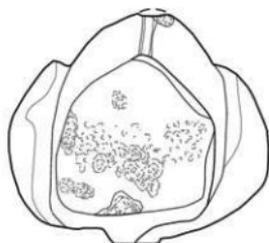
第 14 図 (図版 12) 円盤状製品



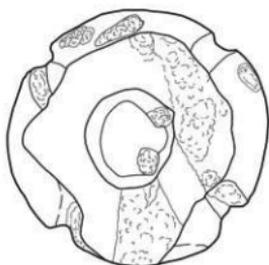
第15図 (図版13) 煙管 (1・2)、土器 (3)、ガラス製小玉 (4)



|



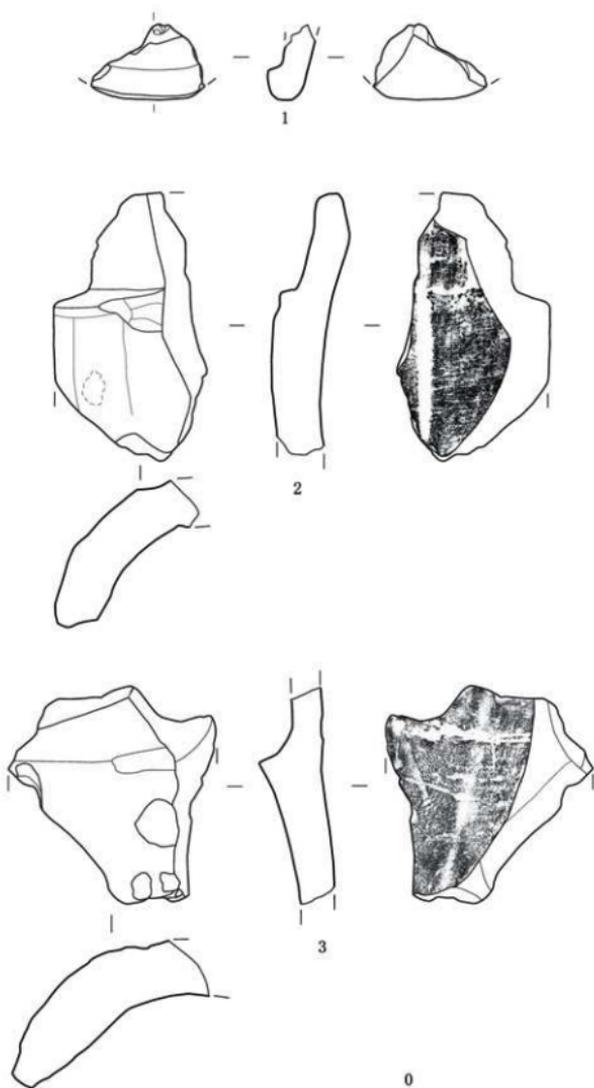
|



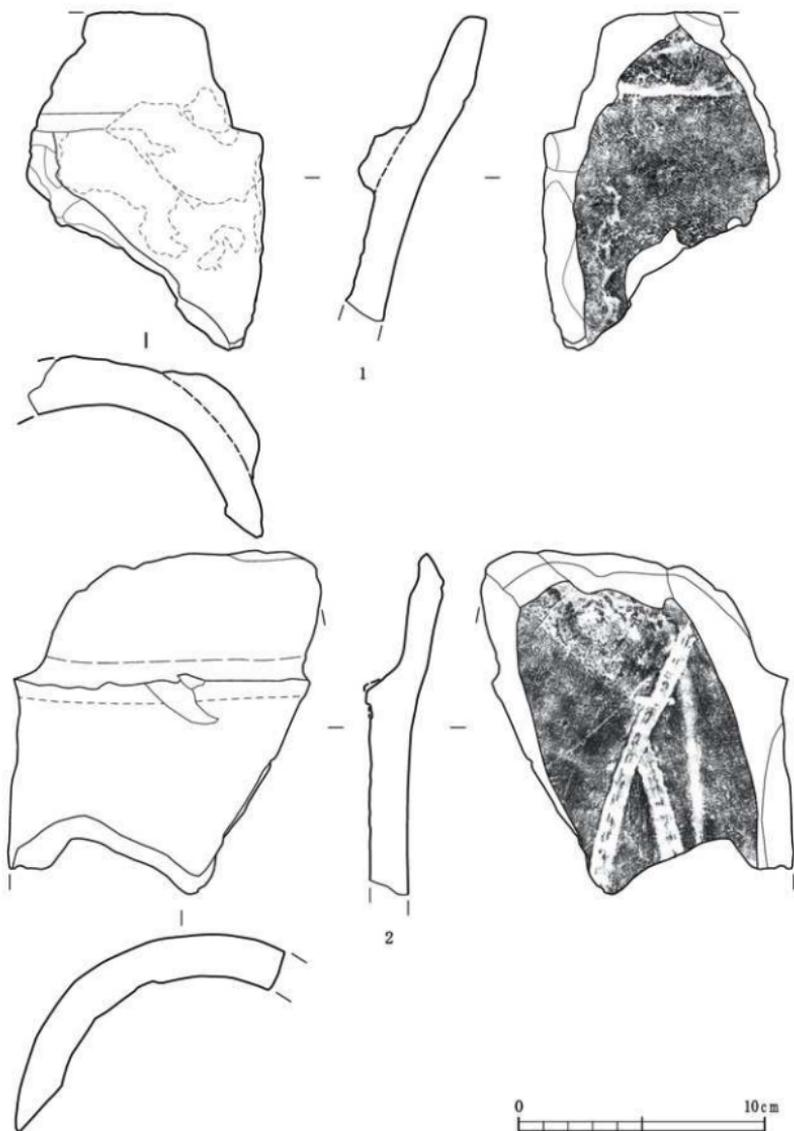
1



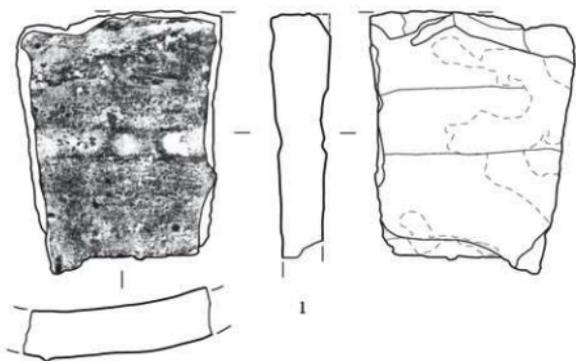
第 16 図 (図版 14) 石製品



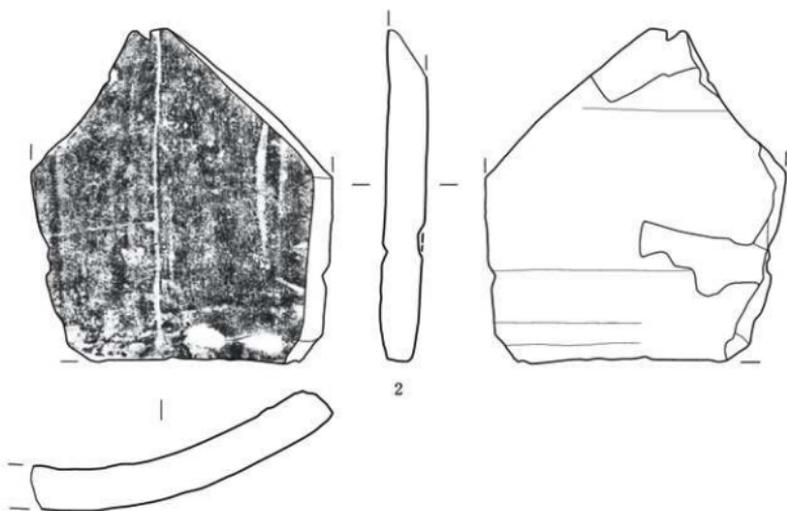
第17图 (图版15) 瓦①



第18圖 (圖版16) 瓦②



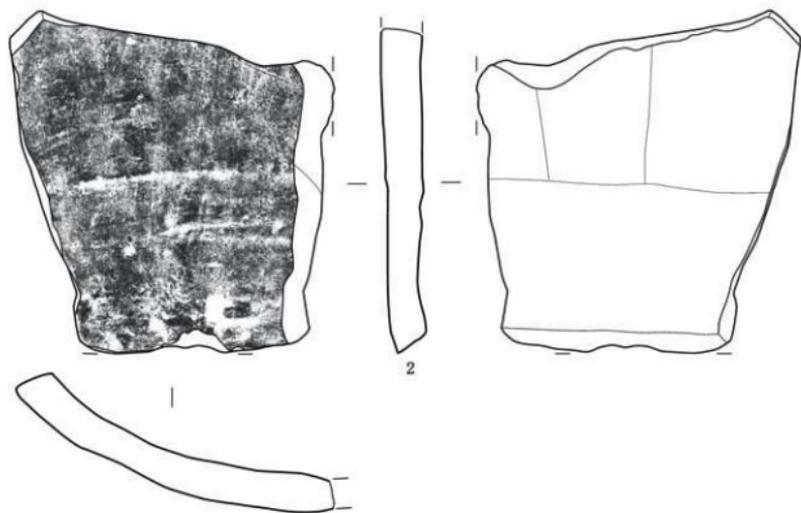
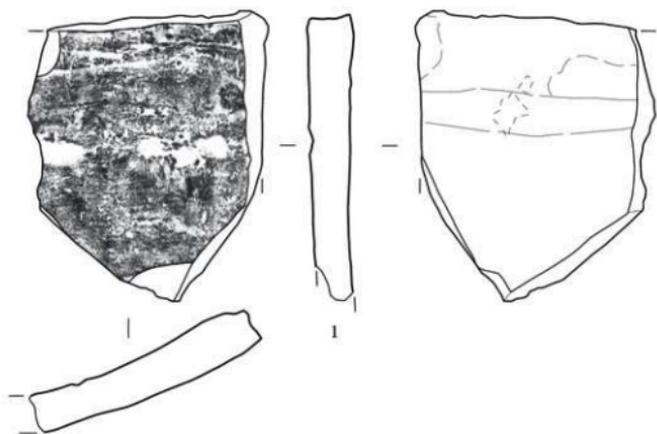
1



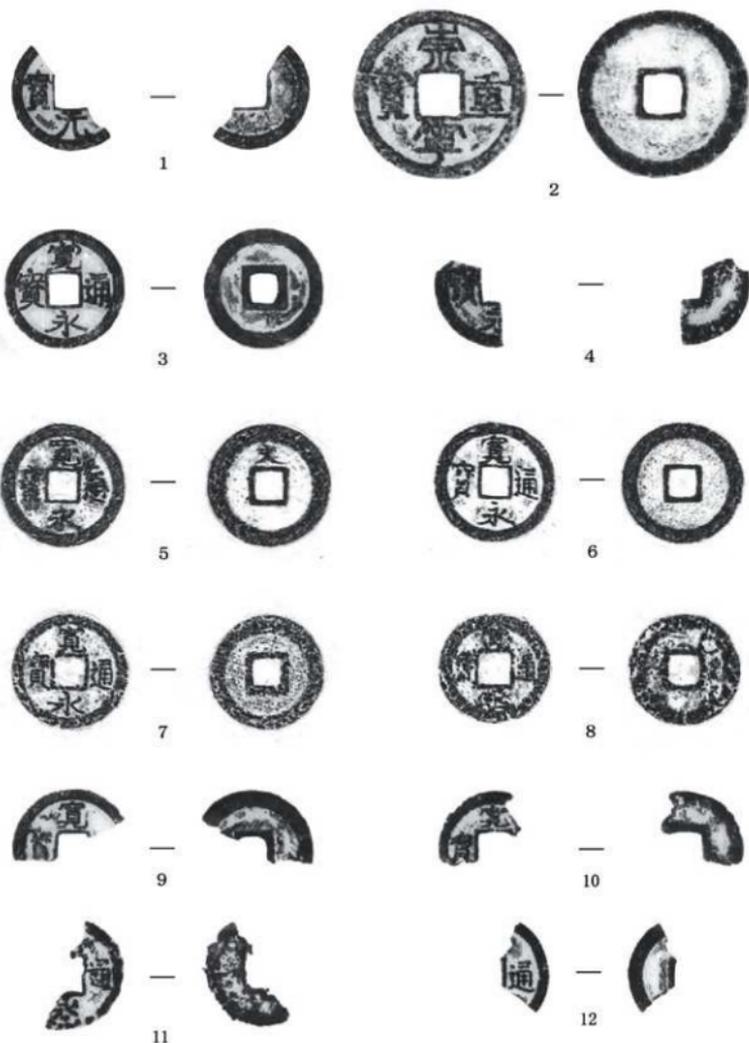
2



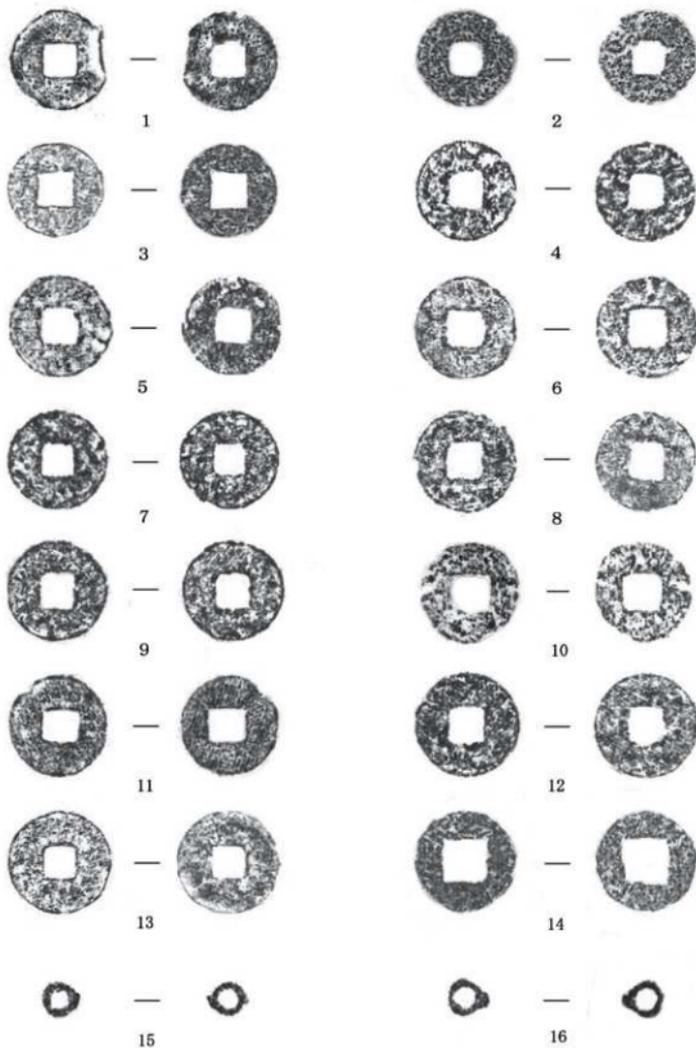
第19图 (图版17) 瓦③



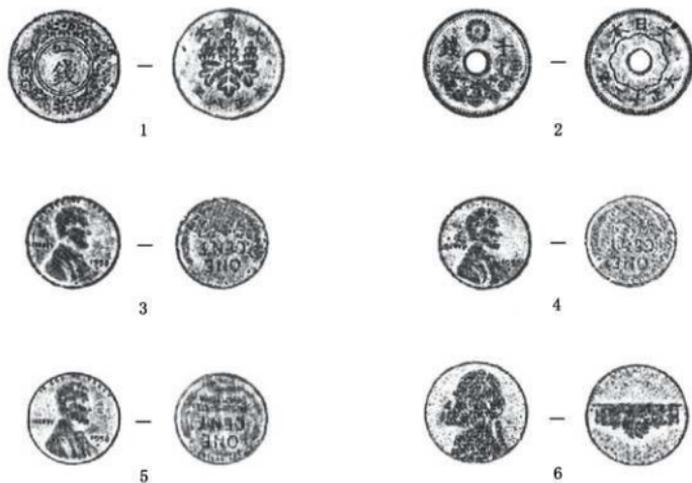
第20圖 (圖版18) 瓦④



第21圖 (圖版19) 錢貨①



第 22 圖 (圖版 20) 錢貨②



第 23 图 (图版 21) 钱货③

## 第七章 まとめ

前章までに今回の調査成果について述べた。ここでは、今一度整理してまとめたい。

### 遺跡の立地について

弁ヶ嶽が所在する那覇市首里鳥堀町は、首里崎山町・首里赤田町とともに首里三箇の一つで泡盛造りが盛んな地域であったことが知られている。また、「瓦墳」と称される窯跡（鳥堀古瓦窯）があり、首里城正殿を板葺から瓦葺にした際に瓦を焼いた窯と言われる。

弁ヶ嶽は、那覇市の北東に位置する最高所（標高約165.6m）で、市内を西流する河川（安里川）の源流でもある。頂部付近では第三紀泥岩・砂岩の露頭が見られる。丘陵の西側縁には、井泉も所在することから泥岩の上部には琉球石灰岩が覆う地質であることが想像される。また、首里城からみた風水上の要所で、琉球国王の親祭も執り行われた由緒ある場所でもある。

### 敷石遺構と拝殿について

今回の調査では、大嶽石門前の平場において敷石遺構が検出された。しかし、かつて所在していたとされる拝殿の具体的な痕跡（礎石等）は確認できなかった。敷石遺構と拝殿との関係は、今後、詳細な検討を行ってきたい。

ここで、敷石遺構と拝殿について検討する。

敷石遺構を覆う土層（な-101 グリッド 0/20・に-101 グリッド 0/20 第①層）から多種の遺物が出土している。その中で、具体的な年代を示す銭貨の出土状況を見ると、百円（昭和47年）、十銭（大正十二年）、五円（昭和47年）、五十円（昭和44年）、米国1セント（1958年：昭和23年）が出土している。これらのことから第①層は、戦後の痕跡が残されている。

次に、敷石遺構の直下の土層と考える「に-100 グリッド（トレンチ）30/40・40/50（第②層）」では、崇寧重寶、寛永通寶、無文銭が出土している。特に無文銭がまとまった状態で出土したことは注目された（40/50 ドット遺物①～⑩）。

また、「に-101 グリッド 40/50・50/60（第②層）」出土の本土産磁器は、17世紀代の肥前系の瓶（第10図13・14）である。

これらのことから第②層は、17世紀代以降の時期と想定できる。ただ、第②層は、敷石遺構の外側（敷石の無い部分）で、確認したもので、敷石遺構下部の安定的な堆積状況とは断定はできないことを断っておきたい。

一方、拝殿の建立は、琉球国由来記・球陽・国王頌徳碑（かたのはなの碑）などの文字史料から、嘉靖22（1543）年頃と見られること、18世紀初頭の「首里古地図」に拝殿が描かれていること（参考資料：絵図資料2・3）、道光十九年（1839年）に写し直したとされる図帳（勢頭方・当方）に5間×2間+半間の絵図（参考資料：絵図資料10・12）が描かれていること、使琉球記の「（前略）柵外に板閣二楹あり。（後略）」の記述があり何らかの建

物の所在が示唆されることなどから、16世紀中頃から19世紀初頭までは拝殿が所在していた可能性が高く、ペリ来琉の際（ペルリ提督琉球訪問記等）や、戦前・戦後の写真（参考資料：写真資料）では、拝殿が見られないことなどから、近代以降には存在しなかったものと解される。

また、戦後の大嶽石門の写真（参考資料：写真資料5・6）では、石門前に敷石は見られない。

今後、拝殿の礎石の検出や敷石遺構の追加調査、さらに、調査範囲の拡大などと合わせて、敷石遺構についての詳細を検討していく必要がある。

また、現在、大嶽の周辺に見られる石積み等には、加工された琉球石灰岩や第三紀砂岩製の石材等が使用されている。石門や拝殿の礎石等の古材を転用している可能性が高く、今後の調査及び注意が必要である。

### 遺物について

遺物は、総数1694点を数えた。その中から、白磁、青花、褐釉陶器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、簪、円盤状製品、煙管、土器、ガラス製小玉、石製品、瓦、銭貨を報告した。

今回得られた資料で注目されるものは、「に-100グリッド西側トレンチ40/50ドット遺物①～⑩」の銭貨である。弁ヶ嶽の大嶽石門と関連が深い「園比屋武御嶽」では、「1956年、首里王朝時代の重要な拝所である園比屋武御嶽の石門を復元工事中、石門の礎石の左右二カ所に椀状の凹みがつくられ、それぞれの凹みに大小の鳩目銭多数、鳩目銭を模倣した金貨（鳩目金？）が各3枚埋蔵されていた。（後略）」ことが知られている。1519年、西塘によって建立されたと言われる両石門の共通点として興味深い事例である。また、南城市の斎場御嶽では、金製を含む勾玉や、中国青磁器・銭貨を組み合わせた一括資料が出土している。今後、市内は基より、県内における類似資料の追加を待ちたい。

凝灰岩製の石製品（第16図 図版14）の出土も貴重である。石門前に所在する石灯籠の宝珠部分と考えられる。

「に-100グリッド60/80（第④層）」では、1点の土器の出土を見た（第15図3 図版13の3）。所謂グスク土器の範疇で捉えられる資料である。上層の第②層との間に第③層が堆積しており、第③層は無遺物層と解している。これらの状況から、弁ヶ嶽一帯は、琉球国時代における整備以前から遺跡の所在していた可能性が示唆される。断定的な範囲での調査であり、且、出土資料の乏しさから判然としない部分が多いことは否めないが、今後留意していきたい。

### 最後に

今回確認された敷石遺構が拝殿に関連する施設であった場合、遺構下部の土層（第②層）が17世紀以降と示唆されること、拝殿の建立時期が16世紀中頃と見られることから、拝殿の建立後に周囲の整備の一環として敷石が敷設されたことも想起される。

今回の報告では、調査成果の他に各分野の諸先生方に弁ヶ嶽に関する示唆に富む論考をま

とめて頂いた。論考1、2、3として掲載したので参照頂きたい。

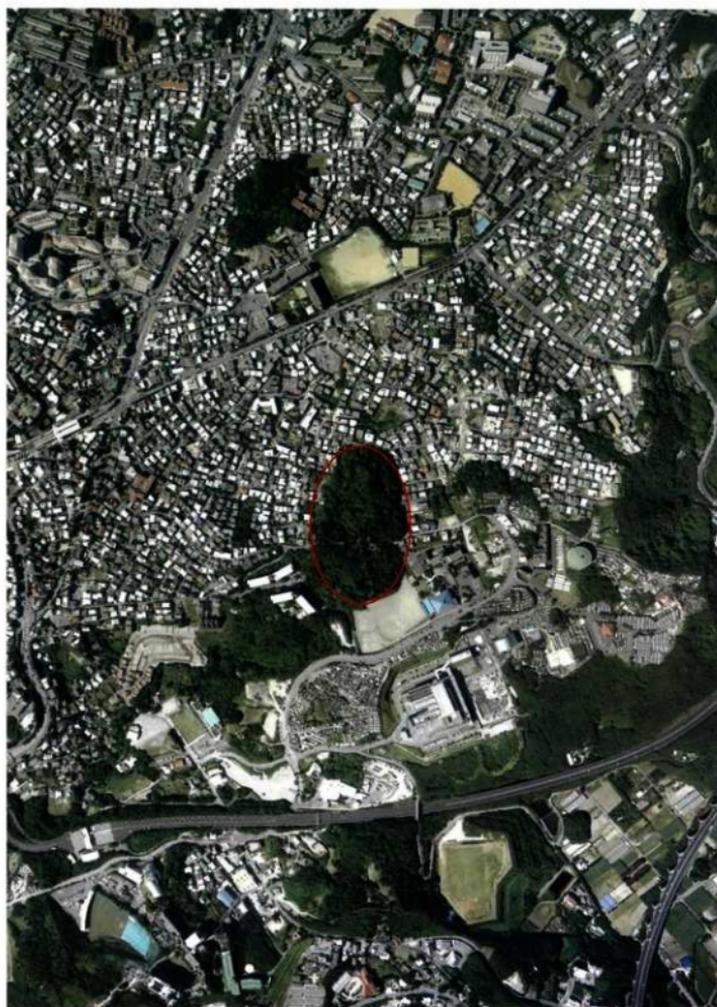
また、弁ヶ嶽に関する参考資料として、文献資料・絵図資料・写真資料を掲載した。ただし、掲載した資料は一部にとどまっている。今後も、関係資料の収集に努めていきたい。合わせて、各資料の分析・検討を行うことにより、弁ヶ嶽の理解に資するものとする。

最後に、今回確認された敷石遺構と拝殿との関連の検討はもとより、石門との配置関係も今後の検討課題であろう。さらに、御嶽(拝所)の性格を有する「弁ヶ嶽」の成立及び詳細な背景についての研究も深化させていく必要がある。論考で示された興味深い弁ヶ嶽の背景や参考資料のさらなる収集及び分析、遺構確認調査の追加も合わせて、さらに成果を集成することによって「弁ヶ嶽」の復元整備計画及び本市の活性化の基礎となることを期待したい。

#### 【参考文献・引用文献】

- ・『思い出のわが町』 (21) 鳥堀町 沖縄タイムス朝刊 1976年9月2日
- ・『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 株式会社 角川書店 昭和61年7月8日 P509 [近世]鳥小堀村
- ・那覇市教育委員会文化課 『那覇市歴史地図—文化遺産調査報告書—』那覇市教育委員会 昭和61年3月 P30 ③鳥堀古瓦窯跡
- ・那覇市教育委員会文化財課 『那覇市の文化財 平成18年度』 那覇市教育委員会 平成19年3月 P125 弁ヶ嶽
- ・那覇市歴史博物館 『那覇市の史跡・旧跡ガイドブック』 那覇市 2014(平成26)年3月15日 P49 40 弁ヶ嶽
- ・総務部市史編集室・那覇市史編集委員会 『那覇市史』資料篇 第1巻1 那覇市 1968年6月30日 P20 「琉球 29. 巽嶽の石垣を創建す(尚真王43年)」  
P134 「琉球国由来記 35. 巽大嶽 鳥小堀村」
- ・沖縄県教育庁文化課 『琉球国絵図史料集 第三集—天保国絵図・首里古地図及び関連史料—』  
沖縄県教育委員会 平成六年三月
- ・『首里城関係資料集』 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月
- ・神田精輝 『ペルリ提督琉球訪問記』平成9年7月28日 株式会社 国書刊行会 P35
- ・外間政章 『対訳ペリー提督沖縄訪問記』1962年6月30日 P69
- ・企画部市史編集室 『那覇市史』資料篇 第1巻3 那覇市 昭和52年3月25日 P276 「使琉球記：李鼎元 9月 初八日、丁亥、晴」
- ・富元政秀 『沖縄県内出土の銭貨について』『南島考古』創刊号 沖縄考古学会 1970年6月30日 P25 ④ 圓比屋武御嶽
- ・『沖縄大百科事典 下巻』 沖縄タイムス社 1083年5月30日 P432 弁ヶ岳
- ・知念村文化財調査報告書第8集『国指定史跡 斎場御嶽0—整備事業報告書(発掘調査・資料編)』  
知念村教育委員会 平成11年(1999年)3月31日
- ・知念村文化財調査報告書第9集『国指定史跡 斎場御嶽 整備事業報告書(工事・資料編)』  
知念村教育委員会 2002年(平成14年)3月28日
- ・『世界文化遺産斎場御嶽』リーフレット 南城市

# 圖 版



図版1 遺跡一帯の空中写真(2010年9月27日撮影)

(S:1:10,000)



図版2 弁ヶ嶽の遠・近景と調査区全景

左1:遠景(北東から)

左2:近景(西から)

左3:調査区全景(南から)

左4:調査区全景(南から)

右1:遠景(東から)

右2:弁ヶ嶽から首里城を望む

右3:調査区全景(南から)

右4:調査区全景(南から)



図版3 遺構の層序

左1:に-100グリッド南壁  
 左2:に-100グリッド南壁  
 左3:に-100グリッド西壁  
 左4:に-100グリッド西壁

右1:に-100グリッド南壁  
 右2:に-100グリッド南壁・西壁  
 右3:に-100グリッド西壁  
 右4:に-100グリッド西壁



図版 4 遺構の検出状況

左1: な-101グリッド(南から)  
 左2: ん-101グリッド(東から)  
 左3: に-101グリッド(西から)  
 左4: な-100グリッド(北から)

右1: な-101グリッド(北から)  
 右2: に-101グリッド(北から)  
 右3: に-101グリッド(西から)  
 右4: な-100グリッド(東から)



図版5 遺物の出土状況

左1:石灯笼の宝珠(な-100グリッド0/20)

左2:銭貨(に-100グリッド30/40)

左3:銭貨(に-100グリッド30/40)

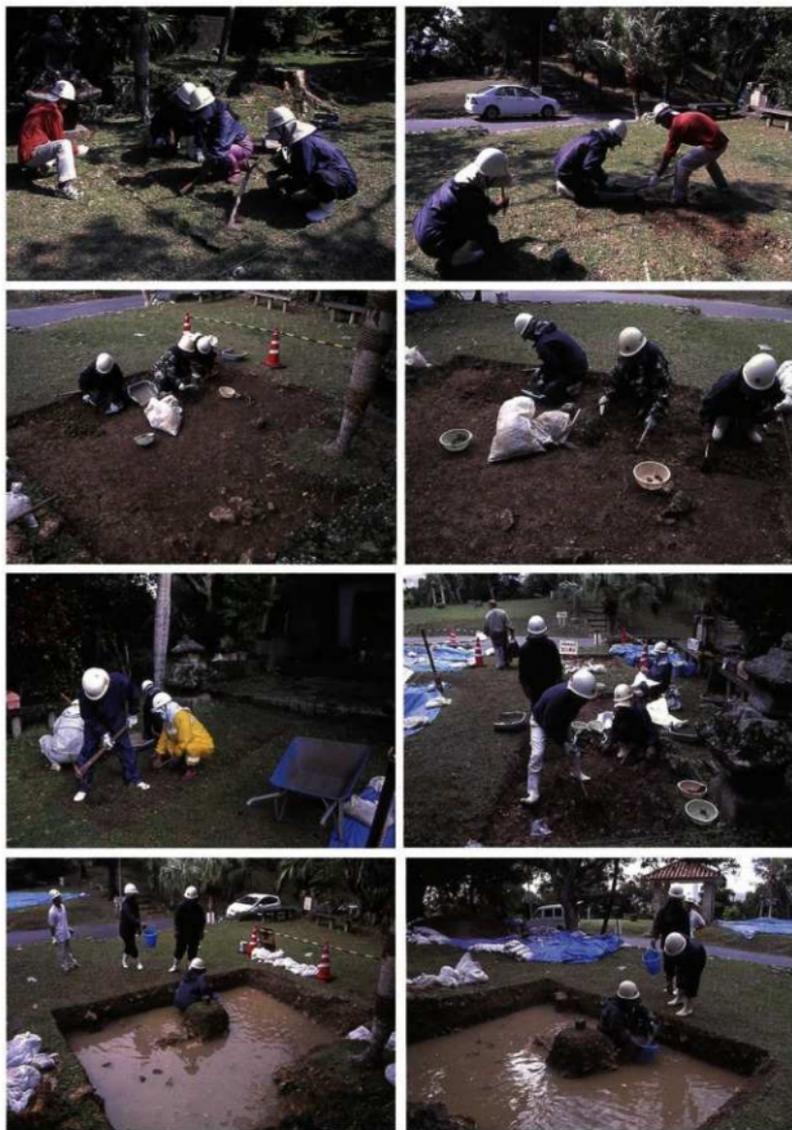
左4:髷(な-101グリッド0/20)

右1:銭貨(な-100グリッド0/20)

右2:銭貨(に-100グリッド30/40)

右3:銭貨(に-100グリッド40/50)

右4:本土産近代磁器(な-101グリッド0/20)



図版6 作業状況

左1:に-100グリッド作業開始  
 左2:に-100グリッド(0/20)  
 左3:な-100グリッド作業開始  
 左4:に-100グリッド冠水状況

右1:に-100グリッド作業開始(北東から)  
 右2:に-100グリッド(0/20)  
 右3:な-100グリッド(0/20)  
 右4:に-100グリッド冠水状況



図版7 作業状況

左1:平面実測作業(に-101グリッド)

左2:平面実測作業(に-101グリッド)

左3:平板測量(南から)

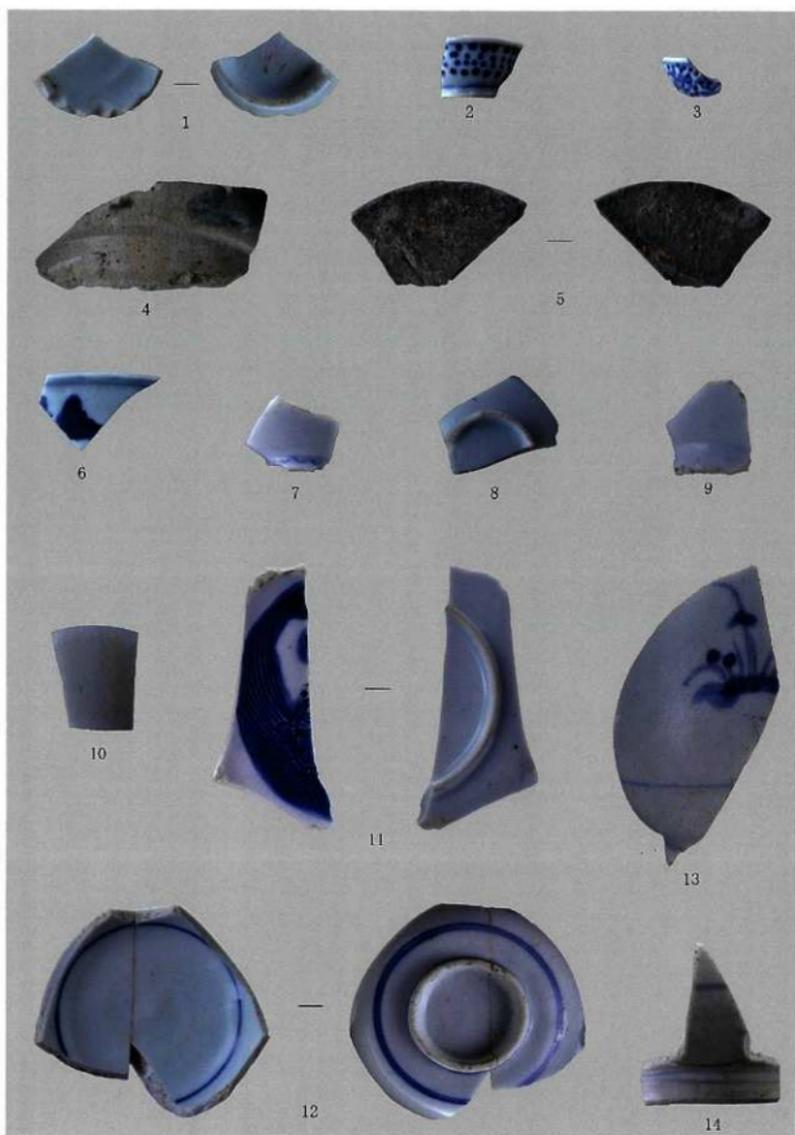
左4:平板測量(東から)

右1:平面実測作業(に-101グリッド)

右2:平面実測作業(に-101グリッド)

右3:平板測量(北から)

右4:平板測量



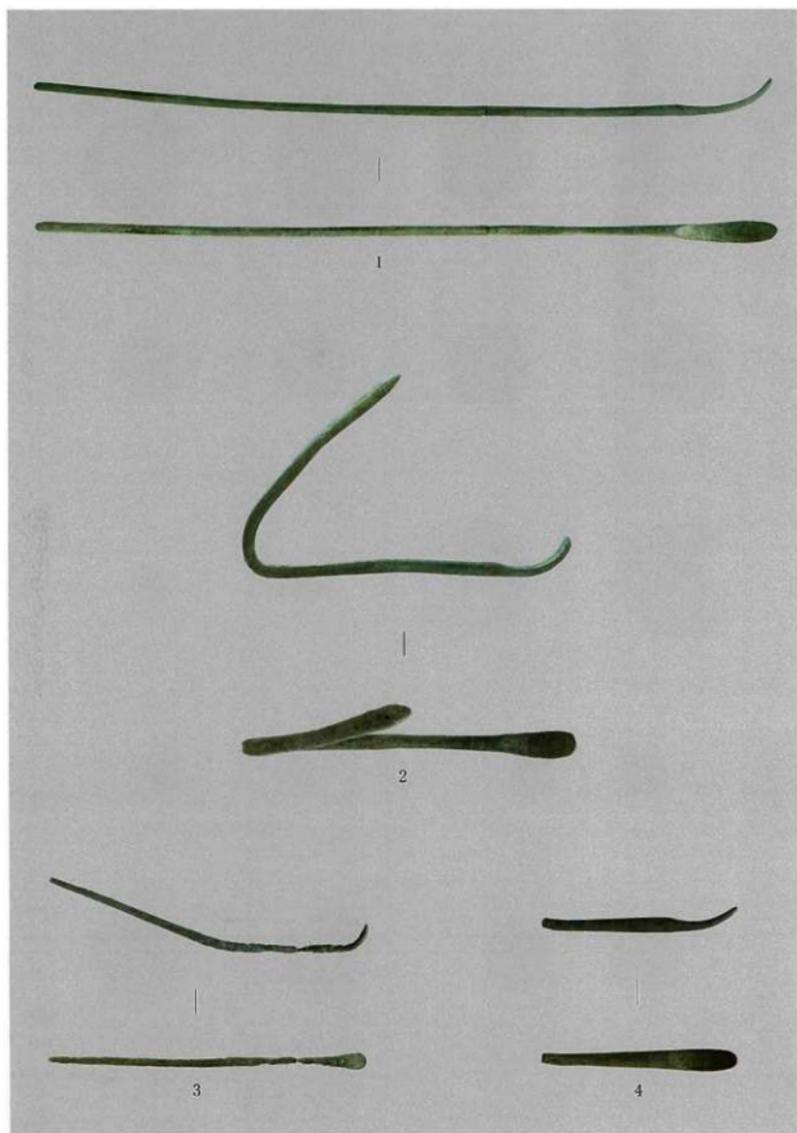
图版 8 (第 10 图) 白磁 (1)、青花 (2~4)、褐釉陶器 (5)、本土産磁器 (6~14)



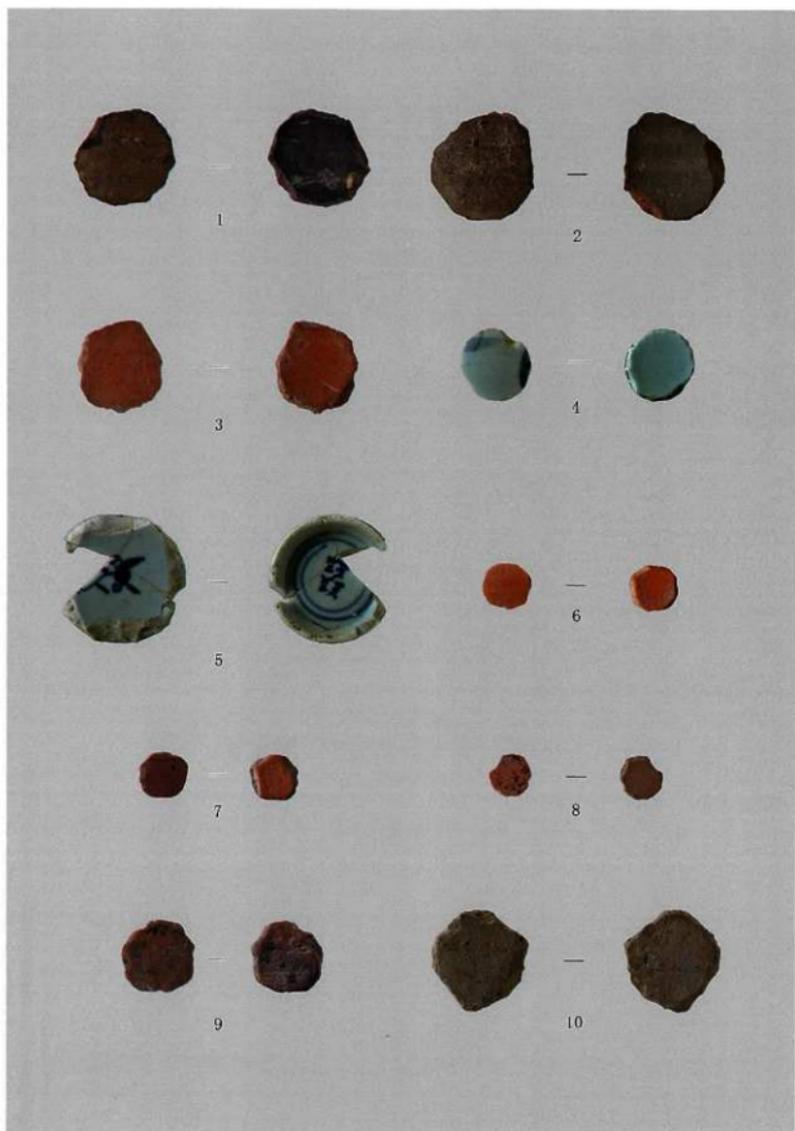
图版9 (第11图) 冲縄産施釉陶器



图版 10 (第 12 图) 冲繩産無釉陶器



图版 11 (第 13 图) 管



图版 12 (第 14 图) 円盤状製品



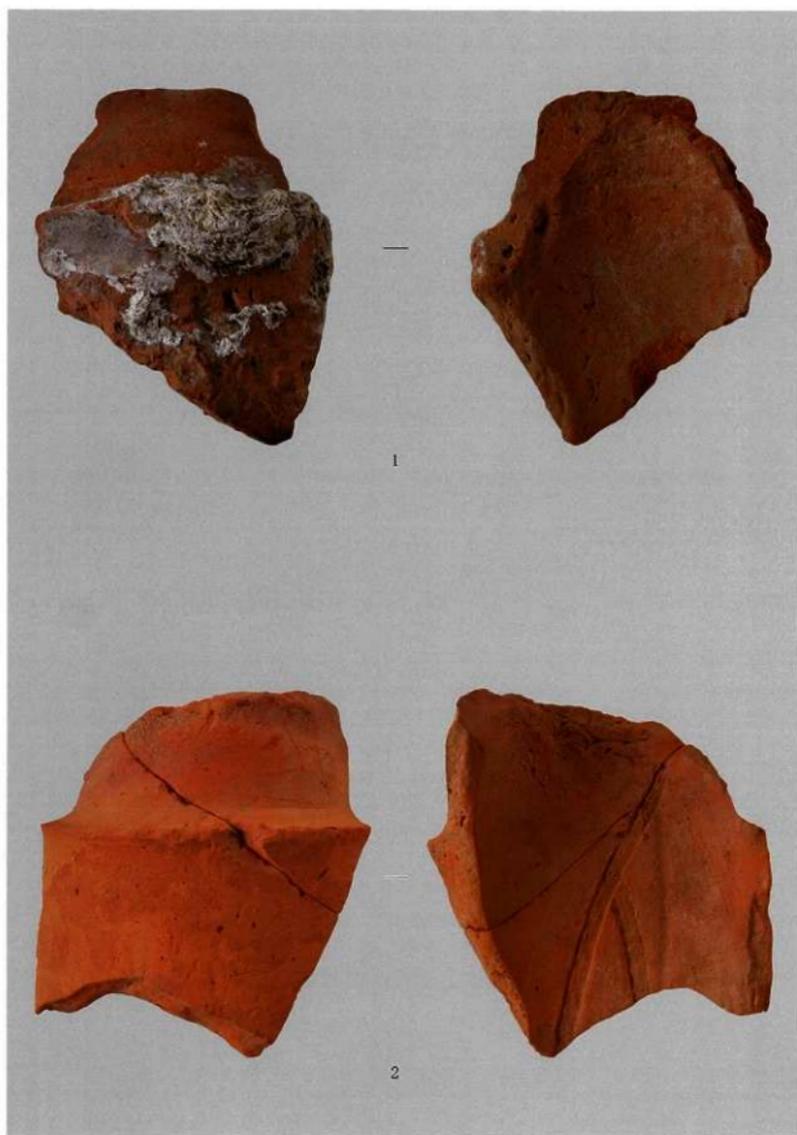
図版 13 (第 15 図) 煙管 (1・2)、土器 (3)、ガラス製小玉 (4)



図版 14 (第 16 図) 石製品



图版 15 (第 17 图) 瓦①



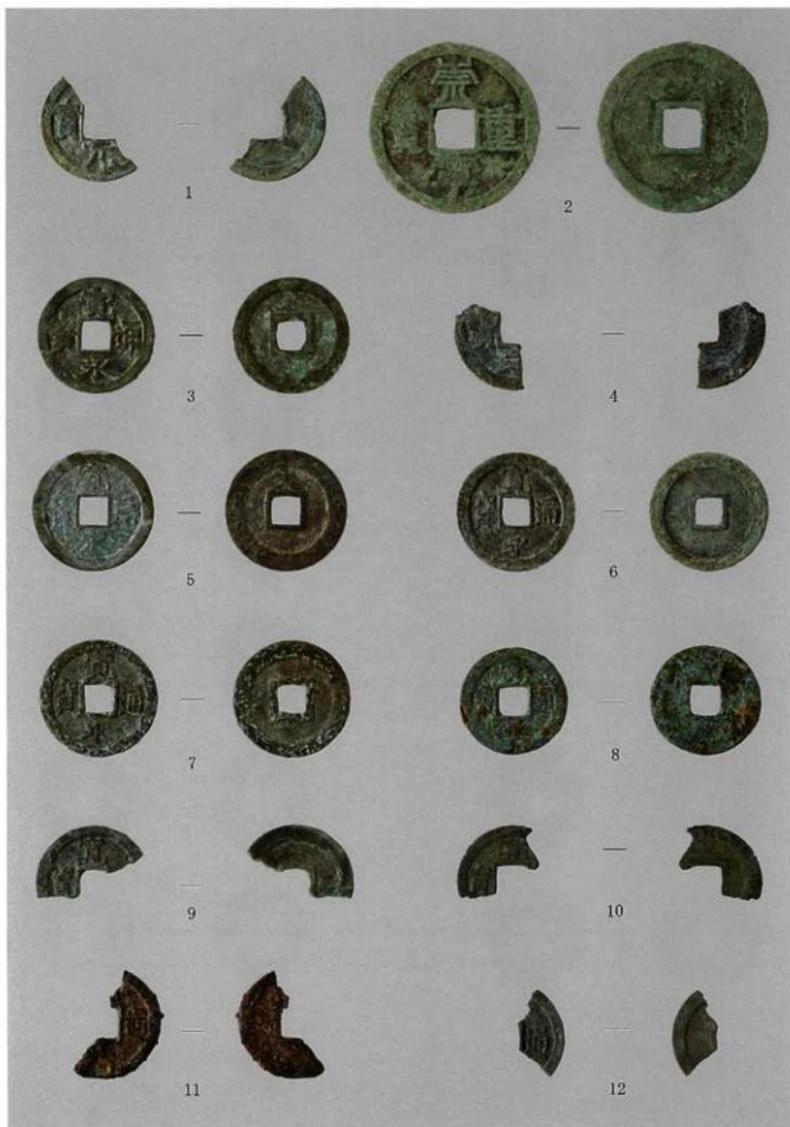
图版 16 (第 18 图) 瓦②



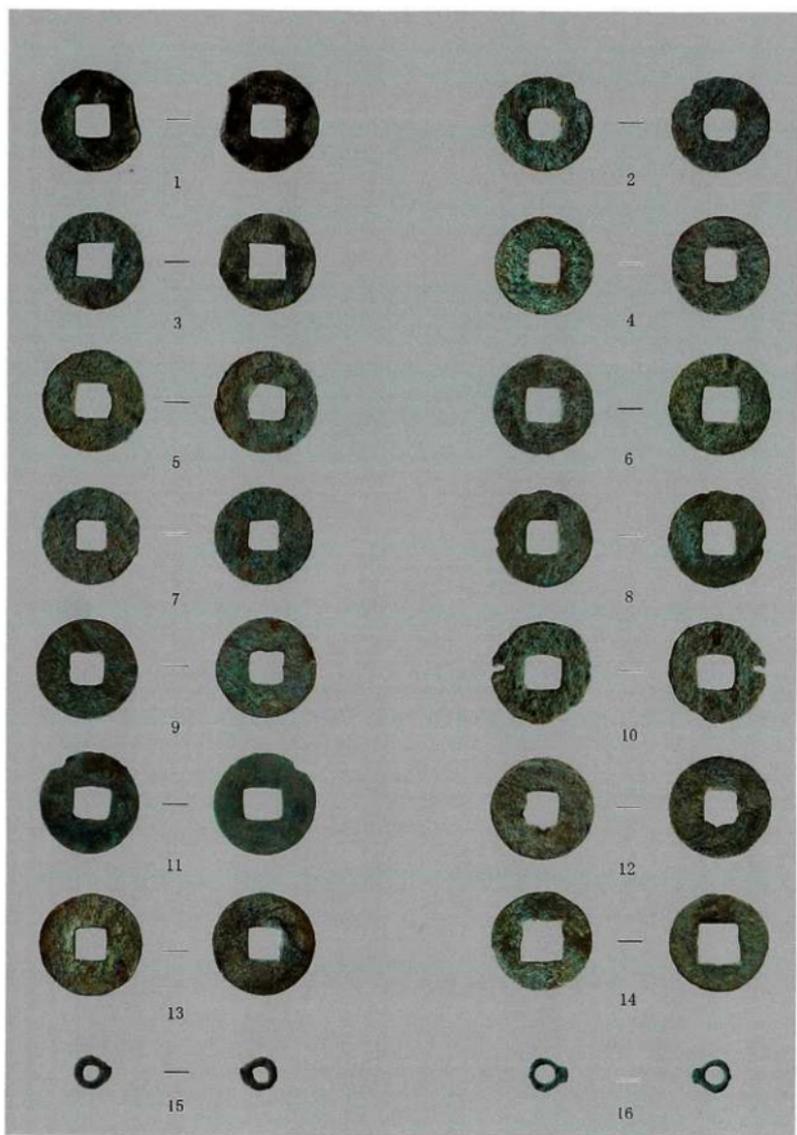
图版 17 (第 19 图) 瓦③



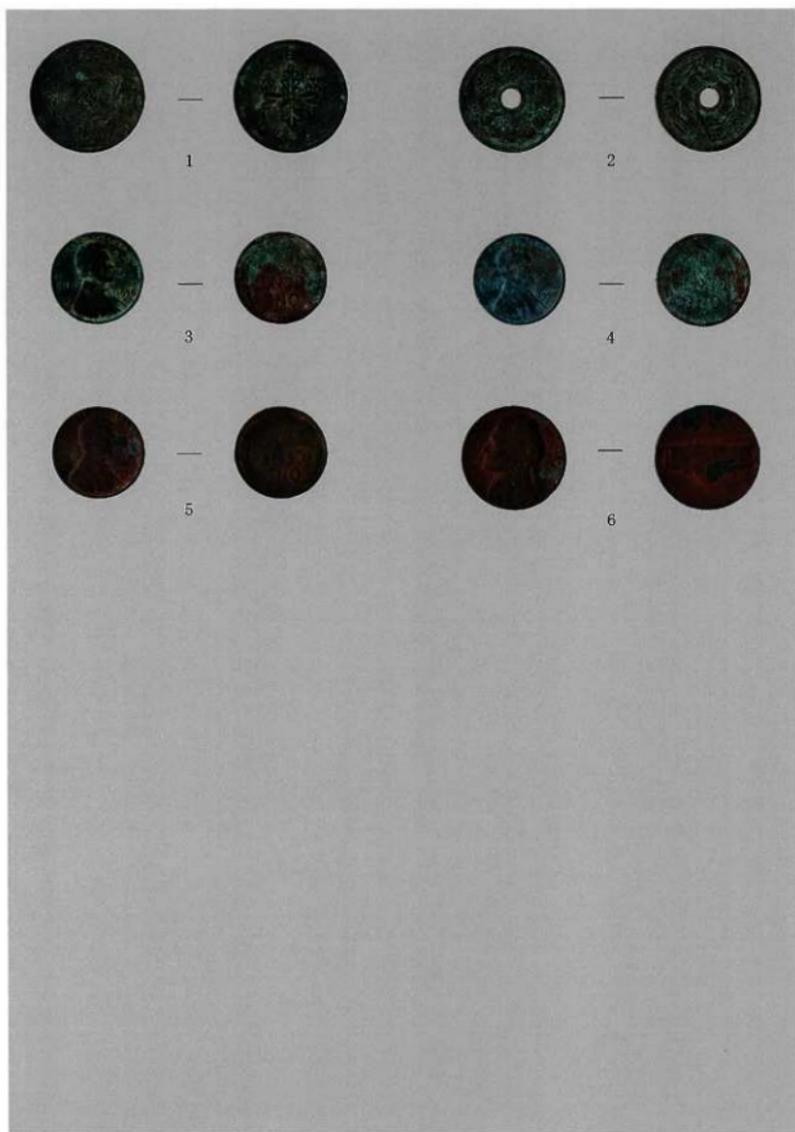
图版 18 (第 20 图) 瓦④



图版 19 (第 21 图) 钱货①



圖版 20 (第 22 圖) 錢貨②



图版 21 (第 23 图) 钱货③

## 論考 1 弁ヶ嶽史料調査報告

那覇市文化財調査審議会委員

深澤 秋人

那覇市の最高地点である弁ヶ嶽は、首里台地の東端部に当たり、台地のなかでもひととき高くそびえる標高165.7mの丘である(所在地は那覇市首里鳥堀町4丁目121、同5丁目62)。1543年に建立された国王頌徳碑(かたのはなの碑)によると、琉球王国の時代には、諸峰に冠たる高峰であるため、「冕嶽」(冕は冠)とも称されていた。同じく首里台地に位置する首里城跡からは東方に約1キロほどの距離がある。島尻層(クチャ)と呼ばれる粘土層を基盤に水源涵養に富んだ琉球石灰岩が不整合に覆う地形・地質の場所に立地する。台地の北を流れる真嘉比川、南を流れる金城川の源流地でもある。

弁ヶ嶽は「ピンヌウタキ」と呼ばれる御嶽でもあり、大嶽と小嶽の二つがある。前出の国王頌徳碑によると、すでに16世紀の段階から「神仙来貢降遊の靈地」とされ、国王から民衆にいたるまで「泰山北斗」のように仰ぎ尊び、多くの人びとが参詣していた。1519年には、石垣が造営され、大嶽の前に石門が建立されている(『球陽』巻三尚真王43年条)。しかし、参道は、「高低屈曲」する「長路」であり、日照りが続くと路面はひび割れ、雨が降ればひどくぬかるむなど、必ずしも整備された状態ではなかった。1543年、尚清王は、小石を敷いて石畳道に改修させ、沿道に松を植えて木陰を作らせるなど、参詣者の往還に便ならしめている(前出の国王頌徳碑)。

後世の資料ではあるが、18世紀初頭に製作された首里三平等の屋敷図としての性格を持つ「首里古地図」からは弁ヶ嶽の景観に接することができる(図1)。首里城の東に延びる上ぬ毛の東端部に当たるカタヌハナから参道がつながり、石垣に囲まれた二つの御嶽、大嶽の石門、弁ヶ嶽の丘に松と思われる樹木がうっそうと繁茂している様子が描かれている。二つの御嶽には「弁ノ大嶽」と「弁ノ小嶽」の文字も見いだせる。また、18世紀前半に実施された「乾隆検地」の情報が反映され、1780年代に成立した「間切図」でも、弁ヶ嶽の丘と大嶽の石門かと思われる施設が描かれている(図2)。

1713年に編纂された琉球王国の地誌である『琉球国由来記』巻五の「首里中火神並御嶽之事」には、南風之平等の鳥小堀村の項目として、「冕大嶽」(神名は「玉ノミウズデルカワノ御イベツカサ」)、「同小嶽ノ御イベ」(神名は「天子」)が存在する。二つの御嶽とも、三平等の大あむしられ(高級神女)の一人である首里大あむしられの崇所であった。後者によると、小嶽は琉球国王が祈願のため行幸する祈願所としての性格を持ち、小嶽の前には国王が斎場御嶽を遙拝する「御拝所」が設けられていた。

同書巻一「玉城之公事」の正月の項目には「御参詣」を見いだせる。正月・五月・九月の吉日を選び、国王が弁財天堂・弁之嶽・末吉権現・観音堂・識名権現を参詣するのは、国王の健康、子孫の繁栄、国家の安穏を祈願するためであった。このうち、弁之嶽・末吉権現・識名権現への参詣は、尚賢王の在位期間である1644年の正月に始まったとある。『女官御

双紙)には、このとき、三平等の大あむしられによって唱えられる御たかへの「意趣」が収録されているが、上記の目的のほか、五穀豊穰、さらには、中国・日本とのあいだや宮古や八重山などの琉球の島々を行き交う船の航海安全を祈っていることが知られる。

航海安全については、1778年、薩摩藩から委託され琉球へ派遣されたと思われる種子島の船頭の伝平が弁ヶ嶽に鳥居を奉建(=奉献)している(『球陽』附卷三尚穆王27年条)。弁ヶ嶽は海上からも格好の目印となり、航海標識とされていた。のみならず、船頭の伝平は、航海の加護を祈願するため、鳥居を奉献したのだろう。弁ヶ嶽は大和船の乗組員の航海信仰の対象ともなっていたことがわかる。

1713年、久米村の毛文哲と蔡温らが首里城などの風水を判定した。ここにおいて、弁ヶ嶽は、王国の都である首里の空間構造のなかでも重要な意味づけをされることになる。

首里城は優れた立地にあるとされたが、風水の観点から重視されたのは、前方(西側)の慶良間諸島、左右(南側と北側)と後方(東側)の丘陵、左右の丘陵のあいだに位置し、海水と交わる那覇港・泊港・安謝港の三つの港であった。このうち泊港は、安里川の河口でもあるが、安里川は首里台地を流れる真嘉比川と金城川が合流した河川である。上流の二つの河川の源流地が弁ヶ嶽であることは前述した通りである。

三方の丘陵は、左側(南側)は小祿・豊見城地方の峰々が連なり、青竜となって城都を鎮め、右側(北側)には北谷・読谷山地方の峰々が起伏に富み、白虎として城都を護り、後方(東側)は西原地方から島尻にいたるまでめぐる峰々はもらすところが無く、遠くから鎮護しているとある。そして、首里城の東側に当たる冤嶽、北側の虎瀬山、南側の崎山御嶽を個別に取りあげ、遠近の林樹とともに、「森々として城を繞(めぐ)り、しかしてよくその盛気を扶(たす)くる者、皆、城都の風水に非ずや」と結論づけている。

さらに、弁ヶ嶽は、首里城との特別な関係や意味を持つ場所として位置づけられた。「冤嶽は、乃ち城基発祖の地に係る」とされたのである。その樹木が大いに繁茂して「深秀」であれば、「城地の気脈」はこれに随って盛んになる。しかし、もし衰退させるようなことがあれば、必然的に「気脈」も衰える。願うらくは、苗木を植え、その範囲を広げ、樹木を増やすことが肝要であると強調している(『球陽』卷十尚敬王元年条)。弁ヶ嶽は、風水のうえでの首里の軸線である「城地の気脈」によって、首里城とつながることになったのである。「気脈」の起点こそが弁ヶ嶽であった。

はたして、19世紀において、苗木の植え付けが行われていたことを確認できる。1856年、苗木5,000本が島小堀村の人びとによって「弁之御嶽」に植え付けられている。苗木のサイズは1尺5寸(約45%)から2~3寸(約6~9%)であり、西原・浦添・宜野湾の三間切によって準備され、王府から代銭が支給されたようである(『琉球王国評定所文書』第十二巻所収、「年中各月日記(帳当座)(咸豊六年)」306-1~2号文書)。

今回の史料調査報告では、弁ヶ嶽の歴史的特徴として以下の点を指摘した。①少なくとも16世紀前半には聖地として人びとから崇敬されていたこと、②17世紀前半には琉球国王が行幸する祈願所の一つとなり、国家的祭祀の場となったこと、③琉球の人びとのみならず、薩摩の船頭の航海信仰の対象ともなっていたと思われること、④18世紀前半、首里の都市計画において、「城基発祖の地」と位置づけられ、首里の軸線である「城地の気脈」の起点と

して首里城と特別な関係を持っていたこと、である。

以上のような歴史的特徴から、弁ヶ嶽は、国の史跡として指定する価値を十分に備えていると思われる。

図1 首里古地図：

部分拡大図 弁ヶ岳  
(沖縄県立図書館所蔵)



図2 間切図：中頭南

(西原間切・浦添間切・  
宜野湾間切・中城間切)  
部分拡大図  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



#### 参考文献

- ・沖縄県教育庁文化課編『沖縄県文化財調査報告書第六十九集 金石文－歴史資料調査報告書V－』沖縄県教育委員会、1985年
- ・(財)海洋博覧会記念公園管理財団総監修『琉球王府 首里城』（ぎょうせい、1993年）所収、第3章 立地と基本プラン、「立地の特徴」
- ・那覇市教育委員会文化課編『那覇市の文化財』（那覇市教育委員会、1997年）
- ・真栄平房昭「近世の航海信仰と種子島船」（『がじゅまる通信』No.33、2003年）
- ・琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課編『琉球国絵図史料集 第三集－天保国絵図・首里古地図及び関連史料－』（沖縄県教育委員会、1994年）

## 論考 2 弁ヶ嶽について—近代以降を中心に—

那覇市文化財調査審議会委員  
栗国恭子

はじめに

弁ヶ嶽は、古琉球時代から琉球王府における信仰の拝所であった。

地方の神女組織は、第二尚氏・尚真王（1465—1526）時代に国の宗教政策の展開過程で、政治的組織に組み込まれ、国王のオナリ神である聞得大君（チフィジン・きこえおおきみ）を頂点にした神女組織制度が確立したとされる。国の統治機構に宗教政策を担う国内の女性たちが組み込まれた。神女制度は、琉球国が無くなるまでの3世紀余の間、維持されたシステムである。一方外来宗教としては、第一尚氏王統時代から重用され、宗教政策を担った仏教（禅宗・僧侶）、神道系（琉球八社の神職）領域の男性中心の司祭たちが存在する。神女達と共に、互いに国家の祭祀を司っている。

このように琉球国の祭祀の世界は、琉球国成立時から重層的な信仰体系を取り入れたといえる。ある意味で、土着的な民俗信仰における女性の「聖なる表象」の神女政策と、日本を含む東アジア社会で共有可能な男性司祭の信仰体系をバランスよく取り入れた。ジェンダー・ポリティクスの構図に特徴があると指摘できよう。ジェンダー・ポリティクスとは、社会における性（男女）の文化的役割である「ジェンダー」が政治的な意味や構造を有していることを示している。

聞得大君は、国王の親族の女性達（妹・妻・母・叔母）が就任し、三十三君と呼ばれる王族の高級神女、王府祭祀の司祭である首里地域には三平等大阿母志良礼（みひらのおおあむしられ）である首里大阿母志良礼、真壁大阿母志良礼、儀保大阿母志良礼の三人がおり、その三人で国内を三分割して、琉球各地の大阿母やノロを管轄している。そして沖縄本島及び周辺離島、先島地域で数百人のノロ（ノロクモイ、先島ではツカサなど、以後はノロと総称する）が組織化されその役割を担った。三平等あむしられの中で、首里大あむしられが、首里城内の御嶽や弁ヶ嶽の祭祀を管轄し中心となっている。



Figure 1 首里城からの絵巻書(戦前)

### 1、弁ヶ嶽と王府祭祀（神女組織）

弁ヶ嶽は、首里城の東方に位置し周辺では高い標高から、祭祀の祭場として久高への遥拝所及び畜場御嶽や今婦仁への遥拝所の評価がなされている。

ここでは18世紀に成立したとされる「首里古地図」（県立図書館所蔵）に描かれた弁ヶ嶽と、従来の歴史文献で記載された弁ヶ嶽について確認しておきたい。

琉球王府編纂『琉球国由来記』（1713）には、「王城之公事」や『女官御双紙』（1706~1713）の歴史史料では、正月、5月、9月に、国王が弁ヶ嶽に行幸する祭祀が行われている。三



Figure 2 「首里古地図」弁ヶ嶽全体

平の大あむしられの神女たちは、行幸の前日に御嶽内を掃除し、当日はお祝物、大勢頭部、大庫裡あむしられによって飾られ、御たかべ（祝詞）、「美御持（刀?）」を拝み、三平大あむしられたちは、いべ（神体）の前で香をたき祈る。その後「下のおさすか」（絵図では石門前の建物か?）にて、お茶や五水、酒などが参加者（勢頭親雲上へ）にふるまわれる。その他親



Figure 3 「首里古地図」弁ヶ嶽大嶽



Figure 4 「首里古地図」弁ヶ嶽小嶽

方部、申口衆は御嶽前で三十三拝、九拝をする。その後小嶽のいべ（神体）を拝み、「下の御さすか」（上記と同じ場所か、小嶽の中にあつたのか：写真9-12）で知念さやは御嶽（せいふあ御嶽：斎場御嶽）へ向かい拝みをした後、その後末吉宮へ行幸し拝みをした。また「雨乞い」の際には、首里城の御嶽や聞得大君御殿とともに弁ヶ嶽に三平等の大あむしられによって祈りがなされている（『神道大系神社編 52 神繩』神道大系編纂会、1982、21-23P、26p）。

「首里古地図」には小嶽の祭祀空間（祭場）は、東方というよりも西方の那覇や那覇港に向かう空間として描かれている。「首里古地図」の小嶽の祭場表現は、現在民間信仰で語られる東方（久高・斎場御嶽）遥拝所としての役割だけではない構造になっている。尚穆王の冊封副使・周煌がまとめた「琉球国志略」（1756年）には、南向きに海を望み海神を祭り国王や神女達が「山海及護国神」に親祭り、毎年正五九月に祭祀を行うことが記載されている（『鎌倉芳太郎資料集 ノート篇IV』1017p）。

また、弁ヶ嶽から冬至には久高島、夏至には津堅と勝連との間から太陽は上り、共に首里城の位置に隠れて落ちるように見えるという（『鎌倉芳太郎資料集 ノート篇IV』378p）。

さらに18世紀初期に成立した「女官双紙」には、弁ヶ嶽の祭祀の「御たかべ」は収録されている（22p）しかし、王府宗教政策を担った聞得大君を頂点とした神女たちが祭

祀の際に唱えたとされる16世紀から17世紀に成立した文献である王府編纂の古謡「おもろさうし」（1531-1623）には「弁ヶ嶽」を詠む古謡が存在しない点は、注目に値する。王府祭祀をめぐる歴史記録の祈りの言葉の記載違いは、「御たかへ」と「おもろ」との対比研究をすることで信仰対象の空間・王府祭祀にとっての〈弁ヶ嶽〉の役割や時代の意味付けの变化が浮かびあがるのではないかと、今後の課題である。

王府の公的な宗教祭祀は、仏教文化の影響を受けた世界と神女組織を中心にとりおこなわれる琉球の民俗信仰を背景とした世界がそれぞれの特徴を持ち、また融合しあって支えている点が特徴的である。

仏教文化の影響を受けた臨濟宗・真言宗の仏教系の行事である五節句、春秋の彼岸、施餓鬼（七月盆）、王家の年忌などの祖先祭祀の行事には、王府の女性・上級神女たちも参加し、焼香を職務として行っている。

## 2、弁ヶ嶽と神社・琉球八社

ここでは、神社・琉球八社の神職たちと弁ヶ嶽の祭祀に注目したい。

真言宗の仏寺に併置された神社は、琉球八社（波之上宮、沖宮、安里八幡、識名宮、末吉宮、天久宮、普天満宮、金武宮）と呼ばれ、多くが現在的那覇市に建立されている。

『女官御双紙』（1706-1713）には、神道系神職祝部及び内侍が関係する祭祀が詳しく記録されている。その〈年中の公事〉の中で弁ヶ嶽を参詣する祭祀は、次のようなものである。

正月、九月、国王の年日（祝い）に、弁が嶽、識名、末吉、観音堂、弁財天堂、荒神堂の間、その年の明方（吉祥方向）の所に七社の祝部と内侍が参詣、御立願をして神楽三座あげる。

弁ヶ嶽、識名宮、末吉宮、観音堂、弁財天堂、荒神堂は共に、古琉球時代から神道の信仰対象である。正月や9月、国王の年日（祝い）には、先述の三平等大あむしられの神女たちと共に、神道系神職たちも弁ヶ嶽に詣で祭祀を行っている。

## 3、明治期の弁ヶ嶽

日清戦争時の頃、沖縄社会で政治情勢による不安から、明治初期の開化党と頑固党との争いが再燃し、首里三平等の頑固党の人々が毎月、朔日（1日）と15日に、「百人御物参（ももそおものまいり）」と称して、古琉球の大礼服を着用し、弁ヶ嶽、円覚寺、弁財天、圓比屋武御嶽、観音堂などに参詣し、旧藩王尚泰の健康と支那（原文ママ）の勝利を祈ったという（伊波普猷「中学校の想出」）。



Figure 5 昭和初期の絵巻首里城から見た弁ヶ嶽

この習俗に関しては「首里の三大寺（円覚寺ほか）、弁財天堂、観音堂など」という記載もある（新崎盛珍『思出の沖縄』P79）



Figure 2と同図 「首里古地図」弁ヶ嶽と麓の智福院

この「百人御物参」で参詣する拝所は、先述の「女官双紙」に記載されている正月、九月、国王の年日（祝い）の神女たちを中心に行われる祭祀や神道系の神職が詣でる弁ヶ嶽、識名宮、末吉宮、観音堂、弁財天堂、荒神堂と比較すると時代の変化によって違いはあるが、近代以降においてもある意味、男性官吏が中心となっていく祭祀との共通する祭場としての弁ヶ嶽は重要であったことが注目される。

戦前の弁ヶ嶽周辺について、新崎盛珍によって書かれた興味深い文章がある。

「弁ヶ嶽の手前、道路の北方に当って、傾斜せる畑地の上方にこんもり一叢の樹立の見える地所が有る。一寸別荘風の構に見えるが、屋根らしきものは見えない。或は墓所かもしれない。一中略一墓地であった。しかし有触れた亀甲形の墓でも無ければ、屋形のものでもない。普通一般の墓は、横合から岩中に掘り込むか、或は掘り込んだように積み込むかしたものであるが、これは普通の住宅のやうに平地に積み上げたものである。二棟並んで建って居るが、一つは方桁造りの屋根になったもので、幅一間半程（約2.7m）、高さ一間程（約1.8m）、一つは梢小形で、屋根は切妻になって居る。此の異風の二つの墓が小暗い樹陰に静かに静まり返っている一中略一墓地の一隅一方桁屋根の墓の傍に、美しい仏像が安置されている一後略一。」

新崎が確認したのは、二臂の如意輪観音の一種で、右膝を立てて其の上に頬杖を付いており肌理の細かい黒石に彫られた等身大に近い座像であった。鼻の当たりが欠けて顔面損傷甚だしいが見事な作品であった。『首里の想出』113-114p) 「首里古地図」には、弁ヶ嶽の麓に「智福院」が記載されており、弁ヶ嶽周辺に仏教関係の施設が存在していることがわかる。



Figure 6 戦前弁ヶ嶽周辺航空写真

真言宗及び臨済宗寺院は、本尊を観音とすることが多く、17世紀に入って急速に受容されている弁財天（弁才天）と共に、その霊験がとかれている。『琉球』（1745年）には、観音信仰をする女性、女性の寄付で神社拝殿を建立して神を勧請する話がある。琉球民俗信仰が古来からもつ女性原理と、仏教は複雑



Figure 7 昭和7年頃の弁ヶ嶽石門

に融合して、沖縄独特の信仰として展開されている。神女達が観音像や絵を拝みの対象としたり、生まれ干支と仏教寺院で祭られている神仏と結び付けて守護神として位置づける十二支拝みなども一般の女性達が支え上げたものといえよう。観音信仰と仏教の関わり合いについても、上記の新崎の記述と現在でも弁ヶ嶽周辺に伝承されている問題にも注意する必要がある。

喜屋武さんの話では弁ヶ嶽の北西の麓には、ノロ殿内と智福院の寺院があったという伝承があり、現在図1(92p)赤丸部分の住宅裏にある井戸がその「ボウズウカー(坊主御井)」(写真62)という説明であった。「首里古地図」に記載された智福院と、この井戸がどのような関りがあるか現在未詳である。しかし、戦前航空写真ではこの地点は畑になっており、この伝承の時代や事実かどうかの信憑性は無い。喜屋武さん独自の伝承認識なのか、地域の伝承なのかも含めて更なる調査が必要である。

#### 4、現在の弁ヶ嶽

現在公園の清掃等ボランティアで行っているのは、喜屋武和子氏(Tel.887-2456)で母(明治40年首里山川の出身)である。現在鳥堀の自治会で「村拝み」として9月のウガミを行っている。喜屋武氏からの聞き書きと、2016年3月22日に弁ヶ嶽及び周辺を調査した報告を行う。

##### (1) 弁ヶ嶽大嶽(写真資料1~62:栗国恭子撮影)

##### 1) 弁ヶ嶽大嶽石門周辺(写真1~12)

石門前の広場には、東へ向かって拝む香炉やイビが設置(写真9~12)されている。詳細は不明であるが、先述した「女官双紙」の「下のおさすか」(絵図では石門前の建物か?)関連の可能性もある。

2) 弁ヶ嶽大嶽石門(内側)の参道には祭壇が3カ所ある。その一つ(写真21~29)には21個の香炉がある。その中には「奉寄進 玉川王子朝達」の銘(写真23)のある香炉も存在する。その他にも「奉寄進」の銘の6ある香炉(写真27)も存在する。喜屋武さんによると「アジビのウコーロ」(按司香炉)のある場所と伝承されている。

3) 戦後新しく設置された祭壇(写真30・31)は、約40年前に冲宮関係の女性の先導で設置された祭壇である。また参道途中にも拝所がある(写真37)

4)、2)の祭壇近くの参道脇に石灯籠(写真33~35・36)が無造作に置かれている。こ

の石灯籠は、戦前の場所（大嶽石門前・原稿写真6）にあった一対一組の小灯籠が移動されたと考えられる。

5）大嶽頂上付近の拝所（写真38～43）戦後整備か。首里周辺で一番高い場所からは首里城がよく見える（写真41と42）、北部へも見通しがよく（写真43、東側（調査した際にはススキで風景みえず）もよく見通せたはずである。

6）弁ヶ嶽の井戸…弁ヶ嶽の大嶽には井戸が2カ所確認できる。一つは大嶽参道沿いに入口のある井戸A（写真13～16）現在でも水量あり、向かって左側には石碑？と香炉（写真16）がある。

もう一つの井戸は、大嶽石門内の祭壇近くにある小さな井戸で（写真19・20）「聞得大君が水撫で」した井戸という伝承（喜屋武氏）もあるという。

（2）弁ヶ嶽小嶽（写真44～47）

東へ（久高や斎場御嶽へ）の遥拝所（写真44）と西に向かって拝む（写真45・47）の2カ所があり、西に向かって拝む祭壇奥の石（写真47）は、雨乞い（雨溜用か？）、航海安全の目的なのか、よく解らない。

（3）戦後新しくできた拝所（写真51～61）

二つの祠があり、現在赤嶺門中の人々が利用している。

<参考文献>

- \* 首里古地図写真、沖縄県立図書館所蔵「首里古地図」デジタルアーカイブ
- \* 「女官双紙」『神道大系神社編 52 沖繩』神道大系編纂会、1982
- \* 野々村孝男編『写真集懐かしき沖繩—山崎正董らが歩いた昭和初期の原風景—』琉球新報社  
1932（昭和7）年～1933（昭和8）年に撮影された写真。
- \* 新崎盛珍『思出の沖繩』双葉会、1956
- \* 航空写真『沖繩県ビジュアル版 空から見た昔の沖繩 近代③』沖繩県教育委員会、2002
- \* 『鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第4巻』沖縄県立芸術大学附属研究所、2017

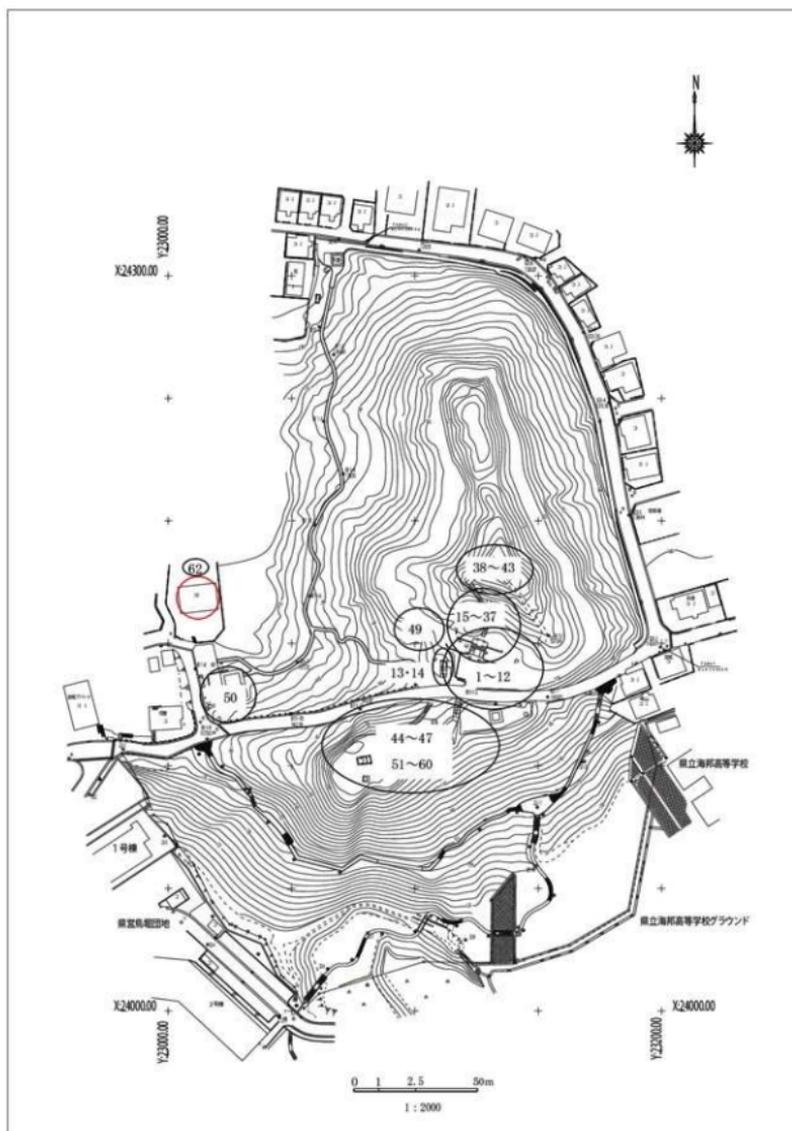


図1 写真撮影位置



1



2



3



4



5



6

1. 弁ヶ嶽史跡説明板
3. 大嶽入口 2
5. 大嶽石門裝飾双魚

2. 大嶽入口 1
4. 大嶽石門
6. 大嶽石門裝飾宝珠



7



8



9



10



11



12



13



14

7. 大嶽石門石灯籠向かって右  
 9. 大嶽石門前庭向かって右の3香炉  
 11. 大嶽石門前庭向かって右の3香炉の右  
 13. 大嶽井戸入口

8. 大嶽石門石灯籠向かって左  
 10. 大嶽石門前庭向かって右の3香炉の左  
 12. 大嶽石門前庭向かって右にある礎石？  
 14. 大嶽井戸正面



15. 大嶽井戸左側

17. 大嶽石門向かって左そばの香炉・不明

19. 大嶽石門内側祭壇下西側にある小井戸1

16. 大嶽井戸左側石碑香炉

18. 大嶽石門後の参道2

20. 大嶽石門内側祭壇下西側にある小井戸2



21



22



23



24



25



26

21. 大嶽石門内側祭壇全体

23. 大嶽石門内側祭壇中央玉川王子寄進香炉

25. 大嶽石門内側祭壇奥の中央祭壇から見た祭壇全体

22. 大嶽石門内側祭壇中央

24. 大嶽石門内側祭壇奥の中央祭壇

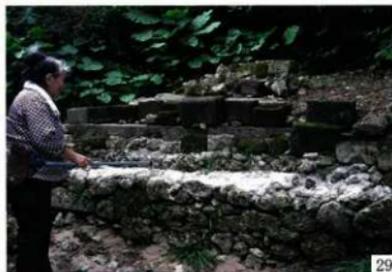
26. 大嶽石門内側祭壇向かって右



27



28



29



30



31



32



33

27. 大嶽石門内側祭壇向かって右寄進香炉  
 29. 大嶽石門内側祭壇と掃除ボランティアの喜屋武和子さん  
 31. 大嶽石門内側祭壇左手の新しい祭壇2  
 33. 大嶽石門後の参道

28. 大嶽石門内側祭壇向かって左  
 30. 大嶽石門内側祭壇左手の新しい祭壇1  
 32. 大嶽石門内側祭壇左手の新しい祭壇傍の石灯籠



34. 大嶽石門後の参道脇の古石灯籠部分 1

36. 大嶽石門後の参道脇の双鱼残骸

35. 大嶽石門後の参道脇の古石灯籠部分 2

37. 大嶽石門後の参道途中にある押所



38. 大嶽頂上の標所 1 北向き

40. 大嶽頂上の標高点

42. 大嶽頂上から望む首里城 2

39. 大嶽頂上の標所 2 北向き

41. 大嶽頂上から望む首里城 1

43. 大嶽頂上から望む北方向



44



45



46



47



49



50

44. 小嶽の東向き拝所  
 46. 小嶽の西向き拝所香炉部分  
 49. 弁ヶ嶽驛にあるトーチカ？

45. 小嶽の西向き拝所全体  
 47. 小嶽の西向き拝所奥神体？部分  
 50. 弁ヶ嶽公園入口看板



51



52



53



54



55



56

51. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた拝所(赤嶺門中)入口

53. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向かって右側

55. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向かって右側神体2

52. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所全体と庭と喜屋武和子さん

54. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向かって右側神体1

56. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向かって右側神体説明



57



58



59



60



61



62

57. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向  
 かって右側香炉赤嶽内中

59. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の内向  
 かって左側祠内神体

61. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた拝所入口参道の  
 入口鳥居跡

58. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた二つ拝所の  
 内向かって左側祠

60. 戦後弁ヶ嶽小嶽側にできた拝所入口参  
 道途中の石灯笼

62. 戦後弁ヶ嶽北西側麓「ボウズウカー」  
 と伝承のある井戸（個人宅）

### 論考3 弁ヶ嶽の建築的考察

公益社団法人 沖縄県建築士会

平良 啓

#### ■はじめに

県都那覇市の東に位置する首里は、市内で最も標高が高い弁ヶ岳（165.7m）を頂点に、西側に向かって傾斜した丘陵地となっている。そして、首里城を囲むようにして北側に真嘉比川、南側に金城川があり、首里の城下町を形成する骨格となっている。

弁ヶ嶽（ピンヌウタキ）は首里城から東方約1kmに位置し、1956年（昭和31）に沖縄県指定史跡となっている。現在、「弁ヶ岳公園」として整備されており、弁ヶ岳の頂上からは360度のパノラマが展開され、首里城や東シナ海、市街地などが一望できる。

首里城の東側上の毛（ウィーヌモー）東端に建立されている「国王頌徳碑」（1543年建立・別名「かたのはなの碑」と呼ばれる。平成18年3月に復元設置された）付近から弁ヶ嶽までの約1kmは石畳道として整備され、18世紀初頭に作成されたとされる「首里古地図」（絵図資料1～6参照）にも描かれている。弁ヶ嶽は国の安泰を祈る場所として重要な位置づけがなされた。

弁ヶ嶽には参詣道を挟んで東側の小高い所に弁之大嶽（ピンヌウフタキ）、南西側に弁之小嶽（ピンヌクタキ）がある。いずれも国王の祈願所で、大嶽は遠くに望む久高島への遥拝所であったとのことである。

『琉球国由来記 卷五 南風之平等』（1713年）には、大嶽の神名は「玉ノミウチスデルカワノ御イベツカサ」、小嶽は「天子」（テダコ）と記述されている。大嶽横の弁ヶ嶽ガエ（井戸）の水は「若水」とされ、国王に献上された。

琉球を訪れた冊封使の記録にも弁ヶ嶽の記述や表現が見られる。冊封副使の徐葆光著『中山伝信録』所収の「琉球地図」には〈辨嶽〉が描かれている。冊封副使の周煌著『琉球国志略』所収の「琉球国都図」には首里王城の左に〈辨嶽〉が描かれている。さらに、冊封副使の李鼎元著『使琉球記』には「王叔の尚周に迎えられて、弁ヶ岳を遊覧した。」とあり、この付近の状況や祭祀のことを述べている。

首里の美しい景観を褒め称えた「首里八景」には、〈巖嶽積翠（べんがくせきすい）〉も挙げられている。積翠とは「つみかさなつみどり」のことで、弁ヶ嶽一帯は琉球王朝時代から緑豊かで風光明媚な地としても知られていたのである。

#### ■弁ヶ嶽石門の特徴

弁之大嶽前の石門は、首里城の北側にある圓比屋武御嶽石門と同時期の1519年に竹富島出身の西塘によって建立されたとの記録がある。1938年（昭和13）に旧国宝に指定されていたが去る沖縄戦で破壊され、現在はコンクリート造で再建されている。それは、1954年にハワイの「うるま一心会」からの寄付金と首里島堀町民の協力で再建されたものである。

戦前に撮影された写真や当時調査した記録などを基に弁ヶ嶽石門の建築的特徴について紹介する。

大正13年に20日間にわたって沖縄各地の建造物などを調査した伊東忠太は、鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』の中で弁ヶ嶽について次のように述べている。「(前略) 門の様式手法は圓比屋武御嶽の門と全然同型であるが規模はやや小さく、広さ6尺8寸、高さ6尺、高さ7尺4寸、軒の高さ9尺4寸で、屋根は唐破風造であり、棟の両端の虫喰(しふん)、中央の宝珠、すべて圓比屋武のものと同様であるが、彼に比すれば大体の釣合も、細部の手法も、共にやや劣るかの感がある。門前に一对の石灯笼がある。門内に何等か祠堂があったらしく、礎石かと思われる遺跡もあるが明瞭でない。(後略)」。伊東忠太は弁ヶ嶽石門の正面を描いたスケッチも残している。

昭和9年と10年に沖縄各地の建造物を詳細に調査した田辺泰は、自著『琉球建築』で弁ヶ嶽について次のように述べている。「(前略) 建築としてはほとんど圓比屋武御嶽と同様であるが、弁ヶ嶽の方が規模はやや小さい。すなわち門幅6.08メートル、石牆の厚さ1.82メートル、中央部門口の幅2.03メートル、軒高2.85メートルで、圓比屋武御嶽よりは建物の幅に比して軒高が少し高く、ために全体としての意匠上の釣合いがやや劣るように感じられる。しかしこの石門はその前面が広く、石燈籠4基・惜字炉1・五層石塔1基が設置されている。要するに弁ヶ嶽の石門は、圓比屋武御嶽と同様わが神籬式の礼拝所である。(後略)」。『琉球建築』には弁ヶ嶽の平面図も所収されており、石門と前面の階段などの状況が示されている。

なお、伊東・田辺は日本建築研究の泰斗であり、数多くの論文や建築作品を世に出している。いわゆる琉球建築の調査・研究で両氏が弁ヶ嶽石門にも注目したのは、学術的にも価値が高いという証左であろう。

古写真から読み取ると、弁ヶ嶽石門は圓比屋武御嶽石門と同様の平唐門(ひらからもん)形式で、中央には両開きの木製扉が付き、その上に楣石(まぐさいし)を渡して上部の荷重を支えている。屋根は平入りとなり、緩やかなカーブを描き、本体の左右には袖石垣が築かれている。本体と両袖石垣は琉球石灰岩製である。石門の妻側には破風板の表現がなされている。屋根の細部意匠には繊細な表現が見られる。大棟には牡丹唐草の浮彫(レリーフ)が施され、中央に火焔宝珠、左右に正吻(鯨)の彫刻が配置されており、これらの彫刻類は細粒砂岩(ニービヌフニ)製と想定される。

このように、石材で木造建築物を表現している事例には玉陵、圓比屋武御嶽石門、首里城内の首里森御嶽、白銀門などが挙げられる。なお、石彫刻に使用されている細粒砂岩は沖縄本島中南部にしか賦存しておらず、しかも砂岩層に卵状で点在していることから、当時から貴重な石材であった。主に獅子などの彫刻物や石造橋の高欄、石碑などに使用されていた。

王府時代作成の文書や冊封使の記録、御嶽の構成と繊細な意匠からも、弁ヶ嶽石門は圓比屋武御嶽石門と同様、琉球王府にとって重要な位置づけがなされていたことが伺える。

## ■拝殿

大嶽の石門前に建てられていたとされる拝殿については、老朽化が進んで、大正初期(あ

るいは明治末期)に撤去されたとのことである。なお、いくつかの絵図や古文書等には拝殿らしき建物が記録されている。

まず、首里城を中心に道路や屋敷、各施設などを詳細に描いている「首里古地図」にも弁ヶ嶽が描かれている。松林らしき鬱蒼とした森に「辨ノ大嶽」という文字が見られ、石門とその前面に建物の表現がある。桁行3間、梁間2間で切妻造となっており、これが拝殿と想定される(絵図資料3参照)。

1839年に写し直したとされる『図帳』〔勢頭方〕には首里城はじめその周辺の建物での儀式の様子などが描かれている。弁ヶ嶽で琉球国王が祈願する儀式を表現している(絵図資料9・10参照)。南側に石畳道があり、中央の階段と石積、その奥に建物の表現がある。ちなみに勢頭方(シドゥホウ)は一般に警備を担当するセクションのことである。なお、末尾に署名している「御双紙庫」は首里城内の諸儀式を司る典礼部に似た性格の機関である。そして、その『図帳』には桁行5間に梁間2間+半間(約9m×約4.5m)の建物が表現されている。前面の半間は廊下らしい表現がなされている。中央部には2段の階段があり、そこから建物に入りしと考えられる。廊下以外には仕切壁(敷居か)はなく、一つの広間となっている。建物の正面と左右の一部には幕(「志ふり幕」)が張られ、室内には「ふくみ葎」(厚みのある葎)が8枚敷かれ、北東側には国王が着座する「上御畳」が設置されている。外部では、「御轎居」(国王が使用する駕籠・椅子)の到着場所から建物入口まで「ふくみ葎」が敷かれている。他にも、儀式に関わる人たちの待機場所の表現がある。

さらに、『図帳』〔当方〕(絵図資料11・12参照)にも同様の表現がある。当方(アタイホウ)は儀式の舞台進行係の性格を持っている。「弁之御嶽之図」には〔勢頭方〕と同様、5間に2間+半間の建物の間取りの表現があり、室内の北東側に「上御畳」が置かれ、西側に申口、親方(2人)が着座している。興味深いのは、室内中央に「御拝御座」の畳が敷かれ、「雨天之時拝殿内に此通」と書かれ、それぞれ「小嶽江」と「さいは江」(斎場御嶽)とあり、その方向に向かって拝む際に畳の向きを変えていたと想定されていることである。このような表現はこの拝殿のみである。「雨天之時拝殿内に此通」とあることから、『図帳』〔勢頭方〕と〔当方〕に表現された建物は、明治末期から大正期にかけて撤去されたとされる拝殿の平面を示している可能性が高い。

『図帳』〔勢頭方〕と〔当方〕には、大御嶽と小嶽の表現もあり、儀式の際の畳や葎の設置や人員の配置などが示されている。

平成25年度に那覇市が行った発掘調査によって、拝殿前に敷き詰められていたと考えられる琉球石灰岩製の敷石遺構や様々な遺物が確認されている。そして、琉球石灰岩製の礎石らしき遺物も出土している。残念ながら建物の柱の位置や間隔を示す礎石列は確認されていない。しかし、前面敷石の東西の範囲が約11.5mあり、『図帳』で想定される拝殿の桁行約9mに1m余りの範囲で敷石が施されていたと考えれば、整合がとれるのではないかと考えられる。なお、発掘調査では、この敷石と拝殿の関係は判然としないという考察がなされている。しかし、明朝系の瓦(明式瓦)が出土していることは重要で、かつてこの場所に建物が建っていたことを裏付けている可能性がある。加えて、軒丸瓦が出土したことは、拝殿の格式が一般の建物に比べて高かったことが示唆される。

以上のように拝殿について考察した。拝殿を捉えた写真は現時点で確認されていないが、古文書や絵図、発掘調査の成果などから、拝殿は桁行5間に梁間2間半(約9m×約4.5m)の規模で、柱は角柱、屋根は切妻あるいは寄棟、本瓦葺の建物であったと想定される。

弁ヶ嶽一帯は自然が残って都会の喧騒を忘れさせ、人々の憩いや散策の場として利用されている。そして、現在でも拝所や井戸(カー)などで祈りを行う人々がおり、沖縄の人々に根付いている慣習を垣間見る思いである。

#### (参考文献)

- ・沖縄県立図書館所蔵「首里古地図」
- ・沖縄県教育委員会文化課編集『沖縄県歴史の道調査報告書一國頭・中頭方西海道(1)弁ヶ嶽参詣道一』  
沖縄県教育委員会 昭和60年3月
- ・外間守善・波照間永吉編著『定本 琉球国由来記』株式会社 角川書店 平成9年4月1日
- ・沖縄大百科事典刊行事務局編集『沖縄大百科事典 中巻 [中山八景・島尻勝太郎]』  
沖縄タイムス社 1983年4月30日
- ・徐葆光著・原田禹雄訳注『中山伝信録』言叢社 昭和57年6月20日
- ・平田嗣全訳『周煌 琉球国志略』株式会社 三一書房 1977年10月31日
- ・李鼎元著・原田禹雄訳注『使琉球記』言叢社 昭和60年3月18日
- ・久手堅憲夫著『首里の地名—その由来と縁起—』第一書房 2000年10月12日
- ・鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』株式会社 岩波書店 1982年10月12日
- ・田辺泰著『琉球建築』株式会社 座右宝刊行会 昭和47年10月25日
- ・沖縄県立芸術大学付属図書館・芸術資料館所蔵『図帳』〔勢頭方〕
- ・沖縄県立芸術大学付属図書館・芸術資料館所蔵『図帳』〔当方〕  
『図帳』を考察するにあたっては、新垣裕之氏の協力を得た。
- ・首里城研究会編集『首里城研究 No.7』首里城公園友の会 平成15年3月31日

## 参考資料

### 【文献資料】

1. P125 「弁ヶ嶽」『那覇市の文化財 平成18年度』 那覇市教育委員会文化財課 編  
平成19年3月
2. P49 「40 弁ヶ嶽」『那覇市の史跡・旧跡ガイドブック』那覇市歴史博物館 編  
2014（平成26）年3月15日
3. P432 「弁ヶ岳（べんがだけ）」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄大百科事典刊行事務局 編  
1983（昭和58）年5月30日
4. P625・626 「弁ヶ嶽」 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』  
株式会社 角川書店 昭和61年7月8日
5. P128・129 「弁ヶ岳」  
有限会社 平凡社地方資料センター編集 『日本歴史地名大系 第48巻』  
株式会社平凡社 2002（平成14）年12月10日
6. P85～87 「一 弁の御嶽」 鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 株式会社 岩波書店  
一九八二年十月十二日
7. P22・23 「弁ヶ嶽」 多和田真重 『写真集沖縄 失なわれた文化財と風俗』 那覇出版社  
昭和五九年九月七日
8. P99 「(ア) 弁ヶ嶽」 沖縄県教育委員会文化課『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・  
中頭方西街道（I）弁ヶ嶽参詣道—』 沖縄県教育委員会 昭和六十年三月
9. P66 「56 国王頌徳碑（かたのはな碑）」『那覇市の史跡・旧跡ガイドブック』  
那覇市歴史博物館 編 2014（平成26）年3月15日
10. P98 「国王頌徳碑（こくおうしょうとくひ）」『沖縄大百科事典』中巻  
沖縄大百科事典刊行事務局 編 1983（昭和58）年5月30日

11. P128 「カタヌハナ」  
 有限会社 平凡社地方資料センター編集 『日本歴史地名大系 第48巻』  
 株式会社平凡社 2002（平成14）年12月10日
12. P236・237 「262（8）国王頌徳碑」『金石文－歴史資料調査報告書V－』  
 沖縄県教育委員会 昭和六〇年三月三十一日
13. P96・97 「（3）かたのはなの碑文に見る改修工事と首里古地図の参詣道」  
 『沖縄県歴史の道調査報告書－国頭・中頭方西街道（1）弁ヶ嶽参詣道－』  
 沖縄県教育委員会文化課 編 昭和六十年三月
14. P40～42 「首里口説」『那覇市制75周年 詩歌集 那覇を詠う』  
 那覇市文化局歴史資料室 編 1997年3月28日

## その他

- ・P139 「辨の岳」『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典－』東恩納寛惇 編  
 昭和二十五年三月四日
- ・P158 「菟大嶽：琉球國由来記 卷五 35」『琉球史料叢書』第一巻 横山重 編 昭和47年3月
- ・P158・159 「同小嶽ノ御いべ：琉球國由来記 卷五 36」『琉球史料叢書』第一巻 横山重 編  
 昭和47年3月
- ・P14 「菟嶽二嶽：琉球國俗記 卷之一」『琉球史料叢書』第三巻 横山重 編  
 昭和四十七年四月十二日
- ・P154 「球陽 卷三 177（尚真王）」『球陽 読み下し編』球陽研究会 編  
 昭和四十九年三月三十一日
- ・P250～252 「球陽 卷十 688（尚敬王）」『球陽 読み下し編』球陽研究会 編  
 昭和四十九年三月三十一日
- ・P718 「球陽 附卷三 136（尚穆王）」『球陽 読み下し編』球陽研究会 編  
 昭和四十九年三月三十一日
- ・P56 「弁ヶ嶽」田辺泰 『琉球建築』株式会社 座右宝刊行会 昭和四七年一〇月二五日
- ・P139 「かたのはな」『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典－』東恩納寛惇 編  
 昭和二十五年三月四日
- ・P251・252 「下り口節 くだりくどき」『琉球史辞典』中山森繁 編 昭和四十四年十一月三十日

## 文献資料 1

べん だけ  
弁ヶ嶽

所在地：首里島堀町4丁目121，同5丁目62 指定年月日：昭和31年12月16日

首里城の東方約1キロの所にあつて、俗に「ビンヌウタキ」と呼ばれています。峰全体が御神体になっており、海拔165.7mで、本島中南部では与座岳（168.4m）に次ぐ高さの峰です。そのため、かつては航海の目標ともなり、1945（昭和20）年の沖縄戦の前まで松などの大木が茂っていました。

弁ヶ嶽は大嶽と小嶽の2つに分かれ、神名は大嶽が「玉ノミウヂスデルカワノ御イベツカサ」、小嶽は「天子」です（『琉球国由来記』）。

昔は1・5・9月に国王の親祭がありました。沖縄戦で破壊消失した大嶽前の石門は、1519（正徳14）年に圓比屋武御嶽の石門とともに築かれたといわれ、構造も工法もよく似ていました。そして1938（昭和13）年、国宝に指定されました。現在のコンクリートづくりの仮門は、1954（昭和29）年ハワイの「うるま一心会」からの寄付金と首里島堀町民の奉仕で建てられたものです。

かつて石門前には拝殿と呼ぶ建物がありました。

### <出典資料>

『那覇市の文化財 平成18年度』 那覇市教育委員会 平成19年3月

## 文献資料 2

ベンガタケ  
弁ヶ嶽

□県指定 記念物 史跡

□1956年(昭和31)12月16日

□所在地：首里島堀町4-121、5-62

首里城の東方約1kmに位置し、海拔165.7mの高さにある御嶽。

沖縄島中南部では、与座岳(168.4m)に次ぐ高い峰の一つで、かつては航海の目標にもなった。一般に「ビンヌウタキ」と呼ばれ、峰全体がご神体とされた。

1945年(昭和20)の沖縄戦前まで、琉球松などの大木が茂っていた。

弁ヶ嶽は参詣道をはさんで、東側の小高い柱になっている方が大嶽で、西側の低い方が小嶽である。『琉球国由来記』(1713年)によれば、大嶽の神名は「玉ノミウヂスデルカワノ御イベツカサ」であるといい、小嶽の神名は「天子」と記されている。王国時代には、1・5・9月に国王が弁ヶ嶽を訪れ、祭祀が行われた。

大嶽前の石門は、1519年に首里城獄会門前の圓比屋武御嶽石門とともに築かれたといわ

れ、その構造や工法も類似していた。石門は1938(昭和13)に国宝に指定されたが、沖縄戦で破壊された。

現在のコンクリート造りの門は、1954年(昭和29)にハワイの「うるま一心会」からの寄付金と、首里鳥堀町民の奉仕で建てられた。また、かつては石門の前に、拝殿と呼ばれる建物があった。

#### <出典資料>

『那覇の史跡・旧跡ガイドブック』 那覇市(那覇市歴史博物館) 2014(平成26)年3月15日

### 文献資料3

#### 弁ヶ岳 べんがだけ

首里汀良町にある丘陵。方音(ビンヌタキ)。首里の東端にあたり西原町と接する。那覇市の最高所(165.7m)。御嶽でもあり、鬮比屋武御嶽と同年(1519)に同一人物(西塘)によって建てられたと思われる大嶽(戦前は国宝指定)と、小嶽の二嶽がある。いずれも国王の祈願所で、大嶽は久高島への、小嶽は斎場御嶽への遙拝所。大嶽の建築様式は鬮比屋武御嶽とほとんど同じで、それよりやや小さい。その石門は戦前国宝指定(1938.1)、参道は尚清王代(1527～55)の整備。かつては松などのうっそうと茂る森であったが沖縄戦ですべて焼失。大嶽などは戦後(1954)復元。(久高友章)

#### (出典文献)

『沖縄大百科事典 下巻』 沖縄タイムス社 1983年5月30日

### 文献資料4

#### べんがだけ 弁ヶ嶽(那覇市)

那覇市首里鳥堀町の東端にある泥灰岩の丘。冕嶽・弁之嶽とも書く。首里の東の押さえにあたり、古来尊崇された所。那覇市の最高地点(165.7m)。東に太平洋、西に東シナ海を望み、眼下に首里・那覇の町並みが広がる景勝地。首里城の東に位置し、冕嶽・虎瀬・崎山嶽は首里の都の風水にかかわるという(球陽尚敬王元年条)。県史跡に指定されている御嶽でもあり、丘上東部に大嶽、その南西に小嶽があつて、方言ではビンヌウタキという。大嶽の神名は玉ノミウヂスデルカワノ御イベツカサ、小嶽の神名は天子で、ともに首里大あむしられの崇べ所(由来記)。往古3人の姉妹神がおり、姉女神は弁ヶ嶽に降り、中の女神は久米島東嶽、のち石垣島於茂登岳に移り、末の女神は久米島西嶽に降った。後世にはこれに斎く神女職を君南風と唱えた(由来記・球陽尚真王24年条)。正徳14年(1519)に大嶽の前に石垣

と石造門を建立するなど、国家守護神として崇敬された(泉陽尚真王 43 年祭)。門は圓比屋武尊御嶽の石門と同型で、ともに正徳 14 年の建立である。嘉靖 22 年(1543)には弁ヶ嶽に松を植え、参道を石畳道に改修した(かたのはなの碑)。「由来記」によれば、この時拜殿も創建されたと考えられる。大正初期まで残っていた拜殿は広さ 5m×9m、寄棟平屋建で、柱・壁ともに朱塗であったが老朽して崩壊し、現在は礎石の一部のみが残っている。順治元年(1644)から正月・5月・9月に国王参詣が行われるようになったが(由来記)、その際には、大嶽の石門内で「三山の拜み」と称する祭祀をすませたのち、小嶽の東斜面の手前にある石敷の台座に登り、東に向かって久高<sup>58</sup>島(知念村)、西に向かって中国の北京を遥望した。この台座は 2 層敷ほどの広さで畳が敷けるようになっており、台座の東、久高島を遥望する所と、小嶽中腹に北京へ向けてそれぞれ石の香戸があった。早嶽にはたたび祈雨がなされた。乾隆 43 年(1788)には種子島(鹿児島県)の船頭伝平が島居を奉建している(泉陽尚真王 43 年祭)。嘉慶 5 年(1800)米流の冊封副使李鼎元は弁ヶ嶽を遊び、「龍木密に覆ひ、前に石柱二有り。中に柵を置く、柵外に板閣二楹あり。少しく左に小石塔有り。左右に石案五を列す。門を入れば、石磴折して東し、数十級あり。頂に至れば、石礎二有りて、西は山を祭り、東は海を祭る」と記している(使琉球記)。「ベリー一行も内陸探検の際ここを通っている。「ベリー訪問記」に見える首里から約 1 里の丘上にある祭壇も祭神もない寺院は弁ヶ嶽を指すと思われ、一帯はピン(Pino)と称すると記している。昭和 19 年石造門内側の石敷の石を日本軍が陣地に使うため破壊した。続く沖繩戦で弁ヶ嶽一帯は、首里攻防戦の激戦地となった。弁ヶ岳の形状が平地から急に盛り上がり頂上近くに茶色の山肌が見えていたため、米軍は底の浅い皿にのったチョコレートドロップにたとえて、弁ヶ嶽をチョコレート・ドロップ・ヒル(Chocolate Drop Hill)と称した(日米最後の戦闘)。昭和 20 年 5 月 11~20 日に行われた攻防戦で、国室に指定されていた石門は破壊され、深い樹林で覆われていた峰も弾痕だらけの秃山と化した。昭和 29 年ハワイのうるま一心会からの寄付金と首里島畑町民の奉仕で、かつての石門を模したコンクリート造りの門が建てられた。弁ヶ嶽はその特異な形状から古来航海上の目印となっていたが、北東約 100m に位置する火立毛と称される丘では、王府時代に狼煙をあげ、灯台の役割を果たした。弁ヶ嶽周辺は耕地が多かったが、現在宅地化が進んでいる。また火立毛は削られて低くなり、墓地が増加している。

<出典文献>

『角川日本地名大辞典』 47 沖繩県』 株式会社 角川書店 昭和 61 年 7 月 8 日

弁ヶ岳べんがけ

首里城跡の東約一キロに位置する標高一六五・六メートルの丘。方言ではピンヌダキ。首里台地の東端部にあり、地質的には新第三紀鮮新世の泥岩・砂岩からなり、頂上部には冠岩として琉球石灰岩がある。那覇市の最高所で航海の目印ともなった。嘉靖二年（一五四三）の国王頌徳碑（かたのはなの碑）には、頂に生茂る樹葉の枝葉が揺れ動く様は翠鳳が羽ばたくようだと記され、諸峰に冠たる山なので冕嶽（冕は冠のこと）というところ。首里城の北を流れる真嘉比川、南を流れる金城川の源流地にあり、中国で風水を学んで帰った蔡温らが首里城の風水を判定した際、冕嶽は「城基発祖の地」とされた（「球陽」尚敬王元年条）。風水では首里城の玄武にあたる。琉球王国時代、「冕嶽積翠」は首里八景の一つであった。楊文鳳に「弁峰朝暾」と題した「弁峰高聳對東瀛 万里扶桑一望明好是朝曦初出処 無辺光景繞山城（弁峰高聳え東瀛に對す／万里の扶桑一望明し／好きは是朝曦初めて出づる処／無辺の光景 山城を繞る）」という作品がある（四知堂詩稿）。嘉慶三年（一八〇八）尚灝王の冊封正使として渡米した斉鯤は九月三日、撰政尚大烈・三司官毛国棟とともに弁ヶ岳に遊山に出かけ、「留客竹深处 廬中小有天 壑池泉水活剪葉樹陰円 挿架排書画 飛牖逐管絃 清遊歡竟日 不覺醉醺然（留客 竹深き処／廬中 小さき天有り／池を鑿ちて泉水活き／葉を剪（き）りて 樹陰 円し／挿架 書画を排（なら）べ／飛牖 管絃を逐う／清遊して 歡ぶこと竟日／覺えず酔いて醺然たり）」という詩を残している（東瀛百詠）。琉歌では「弁の岳見れば御涼傘ともて やらち見せたこと櫃の紅葉（弁の岳を見ればあまりの美しさに御涼傘かと思つて、人を遣つて見せたら櫃の紅葉であった）」と謳われている。かつては松の茂る森であったが沖繩戦で焼失、近年周辺は住宅地となっている。

〔弁御嶽〕 弁ヶ岳は古來神聖な山として尊崇され、ピンヌウタキという御嶽でもあり、県の史跡に指定されている。大小二つ御嶽からなり、「琉球国由来記」には「冕大嶽」の神名は玉ノミウヂスドルカワノ御イベヅカサとされ、「琉球国の諸峰に冠す」と記されており、国王の祈願所であった。大嶽は久高島（現記念村）へ、もう一つの「小嶽ノ御イベ」は斎場御嶽（現同上）への遙拝所といわれ、両嶽とも首里大あむしらの崇所であった。昔三人の姉妹神があり、長女神は弁嶽、次女神は石垣島於茂登嶽、三女神は久米島西嶽に降臨したという伝承がある（琉球国由来記・君南風由来并位階且公事）。尚真王四三年（一五一九）圓比屋武御嶽石門と同時に弁御嶽の大嶽の前にも石門が建立された（球陽）。沖繩戦で破壊される前は国宝に指定され、圓比屋武御嶽石門よりやや小さかったが建築様式はほとんど同じで、竹富島出身の西塘の作と伝えている。嘉靖二年国王尚清の命により、首里城の東のカタヌハナから弁御嶽への参詣道が石畳道に改修され、治道には松が植えられた（国王頌徳碑）。なお近代まで残っていた木造拝殿もこの時に造営されたという（琉球国由来記）。尚穆王二十七年（二七七八）には種子島の船頭伝平が鳥居を奉建している（「球陽」附巻）。

一月・五月・九月の国王参詣は順治元年（一六四四）尚賢王が始めたもので、小嶽の前で

東方の斎場御嶽を拝した(琉球国由来記)。このとき三平等の大あむしられによって唱えられたオタカベは「冤の御嶽大嶽小嶽いべ司がなしけふのよかる日より まさる日よりに 首里天嘉那志美御前の うちよわいめしよわちへ 御手づから 御拜めしよわるけに 斎場嶽(さやは森のいべづかさかなしとあいちへなりめしやうちへ)弁の御嶽の大嶽小嶽のいべ司加那志は 今日の良い日和 勝る日和に 国王様が いらつしやいまして 御手ずから御拜なさる故に 斎御嶽の斎場森のいべ司加那志と相手におなりになつて」というもので、弁御嶽の大嶽・小嶽のいべ司加那志と斎場森のいべ司加那志とが相手になつて国王の健康祈願、五穀の豊穰祈願、国内外の航海の安全祈願をした。雨乞の際にも雨乞御嶽とともに国王の行幸があつた(同書)。嘉慶五年来琉した冊封副使李鼎元は御嶽の様子を「藻木密に覆ひ、前に石柱二有り。中に櫓を置く。櫓外に板閣二楹あり。少しく左に小石塔有り。左右に石案五を列す。門を入れば、石磴折して東し、数十級あり。頂に至れば、石礎二有りて、西は山を祭り、東は海を祭る」と記す(使琉球記)。

〈参考文獻〉

『日本歴史地名大系 第四八巻 沖縄県の地名』株式会社 平凡社 二〇〇二年二月一日

文獻資料 6

第二章 聖地の神事

一 弁の御嶽

伊東博士いう。

この嶽は、弁ヶ嶽、また弁の嶽、また冤ヶ嶽とも書かれている。首里市の東北境に聳ゆる山で、この近傍では最高峰であるが海拔約四百尺位と観測されているから、山という資格はない。頂には珍しく老松や雑木が生い茂つて単調なる風景に趣を添えている。西は遙かに東シナ海の激浪を望むべく、東は脚下に太平洋の怒濤を瞰取すべく、飄風常に涼を送つて爽快いふべからざるものがある。創立は『球陽』に「尚真王即位四十三年、創めて冤嶽石垣を造る」とあれば、圓比屋武御嶽の石門と同時である。その後尚清王の時嘉靖二十二年(一五四三)「かたのはなの碑」に祠堂を重修し道路を修築し松を植えたので、今の石門もこの時の重修のままであると思われる。門の様式手法は圓比屋武の門と全然同型であるが規模はやや小さく、広さ六尺八寸、深さ六尺、高さ七尺四寸、軒の高さ九尺四寸で、屋根は唐破風造であり、棟の両端の蚺吻、中央の宝珠、すべて圓比屋武のものと同様であるが、彼に比すれば大体の釣合も、細部の手法も、共にやや劣るかの感がある。門前に一对の石灯籠がある。門内に何等か祠堂があつたらしく、礎石かと思われる遺跡もあるが明瞭ではない。

『琉球国旧記』(巻之一)には「冤嶽二嶽」と記してあり、『琉球国由来記』(年中祭祀)

「南風之平等」鳥小堀村の条には、左の如く記されている。

冕大嶽神名玉ノミウチスデルカワノ御イベツカサ

同小嶽ノ御イベ神名天子

右二ヶ所首里大阿武志良礼祭所

現地を見ると、大嶽はこの霊域最高の山で、その前に尚真王の時初めて造られた石門があり、前には石を積んだ階段があり、尚清王の建てたという拝殿は今はないが、小嶽との間には当時石を斲んで造られたという道路が通じている。向かって山嶽から左下の谷に降る所、石門の左横下に「井川」があつて此所を水源地として祀つてある。すなわちそのため大嶽の神名を「玉ノミウチスデルカワノ御イベツカサ」という。首里台地の北方儀保川及び末吉から安謝に続く低地帯の水源地として、この「井川」と共にこの弁の大嶽が信仰されているように見られる。大正末年、私は屢々この御嶽に来て、尚真王が中央集権制の祭祀を行うために、何故に此所に石門を造つたか、それが西平等汀志良次村に遷された開得大君御殿における開得大君の神事と如何なる関連をもっているか、色々調査したが、当時大嶽石門内は樹木鬱蒼として神霊の気満ち、信仰上倒底嶽内に入ることは不可能であつた。

かくして半世紀に近い年月を経て昭和四十六年三月、戦後初めて沖繩に赴き早速同御嶽に行つて見たところ、米軍の砲撃によつて、大嶽は丸坊主になつて其所には測量標識が見えていた。しかし驚いたことには、この大嶽石門の「御向う」としてその山頂の前方正面に見えてるのは浦添城ではないか。この弁の御嶽の大嶽こそは、尚巴志以前、王権が浦添城にあつた時代には、中山王の取り行う重要な神事の祭壇の地ではなかつたか、尚真王はその故事に従つて王権を守るため、この大嶽を王国最高の聖地として石門を造りこれを壮麗にしたのではなからうか。然らばその神事は如何なるものであつたか。尚清王の時に建てられたその拝殿は、古代には当然「あしあげ」であろうと考えた場合、此所で行われる神事に対比されるのは、すでに述べた宮古島狩俣の神事で仲嶺本に奉祀する男性神職が、清泉「ずう井」の水を祀ると共に、「ビュストリヤ」(日を取る人)として、太陽を拝んで「時取り」の神事を行い、大城本の祭祀の際には「あしあげ」において神歌を謡つていふことである。しかしこれは考え方によつては、この男性神職に相当するのは、多分尚真王以後の時代においては、大嶽の「井川」をお祀りし、また開得大君御殿に奉仕する役で、毎年十二月辺戸に行つて御水取りをしている「時の大屋子」のように推察される。「混効験集」「人倫」の条に、「きやのちぬきまる」「もくだよのかね」の名を挙げ共に「時取りの名人也」と記し、伊波普猷著「古琉球の政治」にこの人のことを考証してあるが、「きやのちぬきまる」(その墓は浦添村にある)について『おもろさうし』(第八)に「おもろねやがりぎや、時とたるまさしや」とあることから見ると、「時の大屋子」はまた「神歌の主取」でもあつたように考えられる。このことから見ると宮古狩俣の神事と共通するところがあると思われ。

戦後、丸坊主になつた大嶽の山頂に立つて周囲の景観を眺めると時、この山がこの一帯の丘状台地上に聳える最高峰であるために、此処は恰も浦添城の前祭壇の感じがあり、古代においては、宮古狩俣大城御嶽の後方「せらてやま」の神事に見られるような、すなわち此処に聖なる母なる祖神が降臨し、それが中山の根所となる浦添城の王権支配の下に、開得大君司祭の神事が行われたと推察される。恐らくはこの山全体が御神体で、王権との下根の象徴としての男性神が祀られ、それが父系父権の「ももらおそい」の按司の王権となり、それに伴う神事として男性神職による農耕のための「日知り」「時取り」と共に水源地としての「井川」「玉ノミウチスデルカワノ御イベツカサ」の信仰を生じたように思われる。水は稲作農耕の基本であるからである。

弁の御嶽は、この大嶽に対してその前方に小嶽があり、神名「天子」という。此所に久高

島を遙拝する石造方形の祭壇があり、それが太陽神の冬至における日出点を「御的」として造られていることは、その方形祭壇の方向と、冬至の日出点はその方向にある久高島の中央部であること、実際これを見た私の目によつて証明することが出来る。思うに古代において冬至前日から山籠りしていた開得大君は、この朝昇り行く久高島の太陽神に向つて「御日拝み」をなし、種々の神事を行った筈である。伊平屋、阿嘉良御嶽における夏至の「御日拝み」の際、神は「降り神」（島）に降り、それから伊是名城に一七日間閉じ籠つたという神話は、弁の御嶽に対応する久高島の場合は、知念の斎場御嶽の位置が正にその伊是名城に当る。私は伊平屋調査を終えて首里に帰着後、この問題の解答を得るために尚家本『開得大君御殿并御城御規式之御次第』を閲覧筆写した。この書は、琉球王朝最後の尚泰王二十八年（一八七五）、七月日本政府より琉球藩王の清国に対する朝貢受冊等の停止を命ぜられるという政局混乱の時代の筆録であるが、書中「開得大君御殿御規式次第」に記されている「御新下り」（御初地入り）の記録は、時代の降るに従つて近代次第に簡略化されているとは思われるが、しかし古来開得大君がその御役就任後間もなく行われた知念斎場御嶽参詣の「御新下り」の行事として、その信仰の中軸となる式典は昔のまま古い形式で伝えられ記載されていることを知った。

〈山奥資料〉

『沖縄文化の遺宝』 株式会社 岩波書店 一九八二年十月十二日

文献資料7

べんがだけ  
弁ヶ嶽

首里鳥堀町にあつて、ピンヌウタキともいう。那覇市で一番高い丘（標高一六五・七メートル）を中心に、大嶽（戦前国宝）と小嶽の二つの御嶽からなっている。いずれも琉球国王の祈願所だった所で、大嶽は神名「玉ノミウチ、ステカワノ御イベツカサ」といい、久高島への遙拝所、小嶽は神名「テダコ」といい、斎場御嶽への遙拝所であった。

御嶽の石門は、園比屋武御嶽の石門と同じ形で、それよりやや小さかったが、沖縄戦で破壊されてしまった。

〈山奥資料〉

多和田真重 『写真集 沖縄 失なわれた文化財と風俗』 那覇出版社 昭和五九年九月七日発行

(ア) 弁ヶ嶽

俗に弁ヶ嶽ヒシノツタケとよぶ。標高一六五・七米。南風原町と境し、東西の海を望み、四囲を見下ろす景勝の地である。東側の大嶽と西側の小嶽に分かれ、両嶽の間を参詣道が通っている。琉球国由来記に大嶽の神名は「玉ノミウチ、スデルカワノ御イベツカサ、小嶽は「天子」と記るされている。一五一九年(尚真四三)大嶽の前に唐破風切妻の石造門(園比屋武嶽石門と同型)が建てられた。

嶽の手前に石門を設けた形式は琉球固有信仰の嶽(社の意)の形式を代表するもので嶽全体が御神体で、本殿はなく、本殿、拝殿を備えた現代の神社形式になるまでの途中の姿をとどめている。

尚清王代(二五二七〜五五)石造門の手前に拝殿と称する木造寄棟平屋建が創建された『琉球』。

小嶽の前には一坪ほどの四角の石敷台座(戦災消失)があり、畳が敷かれるようになっていた。

王府時代、一、五、九月に国王の親祭が行われ、大嶽の石門の内で「三山の拝み」とよぶ国の安泰祈願のあと、王は小嶽前の台座につかれ、東に向かって、久高島、斎場御嶽を遙拝し、五穀の豊穰と感謝を祈り、西に向かって北京を遙拝した。

一九三八年(昭和十三)石造門は国宝指定。一九四五年の大戦で破壊。一九五四年ハワイうるま一心会からの寄付金と鳥堀町民の奉仕により往昔の石門に模してコンクリート造りの門を建て現在に至っている。

(山奥資料)

沖縄県教育委員会文化課『沖縄県歴史の道調査報告書―国頭(中頭方西海漠)―弁ヶ嶽参詣道―』

沖縄県教育委員会 昭和六十年三月

## 文献資料 9

コクオウシヨウトクヒ  
国王頌徳碑 (かたのはな碑)

「国王頌徳碑」は、琉球王国時代の1543年に建立された石碑。

碑文は、首里城から、古来より崇拜された弁ヶ嶽（後に久高島・斎場御嶽の遙拝所として整備され、那覇市内最高の標高165m）への道を石畳道にして、周辺に松樹を植えるなどとして、参道を整備した国王尚清の徳を讃えた内容となっている。表は平仮名文であり、裏は漢文で刻まれている。また、首里城から東に延びる丘陵「上の毛」の東端部を「かたのはな」といい、この付近に建立されたことから、別名「かたのはなの碑」ともいう。

石碑が建立された一帯は「碑文の毛」（後に「碑文の前」と呼ばれ、広場になっていたが、1935年（昭和10）に首里と那覇を結ぶ首里市営バスの発着場となった。

1945年（昭和20）の沖縄戦で石碑は破壊されたが、碑の一部が沖縄県立博物館・美術館に残されている。

本碑は、碑の一部や建立年の近い石碑を参考にして、石碑建立地に近接する現在地に新たに復元したものである。

### <出典資料>

那覇市歴史博物館 編集 『那覇の史跡・旧跡ガイドブック』 那覇市 2014(平成26)年3月15日

## 文献資料 10

国王頌徳碑 こくおうしょうとくひ 弁の嶽（\*弁ヶ岳）の参道入口付近、那覇市首里当蔵町内、\*かたのはなの地に建てられていた碑で、（かたのはなの碑）ともいう。嘉靖22年（1543、尚清17）の建立。現存しないが、『琉球国碑文記』によると、表の文はひらがなの琉文で刻し、裏にその漢訳文が添えてある。碑は首里城の東方にある国王親祭の霊場たる弁ヶ岳の参道を石畳道に改修し、松樹を植えて諸人の往還に便ならしめた尚清王の徳政をたたえたもので、中国の聖王堯・舜の治世にも比すべしとしている。（王がなし（尚清）は、うまれながら、むかしいまの事を、さとりめしよわちへ、天下をおさめめしよわる事、むかし、もろこしのていおう、ぎょう・しゅんの御代に、にたり（下略）とあ

る。

漢文は\*円覚寺住僧で日本五山の檀溪全叢和尚の撰文で、琉文にくらべてやや詳しい。  
〈ここに峨々たる高峰あり。諸峰に冠たり。羸の嶽と号す。…これ乃ち神仙來賁降遊  
の靈地なり。…その嶽の麓に高低屈曲せる長路あり。早には則ち路背圯折し、前に跋  
き、後に羸れ、衆人の往還輕利ならず。馬牛も驅らすに蹄を挙げ難し。雨ふれば則ち泥濘  
深厚、天(地か)に踏し、地(天か)に躡まる。老幼來復自由ならず。燕雀の語人を笑うが  
ごとし。これによりて国王勅して、公卿・大夫・大臣・百官・庶人等をして、小石を甃き  
て道を修り、稚松を植えて涼に蔭わしむ(下略)〉。

〔糸数兼治〕

<出典資料>

沖縄大百科事典刊行事務局 編 『沖縄大百科事典』 中巻 沖縄タイムス社 1983年5月30日

## 文献資料 11

カタヌハナ ㊦那覇市首里鳥堀町一丁目・首里赤田町一丁目・首里当蔵町一丁目

首里城の東に延びる上ぬ毛の東端部、近世の当蔵村・赤田村・鳥小堀村の境界付近の古地名、弁御嶽への参詣道の入口にあたり、ここに国王頌徳碑が建っていたため碑文ぬ前ともよばれた。国王頌徳碑は円覚寺や守礼門東にもあり、当所の碑は「かたのはなの碑」とよばれた。碑は現存しないが、表がひらがな文で、裏はその漢訳文であった。嘉靖三二年（一五四三）八月銘記の碑の表面の冒頭に「首里天の御事をかみ申みちつくりまつうへ申候ひのもの」とあり、弁ヶ岳へ通じる道は雨が降るとひどくぬかるむため、国王尚清の命によって「あんしへ・あすたへ・大やくもいた・里主へ・けらへあくかへ」らの家臣団が石畳道に改修し、沿道に松を植えたことが記され、尚清の徳政がたたえられている。工事は同年六月二四日に竣工したようである。末尾には世あすたへ（三司官）三人（大さとの大やくもいまふとかね、きすしの大やくもいぬたるかね、ミヤ平の大やくもいまいくさかね）と奉行一人（花くすくの大やくもいま五ら）の名がみえる。裏面は円覚寺住持檀溪全叢の撰文。碑文ぬ前付近は首里古地図では天王寺と蓮小堀の間を通り東方の弁ヶ岳へ通じる道と、真嘉比川に架かる新橋から首里殿内へ南下する道の交差点となっており、交差点の北側、新橋の西に山田子・金城筑登之親雲上・伊地筑登之・石川筑登之親雲上らの屋敷、南側、首里殿内へ南下する道の西には城田親雲上・前嵩原親雲上真牛・宮城筑登之親雲上の屋敷、その西側の首里城継世門への道沿いには臥雲軒・慈雲庵や屋宜筑登之の屋敷などがみえる。

### 〈出典文献〉

有限公司 平凡社地方資料センター 編 『日本歴史地名大系第四八巻 沖縄県の地名』 株式会社 平凡社

二〇二二年二月一〇日

國王頌德碑（かたのはなの碑）（一五四三年＝尚清十七）

（前）首里天の御ミ事をかミ申みちつくりまつうへ申候ひのもの

大りうきう国中山王尚清ハそんとんよりこのかた二十一代の王の御くらひをつきめしよわちへ天より王の御なをは天つき王にせとさつけめしよわちへ御いわひ事かきりなし王かなしへむまれなからむかしいまの事をさとりめしよわちへ天下をおさめめしよわる事むかしもろこしいわうきようしゅんの御代ににたりしかれば御たかへめしよわるもありたりよりひかしにあたりてへんのたけといふこれハ

きこゑ大ききみきくかミほとけの御あそひめしよわるところあめふる時ハとろつちふかさあるけに國王の御ミ事につくりまつうへれとの御ミ事をかミくにくのあんしへあすたへ大やくもいた里主へけらへあくかへころ一つにあわせちからをそろへいしをはめまつうへれはミちハきよらくまつハすし一すちのミちに千りやうの金を人々ミおほけにあひ申候されは

嘉清二十二年ミつとのう六月二十四日ひのとのりに

きこゑ大ききみきくのをれめしよわちへ

天つき王にせのあんしをそひかなし御ミつかひめしよわちへあまこあわしめしよわちへ御ほこりめしよわちや事おもいくわへくにくのあんしへあすたへ大やくもいた里主へけらへあくかへそてミはいをかミ申候おひ人わか人もわらへにいたるまでよるもひるも御たかへし申候ねかひ事かなひよろこひたのしむ事かきりなし

大明嘉靖二拾二年ミつとのう八月大吉日

大さとの大やくもいまふとかね

世あすたへ三人

きすしの大やくもいぬたるかね

ミヤ平の大やくもいまいくさかね

奉行一人花くすくの大やくもいま五ら

（前）大琉球国中山王尚清自従

舜天降来二十一代之王孫天賜聖号為天下王自然神聖通達古今睿智敬敏視

德惟明生知法或一似華助風雨晦明無不順従并包畜養無異細粗億載万年

有富無貧太平之期適当今辰天長地久呼万歳三矣爰有岷々高峰冠于諸峰

号冕嶽其巔茂樹叢生其枝葉婆娑然口頰翠鳳張猷是乃神仙來賁降遊之靈

地也然則上自

國王大臣公卿大夫下至道俗尊卑男女貴賤如泰山北斗瞻之仰之晨夕肅詣

丹精致敬信或獻花或燒香曰福曰寿曰官曰禄願靡而成莫感而不彰矣其

嶽麓有高低屈曲長路卑則路背圯圻而跋前疐後衆人往還不輕利馬牛驅離

王

頌

挙踏雨則泥濘深厚而踏天踰地老幼來復不自由燕雀語如笑人也由是

德

國王勅教公卿大夫大臣百官庶人等覽小石修路植稚松蔭涼各々欽奉勅宜勤

力同心穿鑿地破裂石分得林栽培松無朝無暮忙經始之豁開一路墾下千金

路無凹凸無狹小坦平也松鳴涼風鳴玉琴貞秀也人々住還嬉戲遊樂無極也

碑

其文曰 邦畿千里 聖躬萬歲 覽石修路 記太平世 植松蔭涼 仰漢

武帝 遠天大願 比海弘誓 琢詞斯石 繼慶未裔

檀溪老衲全叢謹撰

大明嘉靖二十二年竜集癸卯八月仲浣大吉日建立日本南權琉球円覚精舎釈

#### 〔出典資料〕

沖縄県教育庁文化課 編集 『沖縄県文化財調査報告書六十九集 金石文―歴史資料調査報告書Ⅰ―』

沖縄県教育委員会 昭和六〇年三月三十一日

#### 文献資料 13

(3) かたのはなの碑文に見る改修工事と首里古地図の参詣道

弁ヶ嶽参詣道の起点である「碑文の前」広場に建立された「かたのはなの碑」は文頭に「首里天の御ミ事をかミ申、みちつくり、まつうへ申候ひのもの」と記し、首里にいます国王の詔を奉じて道をつくり、並松を植えたことを一言規定し、次に碑文は尚清王をたたえたあと「しかれば、御たかべ、めしよわるもりあり、だいらより、ひがしに、あたりて、べんのたけといふ、これハ、きこゑ大きみ、きミく、カミほとけの、御あそび、めしよわるどころ」と記し、内裏の東にある森は国王の祈るところで弁ヶ嶽といい、聞得大君、君々、神仏の託遊する神聖な霊場であることをのべてあと、「あめふる時ハ、どろつち、ふかさあるげに、国王の御ミ事に、ミちをつくり、まつをうへれとの、御ミ事をがみ…」とのべ、御嶽に至る道は雨ふりには深いぬかるみと化す悪路であるので石を敷き、松を植えよとの詔命が出たことを記している。

参詣道の起点一帯の立地は、首里城、弁ヶ嶽、汀志良次の三方からのびる三つの丘が接して浅い谷間をつくり、弁ヶ嶽を源とする川眞嘉川の上流が流れている。一方、首里古地図によれば鳥小堀村(現鳥堀町)の中央部に、かなり広い面積を占めている「鳥小堀」とよばれた大池沼からの排水がこの谷間に流れ込み、前記の川に架かる「新橋」のたもとに深き、その一帯は水はけの悪いくぼ地になっている。この一帯には現在でも蛇行する深い溝跡と道路より低い宅地が集まり、往昔の姿をしるばせている。

参詣道は排水の悪いくぼ地を通り、弁ヶ嶽から連なる丘に上っていくが、坂は急勾配で、しかも丘の斜面の土質は赤土系の粘土で滑り易く、次につづく丘は「クチャ」とよぶ青灰色のシルト質粘土で雨天時には通行困難になる程深くぬかる土質である。当初参詣道はこの悪条件の丘づたいを上り下りする土道で、雨天時には通行困難をきたしたで

あろう。この坂の多い約一キロの土道に石を敷き、幅員九尺（約三米）の石畳道にし、更に道路の左右の土手に松を植える改修工事は多くの人手と時間を要し、当時としては一大土木事業であったに違いない。この大改修工事を竣工した官民の喜びは大きかったであろう。碑文は「ねがひ事、かなひ、よろこび、たのしむ事、かきりなし」と結んでいる。

この改修工事から百五十年くらいへた十七、十八世紀に作られた首里古地図には松並木はない（現在道路の左右に並木跡と思われる幅一米ほどの土手代が残っている）。

参詣道の起点「碑文の前」広場の上手のくぼ地で参詣道から分岐し、南の東苑（俗称御茶屋御殿）に至る古地図にある道は、後に分岐点を東よりに変え、新橋から真直ぐ南へのび、東苑に通じている。古地図にある新橋前の十字路から南へのびて鳥小堀の池沼の近くを通り、赤田、鳥小堀阿村の境界をなす道に合流する道も後に十字路の地点から東へ約二十米はなれた坂の途中で参詣道から南へ分岐する道に改められている。鳥小堀池沼からの排水は、くぼ地を蛇行して参詣道を斜に横切り、道の真下約三米のところにつくられた深い広い暗渠を通って新橋のたもとに注ぎ、くぼ地一帯の参詣道工事の困難の跡をとどめている（暗渠は戦後埋立）。

#### 〔出典資料〕

沖縄県教育委員会文化課『沖縄県歴史の道調査報告書 国頭中頭方西海道（下）弁ヶ嶽参詣道』

沖縄県教育委員会 昭和六十年三月

文献資料 14

首里口説

- 一 我身や西原二才やしが ிரிがさ清ら瘡願やびて  
嶽の嶽々願立てて
- 二 嶽の高さや弁の嶽 村のまぎさや鳥小堀  
町のまぎさや赤田町
- 三 酒屋多さや三ヶ村 御殿の多さや当藏  
寺のまぎさや円覚寺
- 四 小堀のまぎさや魚小堀 橋の美らさやだんかんの  
笠張り屋かんかん真和志村
- 五 囲のまぎさや首里城 鳥居の高さや上の鳥居  
道のまぎさや綾門道
- 六 坂小多さや観音堂 坂の高さや松川坂  
御門の多さや崇元寺
- 七 染屋の多さや泊村 橋の高さや泊橋  
道の長さや若狭町
- 八 二才小美らさや西東 あん小美らさや辻村  
港のまぎさや那覇港
- 九 船のまぎさや球陽丸 船の速さや金沢丸  
うりとなわしゆる運輸丸

〈出典史料〉

那覇市文化局歴史資料室 編集 『那覇市制75周年 詩歌集 那覇を詠う』  
那覇市 1997年3月28日

## 参考資料

### 【絵図資料】

#### 1. 首里古地図

「貴重資料デジタル書庫 首里古地図」  
『沖縄県立図書館所蔵』

#### 2. 首里古地図（弁ヶ嶽）

「貴重資料デジタル書庫 首里古地図 部分拡大図 弁ヶ岳」  
『沖縄県立図書館所蔵』

#### 3. 首里古地図（弁ヶ嶽 大嶽）

「貴重資料デジタル書庫 首里古地図 部分拡大図 弁之大嶽」  
『沖縄県立図書館所蔵』

#### 4. 首里古地図（弁ヶ嶽 小嶽）

「貴重資料デジタル書庫 首里古地図 部分拡大図 弁之小嶽」  
『沖縄県立図書館所蔵』

#### 5. 首里古地図

『嘉手納宗徳 縮図作成 一九六八年六月八日』  
『那覇市歴史博物館所蔵』

#### 6. 首里古地図（部分：弁ヶ嶽周辺）

『嘉手納宗徳 縮図作成 一九六八年六月八日』  
『那覇市歴史博物館所蔵』

#### 7. 旧首里の歴史民俗地図（部分：弁ヶ嶽から首里城周辺）

『那覇市史編集室 1978年12月作成』  
『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』付図 那覇市企画部市史編集室

昭和54年1月30日

#### 8. 那覇市歴史・民俗地図 【首里地区】 13 鳥堀町

『1976年6月 那覇市歴史博物館所蔵』

参考：『思い出のわが町 (21) 戦前の鳥堀町の民俗地図 沖縄タイムス社 1976年9月2日朝刊』

9. 図帳 勢頭方「弁之御嶽図」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P50 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

10. 図帳 勢頭方「拝礼の時の座構之図」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P49 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

11. 図帳 当方「大御嶽」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P82 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

12. 図帳 当方「弁之御嶽之図」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P82 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

13. 図帳 勢頭方「弁之小嶽図」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P49 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

14. 図帳：当方「小嶽之図」

『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』

参考：『首里城関係資料集』 P83 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 昭和62年3月

その他

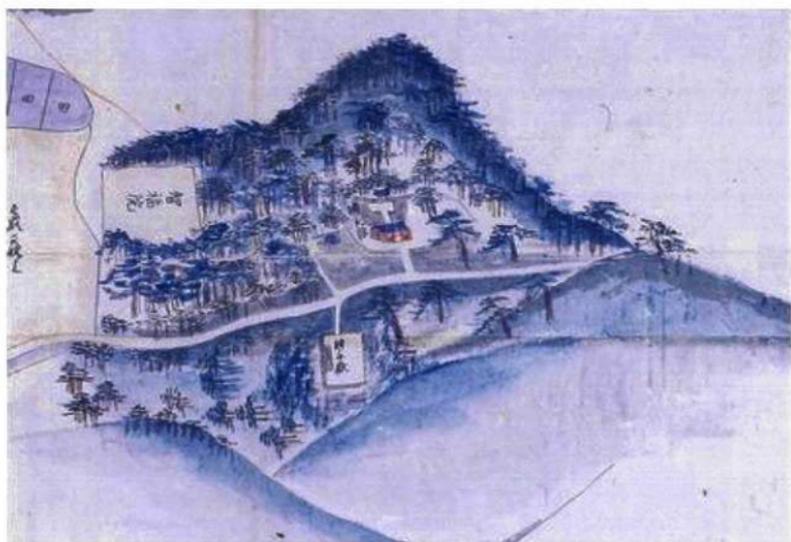
- ・「弁ヶ嶽平面図」

田辺 泰 『琉球建築』 株式会社 座右宝刊行会 昭和四七年一〇月二五日



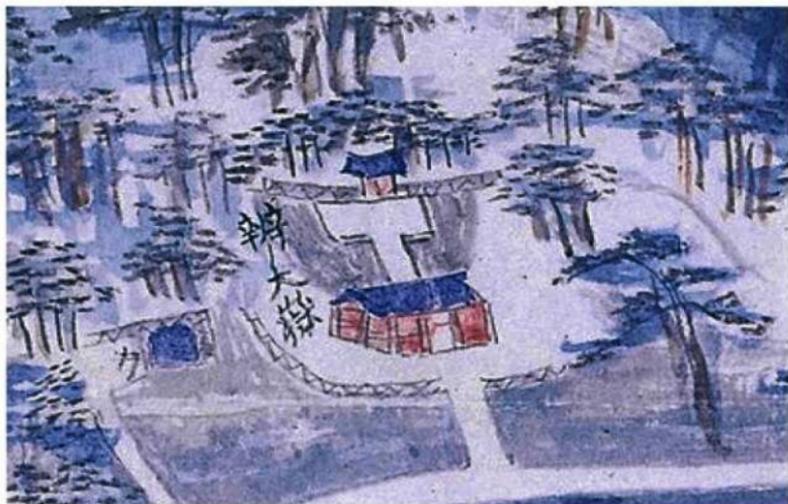
絵図資料 1 首里古地図

『首里古地図（全体） 沖縄県立図書館所蔵』



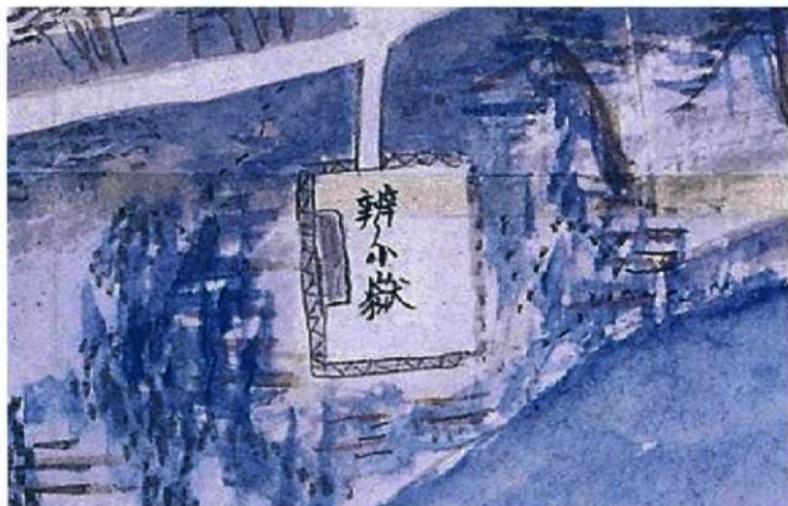
絵図資料 2 首里古地図（弁ヶ嶽）

『首里古地図（部分拡大図 弁ヶ岳） 沖縄県立図書館所蔵』



絵図資料3 首里古地図（弁ヶ嶽 大嶽）

『首里古地図（部分拡大図 弁之大嶽） 沖縄県立図書館所蔵』



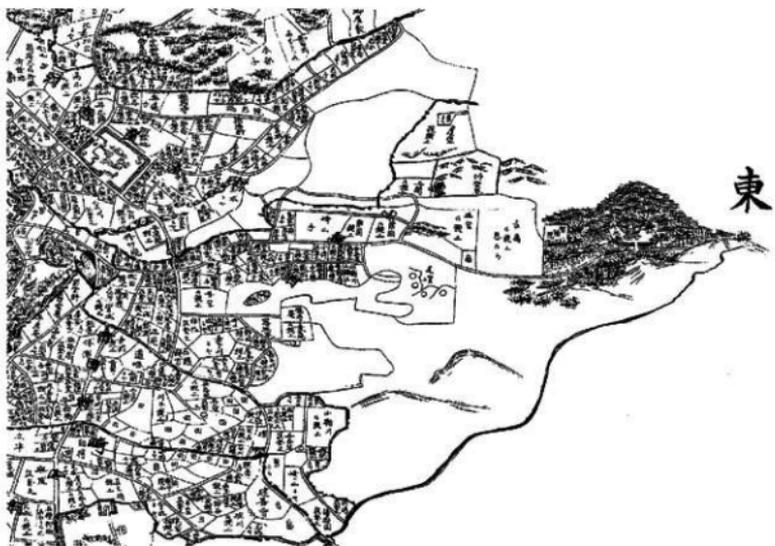
絵図資料4 首里古地図（弁ヶ嶽 小嶽）

『首里古地図（部分拡大図 弁之小嶽） 沖縄県立図書館所蔵』



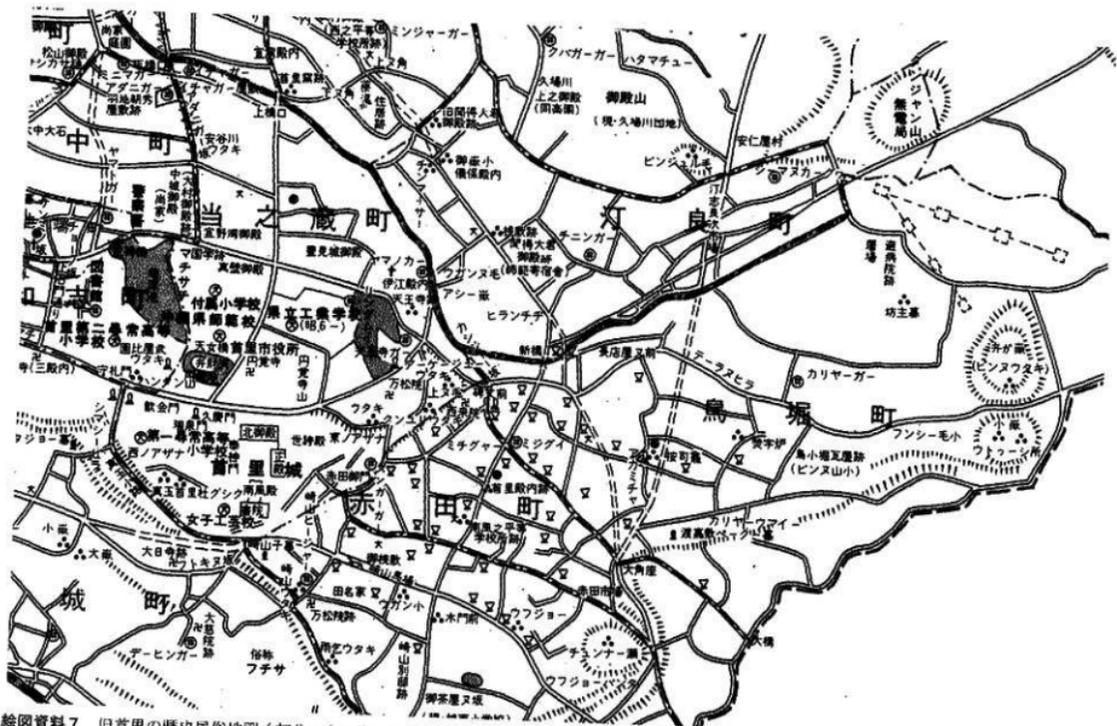
絵図資料5 首里古地図

『首里古地図 嘉手納宗徳作成』



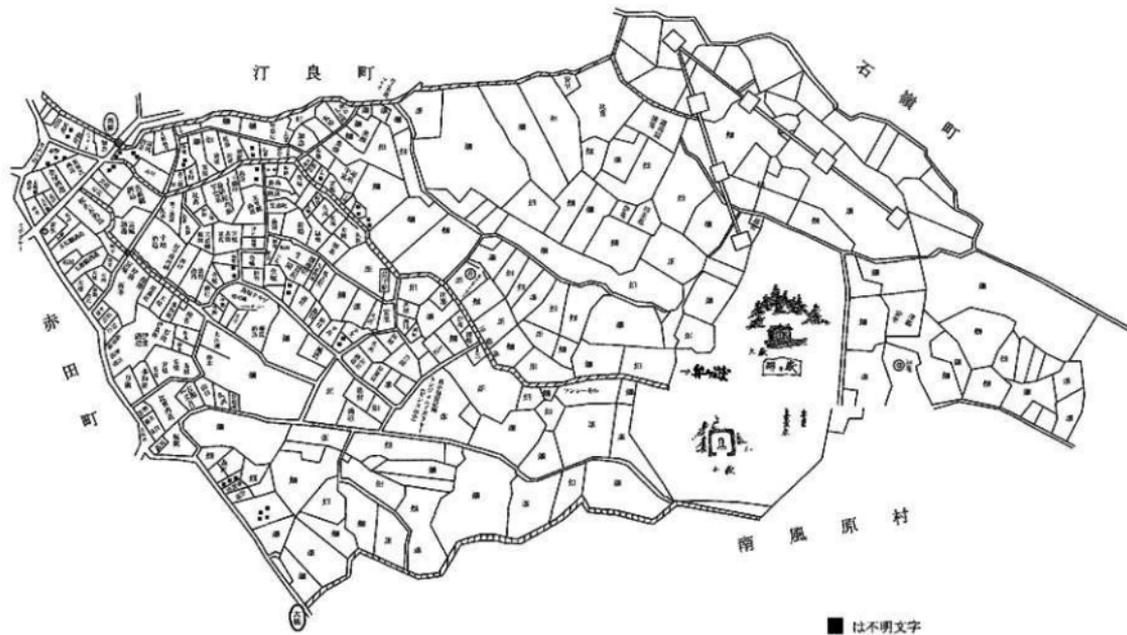
絵図資料6 首里古地図(部分: 弁ヶ嶽周辺)

『首里古地図 嘉手納宗徳作成』

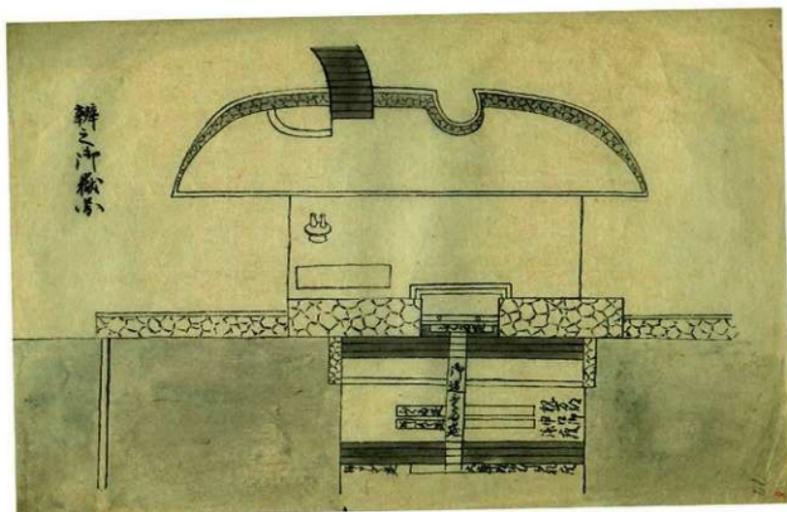


絵図資料 7 旧首里の歴史民俗地図 (部分: 弁ヶ嶽から首里城周辺)

戦前の鳥堀町民俗地図

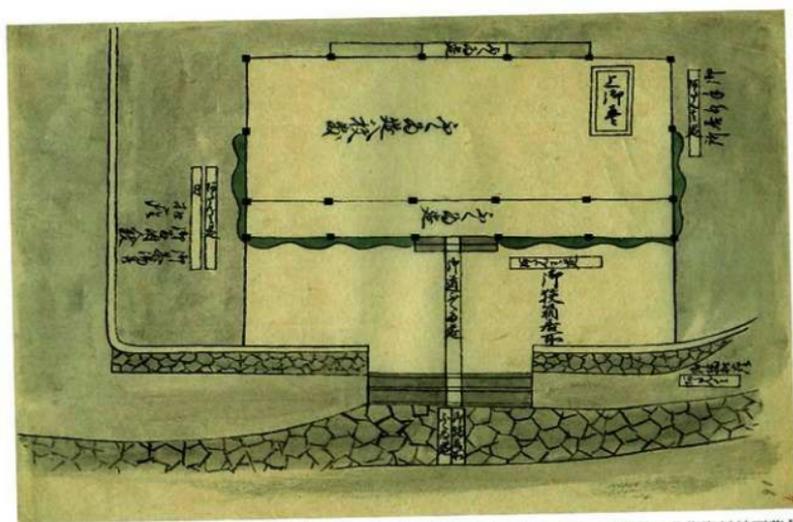


絵図資料8 那覇市歴史・民族地図『首里地区』13 鳥堀町

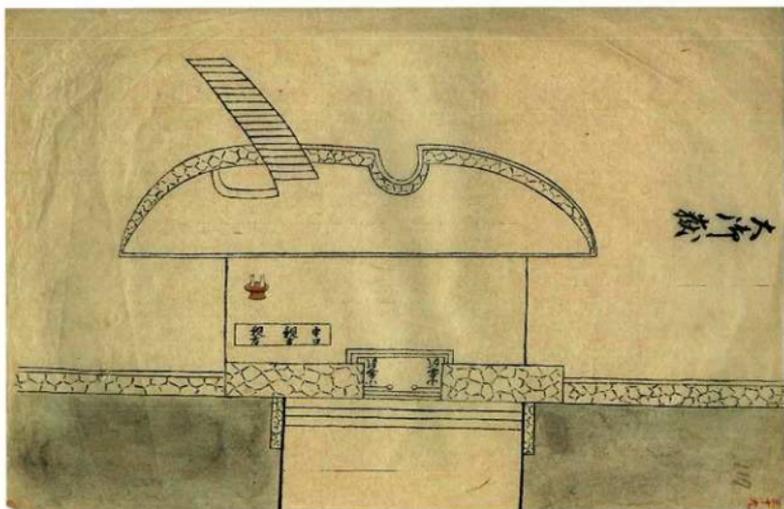


絵図資料 9 図帳 勢頭方「弁之御座図」

【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】

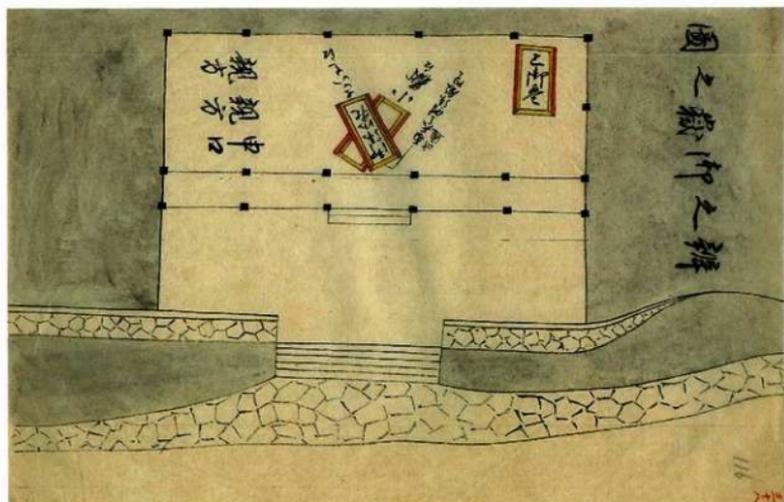


絵図資料 10 図帳 勢頭方「礼拝の時の座構之図」【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



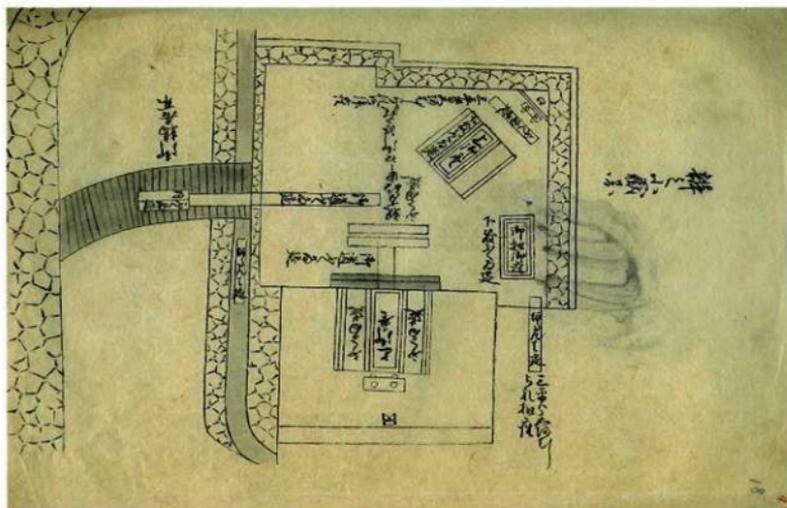
絵図資料 11 図帳 当方「大御殿」

【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



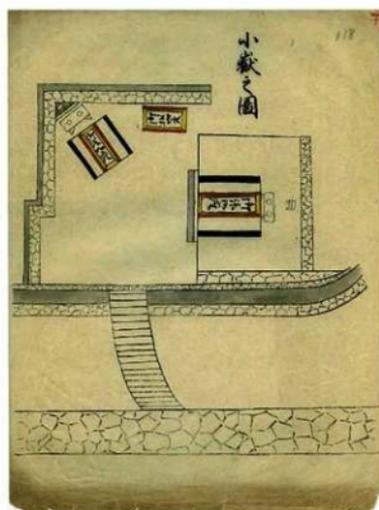
絵図資料 12 図帳 当方「弁之御殿之図」

【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



絵図資料 13 図帳 勢頭方「弁之小嶽図」

【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



絵図資料 14 図帳 当方「小嶽之図」

【沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵】

## 参考資料

### 【写真資料】

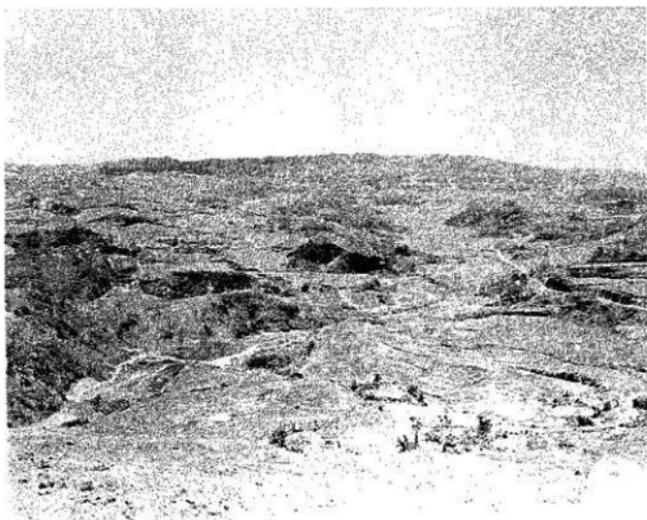
1. オーバーヒル（弁ヶ岳の東側の丘）からの眺め  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「占領初期沖縄関係写真資料 陸軍 34：写真番号 06-70-4」
2. 首里（汀良町？）  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「米空軍コレクション 第二次大戦シリーズ 02：写真番号 14-06-1」
3. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045125」
4. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045129」
5. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045126」
6. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045127」
7. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045128」
8. 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町  
『沖縄県公文書館所蔵』  
「琉球政府関係写真資料 161：写真番号 045124」
9. 艦砲射撃による無数の弾痕  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02014295」

10. 首里／首里三箇  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02004157」
11. 弁の御嶽 大嶽石門 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G494」
12. 弁の御嶽 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G485」  
参考：鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 P48 (写真 57) 株式会社 岩波書店 一九八二年十月十二日
13. 弁の御嶽 大嶽石門 正面 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G93」
14. 弁の御嶽 大嶽石門 正・側面 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G96」  
参考：鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 P49 (写真 58) 株式会社 岩波書店 一九八二年十月十二日
15. 首里／弁ヶ岳  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02004180」
16. 弁の御嶽 大嶽石門屋根 正面 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G1102」
17. 弁ヶ嶽 首里市  
多和田真重 『写真集 沖縄 失われた文化財と風俗』 那覇出版社 昭和五九年九月七日  
P104 「126 弁ヶ嶽 首里市」
18. 弁ヶ嶽遠望  
多和田真重 『写真集 沖縄 失われた文化財と風俗』 那覇出版社 昭和五九年九月七日  
P104 「127 弁ヶ嶽遠望」
19. 首里／弁ヶ岳  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02004181」
20. 首里／弁ヶ岳  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02008526」

21. 弁ヶ岳石門（国宝）  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02003512」
22. 復旧された弁ヶ嶽石門落成祝賀会  
『琉球処分百年記念出版写真集 激動の記録 那覇百年のあゆみ 琉球処分から交通方法変更まで』  
那覇市企画部市史編集室 昭和五五年三月二〇日 P156「復旧された弁ヶ嶽石門落成祝賀会」  
『那覇市歴史博物館所蔵』
23. 文化財・史跡／復興した弁ヶ岳  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02007905」
24. 拝所の石段と拝む男性 『鎌倉芳太郎撮影』  
『沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵』「資料番号 G845」  
参考：鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 P50（写真 59） 株式会社 岩波書店 一九八二年十月十二日
25. 弁ヶ岳で祈る  
『那覇市歴史博物館所蔵』  
「デジタルミュージアム写真資料 資料コード 02002128」

#### その他

- ・船越 義彰 監修『目で見る那覇・浦添の100年』 株式会社郷土出版社 二〇〇三年四月二八日  
P70 「弁ヶ嶽付近（那覇市・昭和7～8年頃）」
- ・田辺泰 『琉球建築』 株式会社 座右宝刊行会 昭和四七年一〇月二五日  
「107 弁ヶ嶽 首里市」



写真資料1 オーバーヒル（弁ヶ岳の東側の丘）からの眺め

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料2 首里（汀良町？）

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料3 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



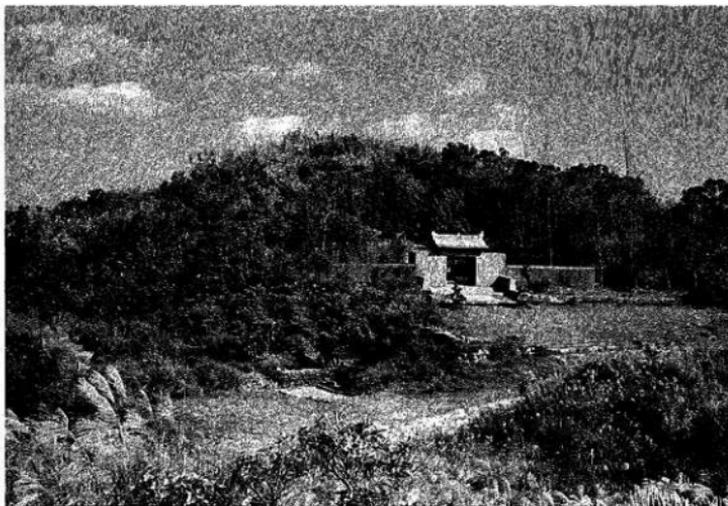
写真資料4 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



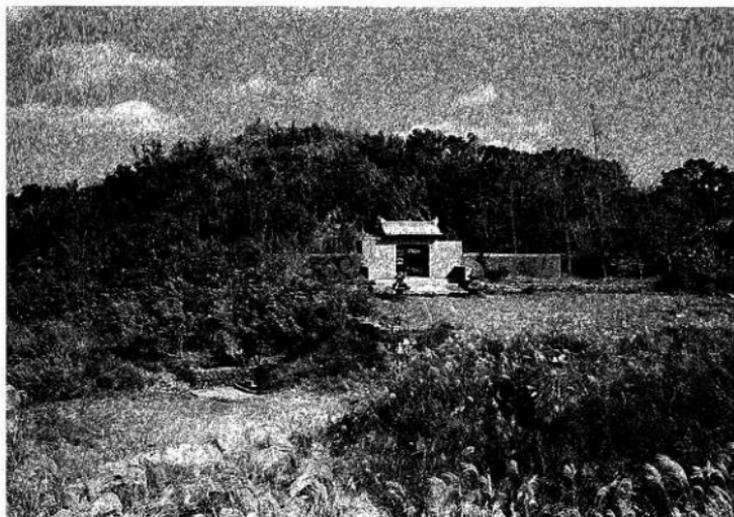
写真資料5 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料6 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料7 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料8 文化財 弁ヶ岳 那覇首里汀良町

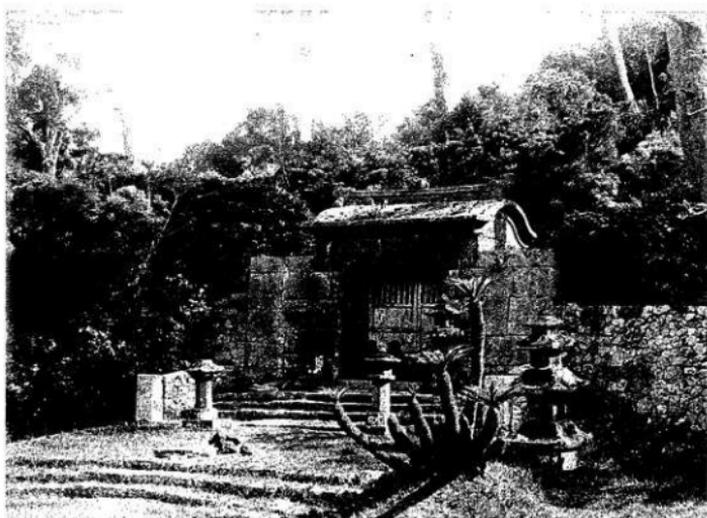
『沖縄県公文書館所蔵：写真が語る沖縄—デジタルアーカイブズ—』



写真資料 9 艦砲射撃による無数の弾痕 『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



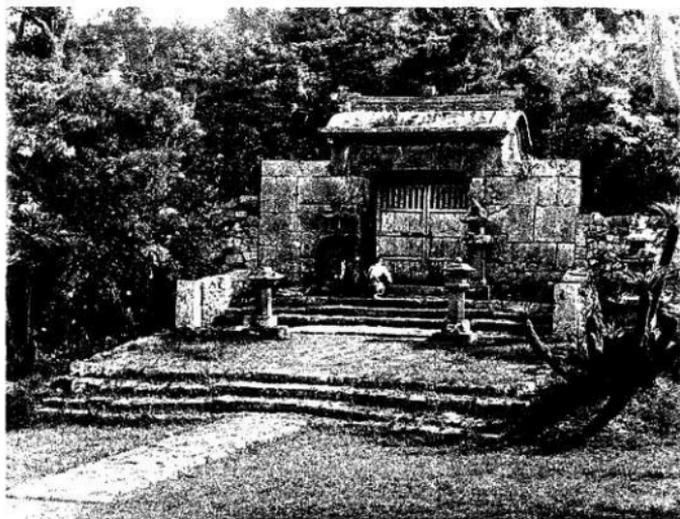
写真資料 10 首里 / 首里三箇 『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 11 弁の御嶽 大嶽石門

【鎌倉芳太郎撮影】

【沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



写真資料 12 弁の御嶽

【鎌倉芳太郎撮影】

【沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



写真資料 13 弁の御嶽 大嶽石門 正面

【鎌倉芳太郎撮影】

【沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



写真資料 14 弁の御嶽 大嶽石門 正・側面

【鎌倉芳太郎撮影】

【沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



写真資料 15 首里 / 弁ヶ岳

『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 16 弁の御嶽 大嶽石門屋根 正面

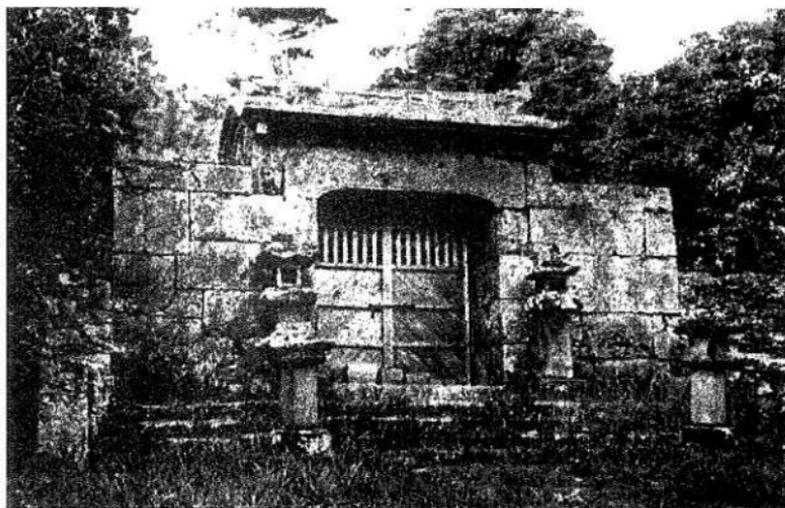
『鎌倉芳太郎撮影』

『沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵』



写真資料 17 弁ヶ嶽遠望

『写真集 沖縄 失われた文化財と風俗』



写真資料 18 弁ヶ嶽 首里市

『写真集 沖縄 失われた文化財と風俗』



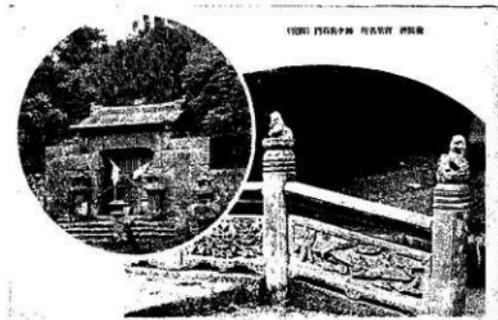
写真資料 19 首里 / 弁ヶ岳

『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 20 首里 / 弁ヶ岳

『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 21 弁ヶ岳石門（国宝）

左上、丸の部分

『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 22 復旧された弁ヶ嶽石門落成祝賀会

『写真集 那覇百年のあゆみ P156』  
『那覇市歴史博物館所蔵』



写真資料 23 文化財・史跡 / 復興した弁ヶ岳

『那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料』



写真資料 24 拝所の石段と拝む男性

【鎌倉芳太郎撮影】

【沖縄県立大学附属図書館・芸術資料館所蔵】



写真資料 25 弁ヶ岳で祈る：小嶽（戦後）

【那覇市歴史博物館デジタルミュージアム写真資料】

# 報 告 書 抄 録

ふりがな 書 名	弁ヶ嶽						
副 書 名	遺構確認調査報告						
巻 次							
シ リ ー ズ 名	那覇市文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号	第105集						
編 著 者 名	仲宗根啓・深澤秋人・栗国恭子・平良啓						
編 集 機 関	那覇市 文化財課						
所 在 地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 In098-917-3501						
発 行 年 月 日	西暦 2017年 3月 31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査面積	調査原因
弁ヶ嶽	沖縄県 那覇市 首里島堀町	47201	26度 13分 4秒 (世界測地系)	127度 43分 53秒 (世界測地系)	20140218 ～ 20140325	約100㎡	遺構確認調査
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
弁ヶ嶽	拝所	近世～近代	敷石遺構		白磁 青花 褐釉陶器 本土産磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 甕 円盤状製品 煙管 土器 ガラス製小玉 石製品 瓦 銭貨	敷石遺構の 検出	
要 約	今回の調査は、沖縄県指定史跡「弁ヶ嶽」の遺構範囲確認調査を実施した。石門の前に所在していたとされる「拝殿」の遺構確認を主な目的とした。建物に伴う礎石は、確認できなかったものの敷石遺構の検出は、貴重な成果であった。敷石遺構の下部の造成土（第②層）から、多くの銭貨が出土したことは特筆される。また、調査区の下層（第④層）から得られた土器については、周辺一帯に、グスク時代の遺跡の所在する可能性が示唆され、今後注意が必要であろう。						

---

那覇市文化財調査報告書第105集

弁ヶ嶽

—遺構確認調査報告—

発行 2017（平成29）年3月31日  
那覇市  
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課  
TEL 098-917-3501  
FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 クリップ  
〒902-0075 沖縄県那覇市字国場 951  
TEL 098-836-0650

---